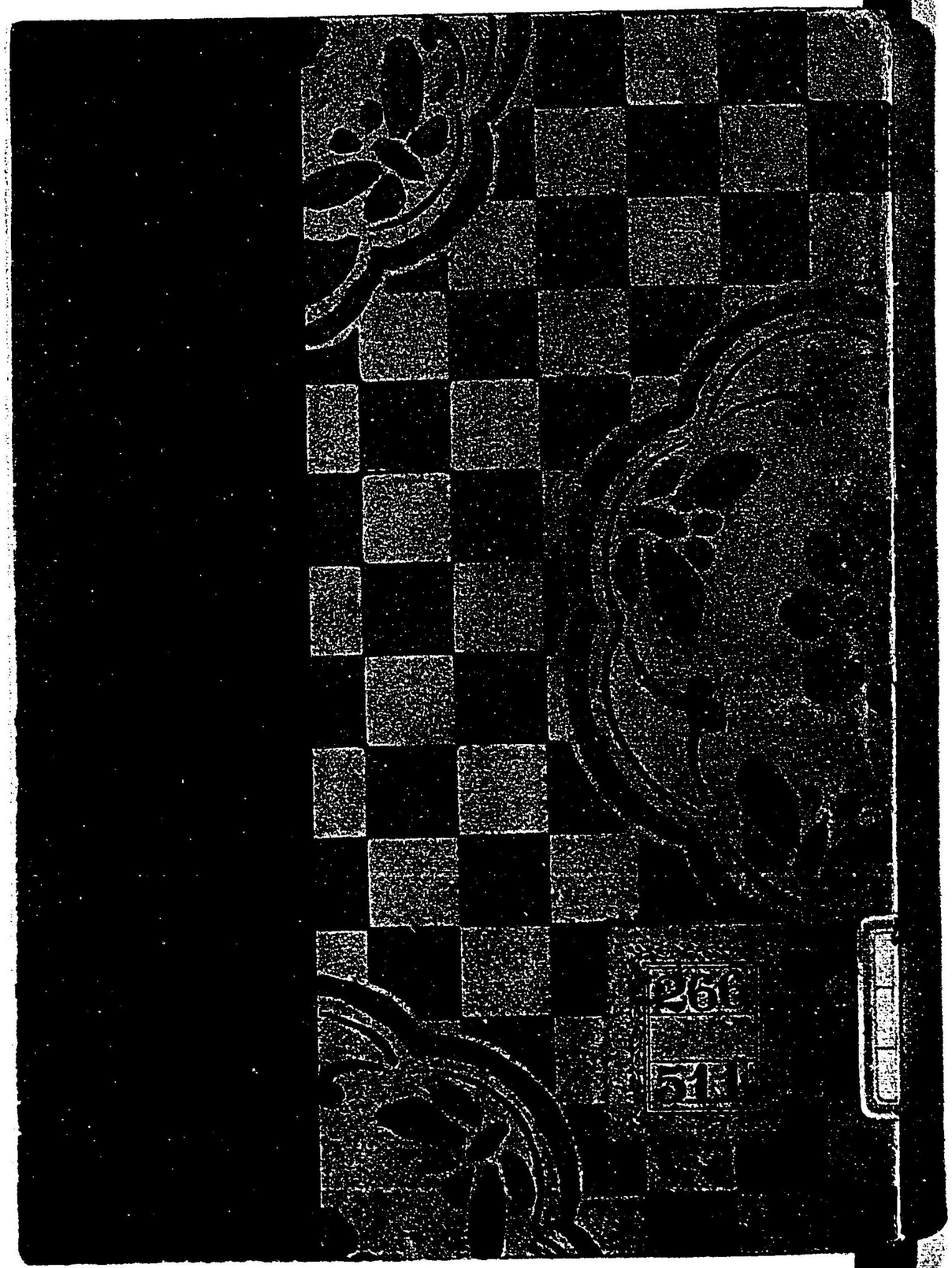

089058-001-2

特63-419

増鏡（頭註）

村上　寛／注

上

M44

DBL-0303

特63
419

増鏡

上卷

明治
44.10.21
内交

緒言

一、增鏡は後鳥羽天皇の御治世より後醍醐天皇元弘三年まで百五十年間の事を記せる鎌倉時代の假字歴史なり。叙述の體裁は大鏡、水鏡などに似せて、嵯峨の清涼寺にて、年老いたる尼の物語れるを聽き書きせるさまに作れり。承久の亂、元弘の王政、さては皇室両統の起伏、北條氏の跋扈など憚る所なく寫し出だしたれば歴史家の資料たるは勿論、その文の流暢にして優雅なるは亦以つて文を學ぶものゝ典範たるべし。

一、著者は一條兼良といひ、又は同冬良といひ傳へたれどその然らざるは確證あり。柳原紀光は一條經嗣なり

と斷定したれど、素より徴すべき信證のあるにもあらねば未だ俄に信を措き難しただ伴信友の南北朝頃の作なるべしといへる說穩當なるが如し。

一、この書は初學者に便ぜんがために上欄にやゝ難解の語をあげて註釋し、尙、傍註をも加へたり。しかも紙數に限りあるを以つて、要を摘むを主とし、一たび前に出だせるものは、後、再び之れを出ださず、蓋己むを得ざるなり。故を以つて卷末更に索引を付し、搜索に便せり。見る者之れを諒とせよ。

明治四十四年七月

巽溪識

頭註 增鏡 上 目次

第一 おどろの下……七頁
嘉永二年より建保六年まで、後鳥羽、土御門、順德三代の事を記せり。

第二 新島もり……四一頁
建保七年より承久三年まで、源氏北條氏の起りし事、承久の乱の事、後鳥羽、土御門、順德三上皇配流せられ給ふ事などを記せり。

第三 ふぢ衣……七一頁
貞應元年より延應元年まで、後堀河、四條二代の御事、後鳥羽、土御門、仲恭天皇崩御の事を記せり。

第四 三神山……九〇頁
仁治二年より同三年まで、四條天皇の崩御より、後嵯峨天皇御踐祚の事などを記せり。

第五 內野の雪……一〇一頁
仁治三年より寛元四年まで、後嵯峨、後深草二代の御事、西園寺家の繁榮後深草の御受禪、賴嗣將軍宣下の事などを記せり。

第六 おりゐる雲……一四二頁

目次

後深草天皇康元元年より、正元元年御譲位までの事を記せり。

第七　烟の末々……一五八頁

寶治二年より建長七年まで、内膳屋火事、閑院内裏の炎上、都の大火などを記せり。

第八　北野の雪……一七六頁

文永三年より同四年まで、次編と重複せり。

第九　山のもみぢ葉……一九四頁

正元元年亀山天皇御即位より文永四年後宇多天皇御降誕までの事を記せり。此の編前の北野の雪と重複せる記事あり。

第十　あすか川……二一三頁

亀山天皇文永五年より同十一年御譲位までの事を記せり。

第十一　草まくら……二四五頁

文永十一年より建治二年まで、後宇多天皇御受禪、北條時宗両統更立の奏議などを記せり。

目次終

頭註　増鏡　上

興溪村上寛註

きさらぎの中の五日。二月十五日▲鶴の林に云々。釋迦如來の入滅せる日をいふ。涅槃經序品に、二月十五日臨涅槃時云々。爾時拘尸那城娑羅樹林其林變白猶如白鶴また法華經序品に佛此夜滅度如薪盡火滅▲如來二傳の云々。世尊入滅の時拔嗟國主優塡大王之れを悲み毘須羯天の化工に旃檀の木

「さらぎの中の五日は、鶴の林に薪つきにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺に詣でて、常在靈鷲山など心のうちに唱へて拜み奉る傍に八十にもや餘りぬらんと見ゆる尼一人鳩の杖にかゝりてまゐれり。とばかりありて、うたがはしく思ひたちつれど、いと腰痛くて堪へ難し。今宵はこの局にうちやすみなん。坊へ行きてみわかしの事などいへ」とて、具したる若き女房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり。「釋迦牟尼佛」とたび〳〵申して、夕日のはるやかにさし入り

たるをうち見やりて、「あはれにも山の端近くかたぶきぬめる日かげかな。我が身の上の心地こそすれ」とて、寄りゐたるけしき、何となくなまめかしく、心あらんかしと見ゆれば、近くよりて、「いづくよりまうで給へるぞ。わりつる人の歸りこんほど、御伽せんはいかが」などいへば、「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遥けき心地し侍る。あはれになん」といふ。「さてもいくつにかなり給ふらん」と問へば、「いさ、よくも我れながら思ひ給へわかれぬほどになん。百とせにもてよなくあまり侍りぬらん。こしかたゆく先、ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりは、つゝがなくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし」などいふも古代にみやびかなり。年の程など、聞くも珍しき心地して、かゝる人こそ昔

たにその肖像を刻せしむ後東晉孝武帝の時初めて支那に傳へ、我が邦の僧齋然入宗せし時又これを持ち歸りて嵯峨清涼院に置けり。之れをいふ▲清涼寺。山城葛野郡上嵯峨▲常在靈鷲山。法華經壽量品の偈の語▲鳩の杖。老人の携ふる杖▲我が身の上の云云。夕日の山に傾けるを我が年の傾き老いたるに似たりと云ふ也▲伽。話の相手也▲いさ。不知の意▲思ひ給へ。給へに二義あり四段に活用するは相手を尊敬し、下二段なるは自ら卑下す。こゝは後の意。この語後に多く出づ▲古代。ふるめかしき義▲みやび。上品▲すげみたる口。齒のぬけてまばらに見ゆる老人の口つき▲ぬばた

物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ「昔の事のきかまほしさまゝに、年の積りたらん人もがなと思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少し宣はせよ。自らふるき歌など書きおきたる物のかたはし見るだにその世にあへる心地すぞかし」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでか聞えん。若かりし世に見聞き侍りしことは、こゝらの年比に、ぬば玉の夢ばかりだになく、おぼほれて、何のわきまへか侍らん」とは言ひながら、けしうはあらず、あへなんと思へる氣色なれば、いよ〳〵言ひはやして、かの雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉をこそ假字の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごとかいひしつくも髪の物語も人のもてわつかひぐさになれるは御ありさまのやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ」などす

ま。黒しといはん枕詞▲あへなん。應ぜんといふ義▲假字の日本紀。假字にてかきたる歴史といふ意。大鏡をさす。大鏡は雲林院の菩提講に翁二人と嫗一人と來あひて互に物語れるを記せるさまにかけり▲つくも髪の物語。今鏡といふ▲あさましき身。卑しき身の意自らいふ也▲水鏡。神武天皇より仁明天皇嘉祥三年までの假名の歴史▲世繼さか云々。榮花物語也。村上天皇より堀河天皇までの歴史。四十帖に分でり▲今鏡。後一條天皇より高倉天皇までの歴史。作者不詳▲いや世繼。彌世繼二卷。今不傳▲その後。土御門天皇より後をさす▲たどたどし。たしかならぬをいふ▲少しなん

かせば、さは心うべかめれど、いよ〳〵口すげみがちにて、「往時そのかみはげに人の齡も高く、ひて、たましひもあきらかにてや、しか聞えつくしてん。わさましき身は、いたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりて侍れば、まして怪しきひが事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ」といふ。「いさ、ただおろ〳〵見及びしものどもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代より、いとあらゝかに記せり。その次には大鏡、文德の古より、後一條の御門まで侍りしにや。又、世繼とか四十帖のそうしにぞ、延喜より堀川の先帝まではすてしこまやかなる。又なにがしのおとどの書き給へると、聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の、後鳥羽院の御位の御程までをしるしたりとぞ見え侍りし。其の後の事なん、いと覺束なくなりにける。覺えたまへらん所々までものたまへ。てよひ誰れも御伽せん。かゝる人に逢ひ奉れるも、然るべき御契あらんものぞ」などかたらへば、「そのかみの事はいみじうたど〳〵しけれど、誠に事のつづきと聞えさらんも、おぼつかなかるべければ、たえだえに少しなん。ひが事ども多からんかし。そはさしなほしたまへ。いとかたはらいたきわざにぞ侍るべきかな。かのふるき事どもにはなぞらへ給ふまじうなん」とて、

おろかなる心や見えんます鏡
ふるき姿にたちはおよばで。

とわなゝかし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば今宣はん事をも、また書きしるして、かのむかしの面影に、ひとしからんとこそはおぼすめれ」といらへて、

いまもまたむかしをかけばます鏡
ふりぬる代々の跡にかさねん。

。すこし語るべしと也▲ます鏡。眞澄鏡の畧。鏡のすみたるをいふ▲わなゝかす。うちふるふをいふ▲昔の面影。大鏡などの昔の書物のやうに同じくあらせんとの意▲おぼすめれ。思はれるならん。さてこの下に、我れも昔の人の如く筆者となりなんとの意を加へて見るべし。

御門はじまり給ひて。神武天皇を人皇第一代と定め給ひてこのかた▲信隆。中納言藤原經忠の孫。左京大夫信輔の子▲后の宮。建禮門院▲御覽じはなたず。御寵愛なるをいふ▲その年。治承四年▲おり給ふ。御讓位になるをいふ▲時の花を云々。時に逢ひて榮ゆるを花にたとへていふ▲けちえん

第一　おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代にあたりて後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしのむすめなり。高倉院御位の御時后の宮の御方に、兵衛督の君とて仕うまつられし程に、忍びて御覽じはなたずやありけん。治承四年七月十五日、生れさせ給ふ。その年の春の頃、建禮門院后宮と聞えし御腹の第一の御子三になり給ふに位をゆづりて、御門はおり給ひにしかば平家の一族のみ、いよ〳〵時の花をかざしそへて、花やかなりし世なれば、けちえんにもてなされ給はず。またの年養和元年正月十四日に院さへかくれさせ給ひしかば、いよ〳〵位な

どの御のぞみあるべくもおはしまささりしを、かの新帝平家の人々にひかされて遙なる西の海にさすらへ給ひにし後、後白川の法皇御孫の宮たちわたし聞えて見奉り給ふ時、三の宮を次第のまゝにと思されけるに、法皇をいといたう嫌ひ奉りて、泣き給ひければ「あなむづかし」とてゐてはなち給ひて、四の宮ここにいませと宣ふに、やがて御膝の上に抱かれ奉りていとむつまじげなる御氣色なれば、「これこそ實のうまごにおはしけれ。故院の兒おひにもまみなど覺え給へり。いとらうたし」とて、壽永二年八月二十日、御年四にて位に卽かせ給ひけり。内侍所神璽寶劒は讓位の時、必ずわたる事なれど、先帝筑紫にゐておはしにければこたみ始めて三種の神器なくて。珍らしき例になりぬべし。後にぞ内侍所しるしの御箱ばかり歸り上りにけれど

。揚焉。きはやかに目だちたる也▲さすらへ。流浪するをいふ▲御孫の宮たち。惟明親王及び尊成親王をさす▲三の宮。惟明親王▲あなむづかし。あゝ煩はし▲四の宮。尊成親王▲故院。高倉▲兒おひ。子供だちの時▲まみ。目つき▲らうたし。可愛らし▲内侍所。神鏡をいふ▲神璽。八尺瓊曲玉▲寶劒。天叢雲劒▲珍らしき例。神器なくして御位につき給へるをいふ▲ただよふ。漂泊し給ふ也▲かしこ。筑紫をさす▲御禊。天皇荒見河に行幸してみそぎの祓し給ふ▲大嘗會。主基。この解長ければこの卷の終に拾遺として出せり▲八束穗。幾にぎりもあるほど長き穗をいふ▲しなひ。實

寶劒はつひに先帝の海に入り給ふ時、御身にそへて沈み給ひけるこそいとくちをしけれ。かくてこの御門、元暦元年七月廿八日御卽位、その程の事、常のまゝなるべし。平家の人々、未だ筑紫にただよひて、先帝と聞ゆるも、御てのかみなれば、かしこに傳へ聞く人々の心地、上下さこそはありけめと思ひやられていとかたじけなし。同年の十月二十五日に御禊。十一月十八日に大嘗會なり。主基がたの御屏風の歌、兼光の中納言といふ人丹波の國長田村とかやを、

神代よりけふのためとや八束穗に、
長田の稻のしなひそめけん。

御門いとおよすげて、かしてくおはしませば法皇もいみじうつくしとおぼさる。文治二年十二月一日、御書始させたまふ。

のりて垂れたるをいふ▲およすげ。年に似合はず智慧づく▲御書始。始めて御書を讀み給ふ儀▲女御。天皇のめさるゝ宮人。さてこの女御は任子と申す方也▲立后。皇后又は中宮に册立したまふをいふ▲元服。初めて冠を加ふるをいふ。天皇冠禮は淸和天皇に始る▲四方の海云々。此卷の終拾遺

御年七なり。同六年女御まねり給ふ。月輪關白殿の御むすめなり。立后ありき。後には宜秋門院ときこえし御事なり。この御はらに春花門院と聞えたまひし姫宮ばかりおはしましき。建久元年正月三日十一にて御元服し給ふ。同じき三年三月十三日に法皇（後白河）かくれさせ給ひにし後は御門ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜に、ふく風も枝を鳴さず。世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪、秋津島の外まで流れ、しげき御惠、筑波山のかげよりも深し。萬の道々にあきらけくおはしませば國に才ある人多く、昔に耻ぢぬ御代にぞありける。中にもしき島の道なんすぐれさせ給ひける。御歌、かず知らず、人の口にある中にも、

おくやまのおどろの下もふみわけて

を見よ▲敷島の道。和歌の道をいふ▲人の口にある。人口に膾炙するをいふ▲おどろ。バラ也。北條氏の事横をよみ給へるなるべし。さてこの歌によりて此の卷の名は出でたる也▲まだしかるべき。未だ御讓位には早かるべき云々▲所せき。所狹きにて、窮屈なるをいふ▲鳥羽院。山城紀伊郡▲

みちある世ぞと人に知らせん。

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほどしるく聞えて、いといみじくやんごとなくは侍れ。建久九年正月十一日、第一の御子（土御門院）四になり給ふに、御位ゆづり申させ給ひており給ふ。御年十九。位におはします事十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、萬所せき御ありさまよりは、なか〳〵やすらかに御幸など御心のまゝならむとにや。世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。鳥羽院白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へど、猶又水無瀨といふ所にえもいはずおもしろき院つくり、しば〳〵かよひおはしましつゝ、春秋の花もみぢにつけても、御心ゆくかぎり、世をひびかして、あそびをのみぞしたまふ。所

白河殿。同愛宕郡▲水無瀬。同乙訓郡▲ひびかす。驚かすこと▲とりわきてこそは。別段に名歌あられたりと也▲山もと。山の麓▲なに思ひけん。なぜさう思うたのであらう▲廊。渡殿。正殿より對の屋などに通ふ所▲霞の洞。上皇御所を仙人の栖處にたとへていふ▲前栽。うゑごみ▲下臈。位

がらもはるばると川に臨める眺望いとおもしろくなん。元久の頃詩に歌をあはせられしも、とりわきてこそは。

見わたせば山もとかすむみなせ川
ゆふべは秋となに思ひけん。

かやぶきの廊、渡殿など、はるばると艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、こけふかきみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々わまた召して、御遊などありける後、定家の中納言、未だ下臈なりける時に奉られける。

あり經けんもとの千とせにふりもせで
わが君ちぎるみねのわか松。

ひくきをいふ▲あり經けん云々。拾遺を見よ▲いはこす數。水の岩をこえてとばしりの散る數をいふ▲今の御門。土御門▲能圓法印。法印は僧官。能圓は法勝寺の執行▲北の方。貴人の妻の尊稱▲御さいはひ。土御門院を生み奉りしこと▲御冠したまふ。御元服あらせらるゝ也▲ぬるく。緩なる

きみが代にせきいるゝ庭をゆく水の
いはこす數は千世も見えけり。

今の御門の御諱は爲仁と申しき。御母は能圓法印といふ人のむすめ、宰相の君とて仕うまつれる程に、この御門生れさせ給ひてのちには內大臣通親の御子になり給ひて末には承明門院とぞきこえき。かの大臣の北の方の腹にておはしければ、もとより後の親なるに御さいはひさへひき出で給ひしかば、まことの御女にかはらず、この御門もやがてかの通親の殿にぞ養ひ奉らせ給ひける。かくて建久九年三月三日御卽位、十月廿七日に御禊、十一月廿二日は例の大嘗會なり。元久二年正月三日御冠したまふ。いとなまめかしくうつくしげにぞおはします。御本性も、父御門よりは少しぬるくおはしましけれど、御情ふかう、物のあはれな

ど聞し召しすぐさずぞありける。今の攝政は院の御時の關白通基のおとど。そののちは後京極殿良經ときこえ給ひし。いと久しくおはしき。このおとどはいみじき歌の聖にて院のうへ同じ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきさびはにおはしましゝかばにや、御製も見えざめるを當帝位の御程に、また集めさせ給ふ。土御門の内のおとど二郎君、右衛門督通具といふ人をはじめにて、有家の二位、定家の中將、家隆、雅經などにの給はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。おの〳〵奉れるうたを院の御前にて自らみがきとゝのへさせ給ふさま、いとめづらしくおもしろし。この時も先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。大方、古、奈良の御門の御代に、始めて左大臣橘の朝臣勅をうけ給ひて、萬葉

こと▲聞し召し云々。聞きすてにせられざる也▲いみじき。甚しき義▲歌の聖。歌よむことの極めてすぐれたること▲千載集。歌集也廿卷。文治三年藤原俊成撰▲きびは。幼雅の意▲見えざめる。見えざるめるの畧▲みがきとゝのふ。更に撰せらるゝ也▲萬葉集。歌集廿卷。橘諸兄撰す。さて又奈良の御門の御代とは奈良朝をさしていへる也▲延喜の聖。醍醐天皇▲古今集。廿卷。紀貫之等撰▲天暦。村上天皇の御代▲和歌所。拾遺を見よ▲梨壺。拾遺を見よ▲後撰集。廿卷。梨壺五人撰▲拾遺集。廿卷。拾芥抄には藤大納言公任撰とあり▲後拾遺集。廿卷應德三年成▲詞花集。十卷。天

集をえらびしよりこのかた、延喜の聖の御時の古今集、友則貫之躬恒忠岑。天暦のかしこかりし御代にも一條攝政殿兼通未だ藏人少將などきこえける比、和歌所の別當とかやにて、梨壺の五人におほせられて、後撰集は集められけるとぞ。ひがざさにや侍らん。そののち拾遺集は花山の法皇の自ら撰ばせ給へるとぞ。白河院位の御時は、後拾遺集、通俊治部卿うけ給はる。崇德院の詞花集は顯輔三位えらぶ。又白河の院おりゐさせ給ひて後、金葉集重ねて俊頼の朝臣におほせて撰ばせ給ひしこそはじめ奏したりけるに輔仁の親王の御なのりを書きたる、わろしとてなほされ、又奉れるにも何事とかやありて、三度奏して後こそさまりにけれ。かやうのためしもおのづからの事なり。おしなべて撰者のまゝにて侍るなれど、こたみは院のうへみづから和

養元年成▲金葉集。十卷。天治元年成▲御なのりを云々。拾遺にあり▲おしなべて云々。撰集の事は凡て撰者のまゝ也▲この撰集。新古今集をさす▲千五百番歌合。拾遺を見よ▲このなみ。此列にて諸歌人の列といふ義▲あて人。貴人▲つかさあさくて。官位の卑きをいふ▲そこひもなく。際限なく▲院の上。後鳥羽院▲世にゆりたる。世間の人に歌の上手と許されたる▲けしうはあらず。怪しくはあらずといふ義▲見ゆめれば なん。この下歌人の列に入れたりの語をいれて見よ▲まろ。自稱の代名詞▲おもておこす。名譽を得ること▲限りなきき。此の上なく歌道に熱心なること▲むがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院の上宣ふやう「こたみは皆世にゆりたるふるき道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなん。かまへてまろがおもておこすばかり、よき歌仕うまつれ」と仰せらるゝに、おもてうち赤めて涙ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきの程もあはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとりどりなる中に、

うすくこき野邊のみどりのわかくさに、
あとまで見ゆる雪のむらぎえ。

草のみどりのこさうすき色にて、こぞのふる雪の遲く疾く消ける程を推しはかりたる心ばへなど、まだしからん人は、いと思ひより難しや。この人年つもるまであらましかば、實にいか

撰集よりさきに千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝れたる限を撰ばせ給ひて、その道の聖たち判じけるに、やがて院もくはゝらせ給ひながら、なほこのなみにはたちおよび難しと、卑下させ給ひて、判のことばをばしるされず。御歌にてまさり劣れる志ばかりをあらはし給へり。なか〳〵いと艶に侍りけり。上のその道をえ給へれば、下も自ら時を知るならひにや、男も女も、この御代にあたりて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは村上の御門の御後に俊房の左の大臣と聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさあさくて、うち續き四位ばかりにてうせにし人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそいとあり

ばかり、目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くて失せにしいといとほしくあたらしくなん。かくてこのたびえらばれたるを
ば新古今といふなり。元久二年三月廿六日竟宴といふこと、春日殿にておこなはせ給ふ。いみじき世のひびきなり。かの延喜のむかし思しよそへられて、院の御製。

いそのかみふるきを今にならべこし
むかしの跡をまたたづねつゝ。

攝政殿

しきしまややまとことばの海にして
ひろひし玉はみがかれにけり。

つぎ〳〵ずんながるめりしかど、さのみはうるさくてなん。何となくあけくれて、承元二年にもなりぬ。十二月廿五日、二の

ちぎえ。雪の所々消えたるをいふ▲目に見えぬ云々。拾遺を見よ▲新古今。廿卷▲竟宴。攝集をはりたるにより宴を賜はる也▲延喜のむかし。古今集を攝ぜられしをいふ▲いそのかみ。古きの枕詞▲ひろひし玉。攝集せし歌をたとへたる也▲ずんながる。順流也。次第次第にの意▲うるさくてなん。多ければ煩しくて言はずと也▲かなしき者。いとほしき者の義▲いつくしう。嚴正にの義▲もてかしづく。御養育ある事▲かゝるを。御讓位をさす▲御心もゆかぬに。御得心なきに▲しぶらせ。いやがらせの義▲あてゆみやびやかなる事▲大どか。寛大▲思しむすぼほる。樂みたまはぬ事▲

宮御かうぶりしたまふ。修明門院の御腹なり。この御子を、院限りなくかなしき者に思ひ聞えさせ給へれば、二なくきよらを盡し、いつくしうもてかしづき奉り給ふ事なのめならず。遂に同じき四年十一月に、御位につけ奉り給ふ。もとの御門、今年こそ十六にならせ給へば、いまだ遙なるべき御さかりに、かゝるをいと飽かずあはれと思されたり、永治の昔、鳥羽の法皇、崇德院の御心もゆかぬにおろし聞えて、近衛院をすゑ奉り給ひし時は御門いみじうしぶらせ給ひて、その夜になるまで勅使をたび〳〵たてまねらせ給ひて、内侍所劔璽などをも渡しかねさせ給へりしぞかし。さてその御憤のすゑにてこそ保元のみだれもひき出で給へりしを、この御門はいとあてに大どかなる御本性にて思しむすぼほれぬにはあらねども氣色にも漏し給はず、

あへなき。甲斐なき義▲まいて。まして の音便▲胸いたく。甚だしく悲しく思さるゝ義▲御政事はかはらず。後鳥羽院政をさり給ふ事▲ながら山。近江滋賀郡▲すがのれ。菅の根也。長の枕詞▲この御代。順徳天皇の御代▲行幸は天皇にいひ御幸は上皇法皇にいふ。両者おのづから區別あり注意すべし▲春日の社の行幸。建保二年三月二十六日にこの行幸あり▲いどみつくし。爭ひて美麗をきはむ▲内。順徳天皇▲春日山。大和添上郡▲かどめく。才氣ある也▲ものす。凡て事をなすをいふ。何事によらずいふ也▲八雲。八雲御抄七卷順徳院の御著和歌の事を記されたり▲攝政殿。夏經▲

世にもいとどあへなき事に思ひ申しけり。承明門院などはまいていと胸いたく思されけり。その年のしはすに太上天皇の尊號あり。新院ときこゆればちゝの御門をば今は本院と申す。猶御政事はかはらず。今の御門は十四になり給ふ。御諫守成ときこえしにや。建暦二年十一月十三日大嘗會なり。新院の御時も仕うまつられたりし資實の中納言に、この度も悠紀がたの御屏風の歌めさる。ながら山、

すがのねのながらの山のみねの松
ふきくる風もよろづ代の聲。

「かやうの事は皆人のしろし召したらん。ことあたらしく聞えなすこそ、老のひが事とならめ」この御代にはいとけちえんなる事多く、所々の行幸しげく、このましきさまなり。建保二年、春日の社に行幸ありしこそありがたき程いどみつくし、おもしろうも侍りけれ。さてそのまたの年。御百首うたよませ給ひけるに去年の事思し出でて、内の御製。

かすがやまこぞのやよひの花の香に
そめしてゝろは神ぞしるらん。

御心ばへは新院よりも少しかどめいて、あさやかにぞおはしましける。御才もやまともろこしかねて、いとやんごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは和歌の道にてぞ侍りける。するの世に八雲などいふもの作らせ給へるもこの御門の御事なり、攝政殿の姫君まゐり給ひて、いと花やかにめでたし。この御腹に建保二年十月十日一の御子生れ給へり。いよ〳〵ものあひたる心ちして世の中ゆすりみちたり。十一月廿一日やがて親王にな

ものあふ。君臣合體せるをいふ▲坊。皇太子の御座所▲いかだに云々。五十日の御養産の儀も未だなきに▲いでやと云々。はや御位の望もかひなき事と思ひ給はんと也▲心のひき〳〵。心の好む處に從ひて▲小弓。揚弓の類▲さうどき。爭ひ騷ぐ▲興ある。而白き▲のり物。勝者に與ふる賭物也

し奉り給ひて同じ廿六日坊にゐたまふ。いまだ御いかだにきこし召さぬに、いちはやき御もてなしめづらかなり。心もとなく思されければなるべし。今一しほ世の中めでたく定りはてぬるさまなり。新院はいでやと思さるらんかし。かくて院のうへはともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴笛の音につけ、花もみぢのをり〳〵にふれて、萬の遊びわざをのみ盡しつゝ御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠によろづ世もつきすまじき御世のさかえ、つぎ〳〵今よりいとたのもしげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ心のひき〳〵に爭はせさせ給へば、あるは小弓雙六などいふ事まで思ひ〳〵に勝負をさうどきあへるもいとをかしう御覽じて、さまざまの興あるのり物どもとうでさせ給ふとてなにがしの中將を御使にて修明門院の御かたへ「何にてもをのこどもに賜はせぬべからん賭物」と申させ給ひたるに、とりあへず小き唐櫃の金物したるが、いと重らかなるを參らせられたり。この御つかひのうへ人、何ならんといぶかしくて片端はのあけて見るに錢なり。いと心得ずなりて、さとおもてうちあかみて、あさましと思へる氣色しるきを、院御覽じおこせて、「朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より殿上の賭弓といふ事には、これをこそかけ物にはせしかされば今かけものと聞えたるに、これをしもいだされたるなん古の事知りたまへるこそいたきわざなれ」とはゝゑみて宣ふにさはあしく思ひけりと心ちさわぎて覺ゆべし。大方、この院のうへは萬の事に至り深く、御心もはなやかに物にくはしうぞお

▲賜はせぬ云々。賭物の下にをおこせ給への語を入れて見よ▲唐櫃。足のあるひつ▲重らかなるを。重さうな物を▲うへ人。殿上人▲ほのあけ。少し開く義▲心得ずなる。金などを贈られたるを不審に思ふ也▲賭弓。拾遺を見よ▲いたきわざ。立派なる事也と也▲さは。ソレデハ▲至り深く。物

事の奥まで極め給へる事▲釣殿。池に臨める殿▲ひ水。氷水▲水飯。飯を水に漬す也▲上達部。公卿の事▲紫式部。藤原爲時女、宣孝妻、上東門院の女房たり▲源氏物語。小説也。五十四帖より成る▲ちかき川の鮎云々。拾遺に出せり▲御隨身。上皇執政大臣などに護衛として宮より給せらるゝ人▲高欄。御殿の椽のはしなる欄干▲ひろはば消えなん。拾遺を見よ▲かづく。拾遺を見よ▲當座。その場▲衆議判。別に判者を定めず、席上の人々評議し定むるをいふ▲あかしがた。播磨明石郡の海濱▲朝なぎ。朝風の靜りたる程▲北面。拾遺を見よ▲御かたて。御敵手。院の御歌に番ひたる

はしましける、夏の頃水無瀬の釣殿に出でさせ給ひて、ひ水めして水飯やうのものなど、若き上達部殿上人どもに給はさせて大御酒まゐるついでにも、「あはれ古の紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、ちかき川のあゆ、西川より奉れるいしぶしやうのもの御前に調じてと書けるなん勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの料理つかまつりてんや」など宣ふを秦のなにがしとかいふ御隨身、高欄の下近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なるさゝを少ししきて白き米を洗ひて奉れり。ひろはば消えなんとにや。「これもけしかるわさかな」とて御ぞぬぎてかづけさせ給ふ。何事もおいぎやうづきめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千とせを經とも飽く世あるまじかめり。又、清撰の御歌合として限りなくみがかせ給ひしも水無瀬殿にて

の事なりしにや。當座に衆議判なれば人々の心ちいとどおき所なかりけんかし。建保二年九月の頃勝れたる限りぬき出で給ふめりしかば、何れかおろかならん。中にもいみじかりし事は第七番に、左、院の御歌、

あかしがた浦路はれゆくわさなぎに
　霧にこぎいるあまのつりふね。

とありしに北面の中に藤原の秀能とて、年頃もこの道にゆりたるすきものなれば、召し加へらるゝ事、常のことなれど、やんごとなき人々の歌だにもあるは一首二首三首にはすぎざりしにこの秀能、九首までめされて、しかも院の御かたてにまゐれり。さてありつるあまの釣舟の御歌の右に、

　契りおきし山の木の葉の下もみぢ

をいふ▲秋風。秋に飽の意をきかせたり▲昔の躬恒が云々。拾遺を見よ▲貫之が家に云々。拾遺を見よ▲枇杷の大臣。仲平公▲魚袋。束帯の時腰につくるもの三位以上は金魚四位以下は銀魚▲西行法師。俗名佐藤憲清。歌人也▲むら〳〵。定れる數なく、各々ひとしからざるをいふ▲吉水僧正。

そめしころもに秋風ぞふく。

とよめりしは、その身の上にとりて、ながき世の面目、何かはあらんとぞきゝ侍りし。昔の躬恒が御はしのもとに召されて、ゆみはりとしもいふ事はと奏して御衣たまはりしをこそ、いみじきことにはいひ傳ふめれ。又貫之が家に枇杷のおとど、魚袋の歌の返しとぶらひにおはしたりしをも、みちの高名とこそ世繼には書きて侍れ。近き頃は西行法師ぞ、北面のものにて世にいみじき歌の聖なめりしか。今の代の秀能はほと〳〵ふるきにもたち勝りてや侍らん。この度の御歌合、大方いづれとなくうちみだして、勝れたる限りをえり出でさせ給ひしかば、各々むらむらにぞ侍りける。吉水の僧正ときこえし。又、たぐひなき歌の聖にていましき、それだに四首ぞ入りたまひにける。さのみは事長ければもらしぬ。この僧正世にもいとおもく、山の座主にてものし給ふことも年久しかりし。その程に、やんごとなき高名かず知らずおはせしかば崇められ給ふさまも、二なくものし給ひしかど、猶飽かずおぼす事やありけん。院に奉られける長歌。

さてもいかに　わしのみやまの　つきのかげ　鶴のはやしに
いりしより　經にける年を　かぞふれば　二千とせをも
過ぎはてゝ　のちのいつゝの　もゝとせに　成にけるこそ
かなしけれ　あはれ御法の　水のわわの　消えゆく頃に
なりぬれば　それに心を　すましてぞ　わが山川に
しづみゆく　心あらそふ　のりの師は　我れも〳〵と
あをやぎの　いと所せく　みだれきて　花ももみぢも

即慈鎮也。藤原忠通の子▲世にもいと重く。世人に重んぜらるゝ事▲山の座主。山とは比叡山延暦寺。座主は其の總管の職▲その程。座主たりし間▲わしのみやま。即靈鷲山釋迦の佛道を修せし處▲のちのいつゝの云々。五百年をいふ。二千五百年になりたりと也▲水のあわの。あわののは如

しの意▲心あらそふ云々。心しづまらぬ法師といふ事▲あをやぎの。下のいとに係る枕詞。いとは、最に糸をかねたり▲かひも渚の。なぎさにかひもなきのなきをきかせたり▲みつ川。山城美豆川。願をみつといひかけたり▲うの花。うに憂をいひかく▲くれはとり。呉機にて呉國より來れる機織。下のあやしきのあやにかゝる枕詞▲つくば山。常陸にあり。心をつくすといひかけ、下のしげきといはん序とせり。こは古今の序筑波山のかげよりもしげしとあるによりたる也▲つくづくと。熟々也。上の鐘をといふをうけて撞くをいひかけたり▲のりのむしろ。法筵。法會をいふ▲人をわ

散り行けば　木ずゑあとなき　みやまべの　道にまよひて
すぎながら　ひとり心を　とどむるも　かひも渚の
しがの浦　あとたれしまゝ　日よしの(助詞)や　神のめぐみを
たのめども　人のねがひを、　みつかはの　流れも淺く
なりぬべし　みねのひじりの　すみかさへ　苔の下にぞ
うもれゆく　道はらふべき　人もがな(アレバヨイニ)　あなうの花の
世のなかや　春のゆめぢは　むなしくて　秋のこずゑを
おもふより　冬の雪をも　たれかとふ　かくてや今は
あと絶えん　と思ふからに　くれはとり　奇しさよるの
我がおもひ　消えぬばかりを　たのみきて　猶さりともと
思ひつゝ　しばし都に　やすらひて　のこる御法の
花の香に　強ひてこゝろを　つくば山　繁きなげきの
ねをたづね　しづむむかしの　たまをとひ　救ふ心は
ふかくして　つとめゆくこそ　あはれなれ。　み山の鐘を
つくづくと　わが君が代を　思ふにも　峰の松風
のどかにて　千代にちとせを　添ふるほど　法のむしろの
花のいろ　野にも山にも　にほひてぞ　人を渡さん
はしとして　しばし心を　やすむべき　終にはいかが
あすか川　あすより後や　我がたちし　杣のたつきの
ひびきより　みねの朝ぎり　はれのきて　曇らぬ空に
たちかへるべき。

反歌

さりともとおもふ心ぞなはふかき
たえてたえゆくやまがはの水。

たさん橋。人を得度せしむるを川をわたす橋にたとへていふ▲あすか川。大和にあり。下のあすよりといはん料也▲わがたつ杣。比叡山延暦寺。開祖最澄、初めて根本中堂を創建せる時「あのくだら三みやく三菩提の佛たち、わがたつ杣に冥加あらせ給へ」とよめるよりいふ▲たつき。杣人の用ゐる斧をいふ▲朝霧はれのく。佛道の光あらはるゝをたとへていふ▲反歌。長歌の意を短歌につづめ、反復していふなり▲さりともと。サウハイフモノゝの義▲たえてたえ行く。絶え且つ絶ゆといふ意にて、一門の法水絶え絶えにして今やまさに危機にせまれるをいひたる也。

【大意】　釋迦如來入滅せしより今日に至るまで既に二千五百年に及び、世は澆季に至りしこそ悲しけれ。この佛法滅せんとする時に當りて余は獨、心をすまして身を比叡の深山に潜め、佛道修行に餘念なし。然るに心靜まらぬ法師どもは我れも〳〵と所狹きまで駈け集まるかと見れば、忽ち去りて、眞に求法の念あるものなく、集散常ならねば、深山に道ふみ迷ふ如くにて、佛道を修めんたよりもなし。故を以て獨、心をとどむれども、そのかひなくて、ただ空しくこゝに月日を送るのみ。志賀の浦に垂跡せる日吉の神の惠をたのむといへども末の世になりたる今日なれば神威もうすく、我が願も滿すに由なし、山門の堂舍僧房もあれはてたり。あはれ力ある人、來りてこの道を拂ひ清めて、舊時の如く莊嚴ならしめよ。いかに物憂き世なるかな。春夏秋冬一人の訪ひ來るものなく、わが山住も忘れはてられたり。かくてはこの山門の名跡も絶えやしぬらんと思ふより、終夜思ひねに消えいらんばかりなるを、猶さりとも佛法興隆の運にも逢ふを得んかと心に頼みて、都にとどまり休らひて、僅に殘れる御法の花の香に强ひて心を注げるなり。かく一方ならざる歎をするその根源を尋れ、失せにし人の靈を訪ひ、いかにもして山門の衰運を挽回せんとする救助の念深くして、その道に辛勞する心いかにあはれならずや。つら〳〵我が君の代を思ふにつけ、再び山門を興隆し、千年の後までも法會を絶たず、萬民を得道濟度すること昔の如くならんには我が年來の願なはたし、その辛勞を慰むるを得べしされども我が身不德にしてこの宿願を果さんこともおぼつかなかるべし。ただ後更に高德の人出で、宗祖傳教大師の遺德によりて、蔽へる台嶺の雲霧はれ量りなき光明を世に放たん昔に立ち歸るを待つ。

定家の中將、折ふし御前（おんまへ）にさぶらひければ、この返しせよとてさしたまはする。げにいと疾く書きて御覽（にらん）せさせけり。

ひさかたの　あめつちともに　かぎりなき　あまつ日つぎを
ちかひてし　神もろともに　まもれとて　我がたつそまを
いのりつゝ　むかしの人の　しめてける（定メタル）　峰のすぎむら（杉叢）
色かへず　いくとしどしを　へだつとも　八重のしら雲

げにいと疾く。定家卿は當時の宗匠なればその名にそむかずいとすみやかに也▲ひさかたの。天の枕詞▲あまつ日嗣。天皇の御位の尊稱▲むかしの人。傳教大師▲八重の白雲。雲の幾重にもなりたるをいふ。花のみたて也▲する葉の露。葉の尖におく露▲うきふし。憂き節は竹の縁語▲吳竹。ハチクの類、葉細く、長敷尺にすぎず▲とりつむなげき。木を樵りあつむるに恨の積るをいひかけさて又なげきのきに木をそへたり▲しひ柴の。上の木をうけて椎柴といひ、下の強ひてといはん料とす▲くずのうら葉。葛の裏葉は風にひるがへり見ゆるもの也。さてこの句は下にうちむさいはん料

ながめやる　みやこの春を　となりにて　御法の花も
おとろへず　にはほはんものを　思ひおきし　するばの露も
さだめなき　かやが下葉に　みだれつゝ　もとのこゝろの
それならぬ　うきふししげき　くれ竹に　なくねをたつる
うゝひすの　ふるすは雪に　あらしつゝ　跡絶えぬべき
谷がくれ　こりつむなげき　しひしばの　しひてむかしに
かへされぬ　くずのうら葉は　うらむとも　きみは三笠の
山たかみ　雲居のそらに　まじりつゝ　照る日を代々に
たすけこし　ほしのやどりを　ふりすてゝ　ひとりいでにし
わしのやま　世にもまれなる　あとゝめて　深きながれに
むすぶてふ　のりの清水の　そこすみて　にごれる世にも
にごりなし　ぬまのあしまに　かげやどす　秋のなかばの
月なれば　なほ山のはを　そらふく風を
あふぎても　むなしくなさぬ　ゆくすゑを　みつの川なみ
たちかへり　心のやみを　はるくべき　日よしの御かげ
のどかにて　君をいのらん　よろづ代に　千世をかさねて
松が枝を　つばさにならす　つるの子の　ゆづるよはひは
わかの浦や　今は玉藻を　かきつめて　ためしもなみに
みがきおく　わが道までも　たえせずば　言の葉ごとの
いろ〳〵に　のらみん人も　戀ひざらめかも。

反歌

君をいのる心ふかくばたのひらん
たえてはさらに山川の水。

【大意】　天地ともに限りなからんと誓ひ給ひし天神もろともに我が皇室を

守護し奉らんとて、わがたつ柚に冥加あらせたまへと祈りつゝ、むかし傳教大師の創められたるこの比叡の山門は、その峰に茂れる杉の常盤の色をかへざる如くに、幾千年を經とも、八重の白雲のたちたるが如く見やらるゝ花の都を隣として、佛法の榮花衰へず匂はんと思ひ定めて經營したりしにその末世の今日に至りて、萱の下葉の末におく露の定めなきが如くみだれつ、昔傳教大師の暫にそむきて、物憂き事のみ多くなり行き、呉竹に聲たてゝ鳴く鶯の古巣の、雪に埋められて荒れはつる如く、山門は日に荒廢に赴き、名跡まさに絶えんとする恨をおさへがたくて、なにとぞして、昔の繁榮に歸さんものと思ふ心を院に訴へらるゝ御房の歎は道理なり。されども院にても、とかくの仰せを下し難き今のありさまをいかにせん。(時に北條義時鎌倉の執權として兵馬の權を執り、皇室の衰頽甚しく、よろづ御心のまゝならねば、山門の興隆も裁許しがたき事情のありたるをいふ也。)さるにても、僧正御房は三笠の山の高く空に聳ゆるが如く、藤原氏の嫡流にて歴々の家筋也。さてまたその藤原氏は鎌足公以來禁庭に立ちまじりて、代々天皇輔佐の任を帶び、執政大臣の職に備はり來りたるが、

也▲山高み。山の如く高きによりての意▲雲居。雲の居る方の義にてそらをいふ也。禁中をいへり▲照る日。天皇にたとへ奉る▲星のやどり。三公の位をいふ。職原抄に、太政大臣、左右大臣、已上謂之三公。三公者象天之三台星也とあり▲たちかへり。上に涙といへるより涙はよせては返すも

のなればたちかへりとつゞけたるなり▲はるく。晴れひらかしむるをいふ▲ゆづるよはひは。上にいへる鶴の子の行く末千歳あるべきその齡を凡て君にゆづりて若やぎ給はんやうにと祝していふ也▲かきつめて。掻きあつめて也。上をうけて玉藻をかきあつむといひて和歌を書きのことをき

君は實に法性寺忠通公の息としてやがてはその後をうけて三公の位にも上り給ふべき身なるに、一旦その尊をすてゝ、ただ一人出家して佛道修行を志し、かの深き流の幾たび掬ぶとも底まで濁ることなき如き、深奥なる台教の秘法を極め給ひて、濁れる世にありながら獨心すみて居らるゝことこそ尊き限りなれ。御房の歎かるゝ如く汚濁の世なれども、かの沼の葦間をわけてやどる月影のすみて見ゆると同じく、赫々たる神威のあるありて、月の山の端をめぐりながら猶下界を照す如くなるをうち仰ぎて祈り奉らば、行く末空しからず、必ず立ちかへり、御房の願を滿し給ふべき日吉の神の御神德もあらはるゝなるべし。かくて君が代を千萬年長かれと祈り給へ。さてまた幾千世もかはらぬ和歌の浦の松が枝に巣をくみて、翼にならす鶴の子の、千歳の齡を君にゆづりて、若やぎ給はんことを祈る也。君はまた和歌の道にもすぐれ給へば、和歌の浦に玉藻をかりあつむる如くに、多く金玉の詠をよみ出でたまひなば我れ〳〵どものたゞさはれる和歌の道までも君の手によりて佛法王法とともに絶えせずつたはり行きて君がよみおかるゝ言の葉の妙なる色に後世の人誰れか愛で慕はざるものあ

かせたる也▲ためしもなみに。涙に無をきかせたり▲みがきおく。みがくは玉の緣語也▲わが道。和歌の道をさしていへる也▲言の葉毎の。下のいろ〳〵にかゝる語▲戀ひざらめかも。かもは感動の助詞。今いふかなに同じ。さてこの句は戀ひ慕はざらんやかならず戀ひしたふべしといふ反語也

るべき。かならず慕ひ奉るなるべし。

新院（上皇門院）ものどかにおはしますまゝに御歌をのみよませ給へど、萬の事もていでぬ御本性（にほんしやう）にて、人々など集めてわざとあるさまには好ませ給はず。建保の頃、内々（うちうち）百首の御歌詠（よ）み給へりしを、家隆の三位また定家の治部卿（ぢぶきやう）の許（もと）などへ「いふがひなき兒（ちご）のよめる」とて遣（つかは）して見せたまひしに、いづれもめでたく、さまざまなる中に、懷舊（くわいきう）の御歌に、

秋のいろをおくりむかへて雲の上に
なれにし月もものわすれすな。

とある所に、定家の君驚きかしこまりて、うらがきに、あさましくはかられ奉りける事など記（しる）して、

わかざりし月もさこそは思ふらめ
ふるき涙もわすられぬよを。

（歌カレタリト也）

▲山川の水。上の歌をうけて台嶺の法水をさしていへる也▲もていでぬ。表立ち給はぬをいふ▲わざとあるさま。特別なるさま▲いふかひなき兒。さるにも足らぬ子供▲懷舊。すぎにし事をおもひ出すこと▲雲の上。禁中をさしていふ▲なれにし月。見なれたる月といふ義▲驚きかしこまりて。

（緣ナリ、ツテイフ）

と奏せられたり。院もえんありて（緣）御覽（ごらん）ずべし。げにいかが御心動かずしもおはしまさんと、その世の事かたじけなくなん。今もすこし世の中隔（へだ）れるさまにてのみおはしますこそ。いとゆかしき御ありさまなめれとぞ。

【上欄拾遺】大嘗會。天皇御即位ありて、天祖を始め、天神地祇を祭らせ給ふ古は大嘗新嘗の別なかりしを天武天皇以來、代毎に行ふを大嘗とし、年毎に行ふを新嘗とす。大嘗には二國を卜定して、その國郡の司に祭事を供奉せしむ。之れを悠紀主基といひ、悠紀は天神を祭り、主基は地祇を祭る▲四方の海云々。天下泰平、四海の内安堵せるをいふ。吹く風も云々は西京雜記に、太平世、風不搖枝とあるによる。さてまたあまねき御うつくしびの云々以下は、古今集序、あまねき御うつくしびの涙八島の外まで流れ、廣き御惠の陰、筑波山の麓よりもしげくおはしましてとあるによれり▲あり經けんの歌。この水無瀨殿はもと

天皇の御製と知りて恐れ入る也▲うらがき。御詠草の裏にかきたる也▲あかざりし。心にあかで天皇の御位を讓り給ひしを月によせて詠みたる也▲世の中隔れる。後鳥羽院と土御門院と御中たがひにあらせらるゝをいふ。

惟喬親王の御殿ありしより、この松の木も古へより、幾年を經來にけんといひたるなり。ふりもせでは、古くもなりはてずしてといふ意▲和歌所。村上天皇の天暦五年始めて置き給へる職。長官を別當といひ、次官を開闔といひ、寄人等の職もあり。和歌を撰集せらるゝ時に置かるゝ也▲梨壺。昭陽舍にして、溫明殿の北麗景殿の東にあり、庭に梨の樹をうゑられたるよりかくいふとぞ。さて又その五人とは清原元輔、大中臣能宣、紀時文、源順、坂上望城をいふ也▲輔仁の親王の御名のりを云々。輔仁のみこと書きたるを、白河院は、なに故にかくはかきたるぞと仰せられたるより三宮と書き奉れりといふ▲千五百番歌合。建仁元年、後鳥羽院、後京極攝政以下男女三十人の歌よみに各百首の歌を奉らしめて、相つがへて、勝敗を定めたることあり之れをいふ▲目に見えぬ鬼神をも云々。古今集序。力をもいれずして天地を動し、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和げ、猛き武士の心をも慰むるは歌なりとあり▲賭弓。古正月十八日禁中の公事。主上弓場殿に臨ませられ、左右近衛の舍人などの弓を射て勝負を試みるを御覽あり。又臨時に殿上の侍臣どもの射るを御覽ある事あり。これを殿上の賭弓といふ▲ちかき川のあゆ云々。源氏物語常夏の卷に、「いとあつき日、東の釣殿にいでたまひて涼み給ふ。中將の君もさぶらひ給ふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れるあゆ、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じて參らす」とあり。さて又西川は桂川をいひ近き川は賀茂川をいふ。いしぶしとは川魚の名也▲ひろはば消えなんとにや。源氏物語帚木の卷に、「御心のまゝに折らば落ちぬべき萩の露、ひろはば消えなんと見ゆる玉篠の上の霰などのえんにあえかなる、すきずきしさのみこそをかしく思さるらめ」とあり。こゝにはこれを引きて、「かの源氏のひろはば消えなん云々といふ意をとりかくは篠の上に洗米をのせ、霰に見たてたるなるべし」といふ意也▲かづく。古へ經頭に衣など給はる時には肩にうちかけて拜せしより、すべて物を賜ふをかづくといへり。▲北面。北面の武士也。上皇御所を警衛する兵。五位なるを上北面といひ、六位なるを下北面といふ▲昔の躬恒が云々。大鏡に、「延喜の御時に、御遊ありし夜、御前の御階の下に躬恒を召して月を弓張といふ心、何の心ぞ、それがよし仕うまつれと仰せ事ありしかば、「照る月を弓張とし

もいふ事は山べをさして入ればなりけり」と申したるを、いみじう感ぜさせ給ひて、大袿賜ひて肩にうちかくるまゝに、「白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそふきて來ぬらし」いみじかりし物かな。さばかりの者を近う召して勅緤賜はるべき事なられど、そしり申す人のなきも、君の重くおはしまし又躬恒が和歌の道に許されたるとこそ思ひ給へしか」とあり▲貫之が家に云々。大鏡に「正月一日つけさせ給ふべき魚袋の損はれたりければ繕はせ給ふ程、まづ貞信公の御許に參らせ給ひて、かう〳〵の事の侍れば、内に遲く參る由を申させ給ひければ、大きおとど驚かせ給ひて、年頃もたせ給へりける、取り出させ給ひて、やがて、あえもの(肴物)にもと率らせ給ふを、事うるはしう松の枝につけさせ給へり。其の御かしこまりの喜びは御心の及ばぬにしもおはしまさざらめど、猶貫之に召さんと思し召して、渡りおはしましたるを待ちつけ申しけんめいぼく(面目)いかがはおろかなるべきな。「吹く風にこほりとけたる池の上を、ちよまで松のかげにかくれん」とあり。

第二　新島もり

猛きもの丶ふのおとりを尋ぬれば、いにしへ田村、利仁などいひけん將軍どもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで、源平の二流ぞ、時により折に從ひて大やけの御まもりとはなりにける。桓武天皇と聞えし御門をば柏原の御門とも申しけり。その御子に式部卿の御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡、維時とて二人の子をもたりけり。間近く榮えし西八條の清盛のおとどは、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、この頃は僅にあるかなきかにぞさまよふめる。さてかの維時が名殘はひたすらに民となりて平四郎時政といふもののみぞ、伊豆の國北條の郡とかやにあめ

田村。坂上苅田麿の子也桓武天皇の時征夷大將軍となり東夷を平げし人▲利仁。藤原時長の子鎮守府將軍に任ぜらる▲耳遠ければ。世を隔つること多きをいふ▲大やけ。朝廷▲維時。本書は貞盛の子としたれど誤也貞盛の子維衡維將。維將の子維時と尊卑分脈にあり▲維時が名殘。名殘は子孫の

る。それも維時には六代の末なるべし。又、源氏武者といふも清和の御門、或は宇多の院などの御後どもなり。二條の院の御時、平治のみだれに、伊豆の國姪が小島へ流されし、兵衛の佐頼朝は清和の御門より八代のながれに、六條の判官爲義といひし者の孫なり。左馬頭義朝が三男になんありける。西八條の入道おとど、やう〳〵榮花衰へんとて後白川院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされてかの頼朝を召しいでて、軍を起し給ひしに、しかるべき時やいたりけん、平家の人々は壽永の秋の木がらしに散りはてゝ、遂にわたつ海の底のもくづと沈みにし後、頼朝いよ〳〵權をほどこして、更に君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里といふ所に居りながら世をば掌の中に思ひき。皆人知り給へる事なれば今さらに申すもなか〳〵なれど

憑▲あめる。あるめるの略▲平治の乱。二條天皇平治元年十二月藤原信頼義朝兵を起す▲入道おとど。平清盛▲後白河院を惱ます。治承元年藤原成親清盛を亡さんと謀る。清盛之れを誅し事法皇に連り三年法皇を鳥羽殿に幽す▲世をは云々。兵馬の政を掌中ににぎりたるをいふ▲なかなかなれど

院のうへ位に卽かせ給ひしはじめより、世のかためとなりて、文治元年四月二のはしをのぼりしも八島の内のおとど宗盛をいけどりの賞ときこゆ。建久の初めつかた都にのぼる。その勢のいかめしき事いへば更なり。道すがらあそびものどもまゐる。遠江の國橋本の宿につきたるに、例の遊女多〳〵えもいはずさうぞきて參れり。頼朝うちほゝゑみて、

はしもとのきみになにをかわたすべき。

といへば梶原平三景時といふ武士とりあへず、

ただそま山のくれであらばや。

いとあひだちなしや。馬鞍こんく〳〵りものなど運び出でてひけば喜び騷ぐこと限りなし。その年の十一月九日權大納言になされて右近大將をかねたり。十二月の朔日ごろ、よろこび申して、

院島羽　文治元年四月二のはし　建久の初めつかた　遊女▲さうぞき。裝束を活用させたる也。よそほふ事▲わたす。與ふる義。橋の緣語也▲そま山。下のく

却つて煩はしけれどの意▲世の固め。征夷將軍をなれるをいふ▲二のはし。從二位▲建久の初めつかた。保曆間記。建久元年十月三日頼朝上洛す云々。其勢三十萬騎とあり▲あそびもの。遊女▲さうぞき。裝束を活用させたる也。よそほふ事▲わたす。與ふる義。橋の緣語也▲そま山。下のく

れでのくれ（樓）をいはん料也。興へずにいひかけたり▲こんくゝり。紺色のしぼりぞめ▲よろこび申す。任官の拜賀をする也▲地頭職。諸家の私領地たる莊園に幕府の家人を遣して司らしむる也▲ぬさ。今いふ餞別の義▲なこその關。陸奥と常陸との境にあり▲あふ坂。近江にあり▲遠きとを

同じき四日やがてつかさをば返し奉る。この時ぞ諸國の總つゐふくしといふ事うけたまはりて地頭職に我が家のつはものどもをなし集めけり。この日本國の衰ふるはじめはこれよりなるべし。さて東にかへり下るころ上下いろ〳〵のぬさ多かりし中に年ごろもいのりなどしたまひし吉水僧正かの長歌の座主のたまひつかはしける、

あづまぢのかたになこその關の名は
君をみやこにすめとなりけり。

御かへし、頼朝

みやこには君にあふさか近ければ
なこその關は遠きとを知れ。

その後もまたのぼりて東大寺の供養にまうでたりき。新院の御

知れ。をは助詞▲東大寺。奈良▲頭おろす。剃髪する也▲太郎。長男の義▲たちつぐ。將軍職を承けつぐ義▲おちゐぬ心ばへ。決着心なく、輕忽なるをいふ▲そむき〳〵。武士の心頼家につかざる也▲私の後見。攝政關白を公の後見といふにむかへていふ▲うけばろ。專擅なるをいふ▲たましひ

位の初めつかた正治元年正月あづまにて頭おろして同じき十三日年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちゐられて、はたとせばかりや過ぎぬらん、北の方はさきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹にをのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後兄はやがてたちつぎて建仁元年六月廿二日從二位同日將軍の宣旨を給はる。又の年左衞門督になさる。かゝれども少しおちゐぬ心ばへなどありて、やう〳〵つはものどもそむき〳〵にぞなりにける、時政は遠江守といひて故大將のありし時より、私の後見なりしを、まいて今はうまごの世なれば、いよ〳〵身重く勢添ふ事限りなくてうけばりたるさまなり。子あり。太郎は宗時。次郎は義時といふ。次郎は心もたけく、たましひまされるが左衞門督をば

まされる。膽力の勝れたる也▲ふさはしからず。將軍たるに不相應なりと也▲うけひく。承諾するをいふ▲やまひつくらふ。病氣を治療する也▲いでゆあびに。溫泉に浴するをいふ▲たばかる。謀ると▲とどこほる事なく。次第にすゝみゆくをいふ▲閑院の內裏。閑院は二條の南西洞院西一町と拾芥抄にあり▲父にも立ちまさりて。官位の父頼朝にも超へて高きをいふ▲うるはしく。端正の義▲猛くもやさしくも。勇强と溫和とをかねたる也▲海はあす。海水涸れつきて淺くなるをいふ▲あらめやゝ。もは助詞。あらんやなしと也▲大とこ。大德のある僧。こゝはただ僧の意▲大饗。大

ふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附き從ひて、思ひかまふる事なぞもありけり。督は日にそへて人にもそむけられ行くに、いみじき病をさへして建仁三年九月十六日年二十二にて頭おろす。世の中のこり多く何事もあたらしかるべき程なればさこそ口惜しかりけめ。稚き子の一万といふにぞ世をばゆづりけれどうけひくものなし。入道はかのやまひつくろはんとて鎌倉より伊豆の國へいでゆあびに越えたりける程に彼處の修善寺といふ所にて遂にうたれぬ。一万もやがて失はれけり。これは實朝と義時とひとつ心にてたばかりけるなるべし。さて今は偏に實朝故大將の跡をうけつぎて、つかさ位とどこほる事なく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月廿七日正二位せしは閑院の內裏つくれる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて左大將を兼ねたり。左馬頭をさへぞつけられける。そのとしやがて內大臣になりても、猶大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ちまさりていみじかりき。この大臣は大方心ばへうるはしく、猛くもやさしくも、よろづめやすければことわりにも過ぎて、もののふの靡き從ふさまも父にもこえたり。いかなる時にかありけん、

山はさけ海はあせなん世なりとも
君に二心わがあらめやも。

とぞよみける。時政は建保三年にかくれにしかば義時はあとを繼ぎけり。故左衞門督の子にて公曉といふ大とこあり。親のうたれにしことをいかでかやすき心あらん。いかならん時かとのみ思ひわたるにこの內大臣又右大臣にあがりて大饗なぞめづら

臣に任じたる時、宴會を開きて公卿を饗應す。任大臣大饗といふ▲尊者。宴席の上客▲扈從。ともをすること▲どよみ。騒動するをいふ▲そこら。許多の義▲火を消ちたる。消ちたるは消したるの音便▲さらぬ人々。サあらぬ人々にて、其の他の人をさていふ▲事鎮りなん程。事の治まらうまで▲しほれ過す。悄然として日をすごせるをいふ▲さのみは。政子を將軍にするたゞまゝにてはの意▲公達。攝家清華の子息の稱▲若君。頼經をいふ▲御孫ならんも云々。頼經は公經の外孫なればわが子ならずともよろしからんと也▲かたしろ。人形を神にして祀りたるもの▲一の人。攝政關白

しく東にて行ふ。京より尊者をはじめ上達部殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉にうつし奉れる八幡の御社に神拜にまうづるいといかめしきひびきなれば國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。立ち騒ぎ罵るもの見る人も多かる中に、かの大とこうちまぎれて女のまねをして、白き衣ひきをり、大臣の車よりおるゝほどをさしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首をうち落しぬ。その程のどよみいみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れるものどもただあきれたるより外の事なし、京にも聞し召し驚く。世の中火を消ちたるさまなり。扈從に西園寺宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も泣く〳〵袖をしぼりてぞ上りける。いまゞ子もなければ立ち嗣くべき人もなし。事鎮りなん程とて故大臣の母北の方二位殿政子といふ人、二人の子をも失ひて、涙はすまもなく、しほれ過すをぞ將軍にもちゐける。かくてもさのみはいかがにて公達一所下し聞えて、將軍になし奉らせ給へと公經の大臣に申しのぼせければあへなんとおぼす所に九條の左大臣殿のうへはこの大臣の御女なり。その御腹の若君の二つになり給ふを下しきこえんと九條殿のたまへば御孫ならんも同じ事と思して定め給ひぬ。其の年の六月に東にゐて奉る。七月十九日におはしましつきぬ。襁褓の中の御ありさまは只かたしろなどを祝ひたらんやうにて萬の事さながら右京權大夫義時朝臣心のまゝなれど、一の人の御子の將軍になり給へるはこれぞ始なるべき。かの平家のほろびがたちかく、人の夢に頼朝がのちはその御太刀あづかるべしと、春日大明神仰せられ

をいふ▲春日大明神。藤原氏の先祖天兒屋根命をまつれり▲思し立つ事。義時を亡さんと謀り給ふ也▲北面の下臈。即下北面の事。前の北面の註を見よ▲西面。院中に伺候する武士也▲この方にほのめく。上皇の思し立たせ給へる事に同意せるもの▲今おりさせ給へるとは順徳院をさしていふ也

けるはこの今の若君の御事にこそありけめ。かくて世を靡かし（屈服スルコト）したゝめ行ふ事もはと〳〵（殆）古きには超えたり。まめやかにめざ（忠誠）ましき事も多くなりゆくに院のうへ忍びて思（おぼ）したつ事などあるべし。近くつかうまつる上達部殿上人（かんだちめてんじやうびと）、まいて北面の下臈（げらう）、西面（にしおもて）などいふも、皆この方にはのめさたるはあけくれ弓矢兵仗（ゆみやへいじやう）のいとなみより外の事なし。劔（つるぎ）などを御覽じ知る事さへいかで習はせ給ひたるにか、道のもの（ソレヲオトセルモノニモマサリタマヘリ）にもやゝ立ち勝りてかしこくおはしませば御前（おんまへ）にてよきあしきなど定めさせ給ふ。かやうのまぎれにて承久も三年（みとせ）になりぬ。四月廿日御門（みかど）おりさせ給ふ。春宮（とうぐう）四つにならせ給（仲恭）ふにゆづり申させ給ふ。近比（ちかころ）皆この御齢（おんよはひ）にて受禪（ぜん）ありつればこれもめでたき御行末（おんゆくすゑ）ならんかし。同じき廿三日院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば御兄

▲御兄の院。土御門院▲父御門。後鳥羽院▲普賢寺殿。近衛基通▲あづまの若君。頼經▲おぼし構ふる事。北條氏追討の御企▲東の代官。關東より遣されたる京都の守護▲かうじ。勅勘あるなり▲さるべくて。かく上皇の御憤にふれ奉りては▲あんなれ。あるなれの音便▲宿世。前世の宿緣をい

の院をば中の院と申し、父御門（ちゝみかど）をば本院とぞ聞（きこ）えさする。この程は家實の大臣（普賢寺殿の御子）關白にておはしつれど御讓位（ごじやうゐ）の時左大臣道家のおとど（光明峰寺殿）攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。さても院の思し構（かま）ふることしのぶとすれどやう〳〵もれきこえて東（北條氏モ）ざまにもその心づか（用心）ひすべかめり。東の代官にて伊賀の判官（はうぐわん）光季といふものあり。かつ〳〵（サウヤク）かれを御かうじの由仰せらるれば御方（みかた）に參るつはものどもおしよせたるに遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思（おぼ）し召しける。あづまにもいみじうわわて騒ぐ。さるべくて身のうすべき時にこそあんなれと思ふものから、討手（うつて）の攻め來りなん時には（宮殿トイヘドモ）かなきさまにて屍（かばね）をさらさじ。おほやけときこゆとも自らし給ふ事ならねばかつは我が身の宿世（すくせ）をも見るばかりと思ひなりて（上皇ノ御怒セラル）

弟の時房と泰時といふ一男と二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都に上す。泰時を前にするゑていふ樣「おのれを、この度都にまゐらする事は思ふ所多し。本意の如く清き死をすべし。人に後見えなんには親の顏また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲に後めたき事やはある。さればよこざまの死をせんことはあるべからず。心をたけく思べ。おのれうちかつならば、ふたゝび、この足柄箱根山はこゆべし」などなく〳〵いひきかす。實に然なり。親の顏をがまん事もいとあやふしと思ひて、泰時もよろひの袖をしぼる。かたみに今や限りとあはれに心細げなり。かくてうち出でぬるまたの日思ひかけぬ程に泰時ただ一人鞭を揚げてはせさたり。父胸うち騷ぎて「いかに」と問ふに、「軍のあるべき樣大かたの

ふ▲雲霞のつはもの。あまたの兵士▲清き死をすべし。潔く討死すべしとなり▲見えなんには。見せなんには▲後めたき。うしろぐらきといふに同じ▲よこざまの死に。横死。はゝなき最期といふ事▲いとあやふし。まことにあやふきこと也▲軍のあるべきやう。戰のかけひき又は軍法などをいふ▲計らざるに。思ひがけなくも▲鳳輦。天皇の御乘物▲あへらば。逢ひしならば▲こばかり。暫時▲その事なり。サアその上皇親征の事ぢや。その時には云々と下につづけて見よ▲兜をぬぎ云々。降服を示す也▲軍兵を給はせば。軍兵ばかりを遣されしならば▲思しまうけつる。かくあるべし

おきてなどは仰の如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも計らざるに辱なく鳳輦をさき立てゝ御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに參りあへらば、その時の進退いかが侍るべからん。この一言を尋ね申さんとて、一人馳せ侍りき」といふ。義時とばかりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿にむかひて弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は兜をぬぎ、弓のつるをきりて偏にかしこまり申して身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしながら軍兵を給はせば、命を捨てゝ千人が一人になるまでも戰ふべし」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。都にも思しまうけつる事なればものゝふども召しつどへ、宇治勢田の橋もひかせて敵を防ぐべき用意心ことなり。公經の大將一人のみなん、

と豫て思ひ構へられしをいふ▲宇治。山城▲勢多。近江▲公經一人のみなん。この文脈は拾遺に説明せり▲七條院。後鳥羽上皇の御母▲修明門院。順德上皇の御母▲御修法。關東調伏の御祈▲顯密。顯は天台宗。密は眞言宗▲日吉社。比叡山にあり▲御念誦。經をよみ御祈願あることをいふ也

御孫の事もさる事にて北の方一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば　方ならず東を重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きことゝあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりのとのばら、坊門大納言忠信尾張中將清經中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐の宰相中將範茂などつぎ〳〵あまたきこゆれど、さのみはしるしがたし。軍にまじり立つ人々このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。御修法どもかず知らず行はる。やんごとなき顯密の高僧もかゝる時こそたのもしきわざならめ。おの〳〵心を致して仕うまつる。御身づからもいみじう念せさせ給ふ。日吉の社に忍びてまうでさせ給へり。大宮の御前に夜もすがら御念誦し給ひて御心のうちにいかめしき願どもをたてさせ給ふ。

▲燈爐。佛前のみあかし▲おびえあがる。物に襲はれたる如く怖ぢ驚く也▲託宣。神靈の人にかゝりて其の意をいふ也▲うれへ。愁訴の義▲一とせの御輿ぶり。拾遺を見よ▲御方人。官軍に加勢する事▲七社。拾遺を見よ▲いきも絶えぬる。軍の樣子をいふ▲とりかへさまほし。昔の過を悔いて

夜すがらしふけ靜りて御社すごく燈爐の光かすかなるほどに稚き童の臥したりけるが、俄におびえあがりて院の御前にただ參りに走り參りて託宣しけり。辱くもかく渡りおはしましてうれへ給へば聞き過し難くは侍れど、一とせの御輿ぶりの時情なく防がせ給ひしかば衆徒おのれを恨みて陣のほとりにふりすて侍りしかば空しく馬牛の蹄にかゝりし事は今に恨めしく思ひ給ふるにより、このたびの御方人はえ仕うまつり侍るまじ。七社の神殿を金銀にみがきなさんと承るも、もはらうけ侍らぬなり」とのゝしりて、いきも絶えぬる樣にて臥しぬ。聞し召す御心地、物に似ずあさましう思さるゝに、只、御涙のみぞいでくる。過にし方悔しうとりかへさまほし。さまざまおこたりかしこまり申させ給ふ。山の御輿防ぎ奉りけん事必ずしも自ら思しよるに

とりかへしたく思はるゝ也▲中院。土御門▲言に出でて云々。別段言葉に出して彼此といはれざれど▲ざめり。ずあるめりの畧▲同じ御心。後鳥羽上皇に御同意ある也▲えもいはず。言ふことの出來ない程の義▲遠き世界。遠き國といふ程の意▲實の際に云々。實際戰爭に臨んでは狼狽して役に

もあらざりけめど責一人にといふらん事にやとあぢきなし。中院はおかで位をすべり給ひしより言に出でてこそものし給はねど世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒にもことにまじらせ給はざめり。新院は同じ御心にて萬軍の事などもおさて仰せられたり。いつの年よりも五月雨晴れまなくて富士川天龍などえもいはず漲りさわぎて如何なる龍馬もうちわたし難ければ、攻め上る武者共もあやしくなやめり。かゝれども遂に都近づく由聞ゆれば君の御武者もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ちつかはす。世の中ひびきのゝしるさま言の葉も及ばず。まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界におちくだり。凡て安げなく騒ぎみちたり。いかがあらんと君も御心亂れて思しまどふ。かねては猛く見えし人々も實の際になり

たずと也▲六月十日あまりにや。泰時と時房とみだれ入りぬればにつゞく▲荒磯。荒浪のうちよする磯邊▲たかしほ。高潮。つなみ也。北條氏の軍勢にたとふ▲物にぞ云々。狼狽せるさま也▲保元のためしにや云々。拾遺を見よ▲網代車。網代にて張れる車▲ありき。あるさの古言▲ものにも

ぬればいと心あわただしく色を失ひたる樣どもたのもしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯にたかしほなどのさしくる樣にて泰時と時房と乱れ入りぬれば、いはん方なくあきれて上下ただ物にぞあたりまどふ。東より言ひおこするまゝにかのふたりの大將軍はからひおきてつゝ保元のためしにや院の上、みやこの外に遷し奉るべしと聞ゆれば女院宮々所々に思しまどふ事更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ先鳥羽殿へ網代車のわやしげなるにて七月六日入らせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうわはれなり。ものにもがなやと思さるゝもかひなし。その日やがて御髪おろす。御年四十に一二や餘らせ給ふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して御姿うつしかゝせらる。

がなや。拾遺を見よ▲いかなりける世々の云々。いかなる前世の宿業にてかゝるうきめを見ることならんと思さるゝ也▲四十五日云々。秦王子嬰の故事也。子嬰位にあること四十六日沛公に降れり。委しくは史記始皇本紀にあり▲かやうのみだれ。このたびの樣なる戰乱などありしにやとの意也

七條の院へたてまつらせ給はんとなり。そくて同じ十三日に御舟に奉りて遙かなる波路を凌ぎおはしまず御心地この世の同じ御身とも思されず。いみじう、いかなりける代々の報にかと恨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日御門をもおろし奉りき。この四月かとよ。御讓位とてめでたかりしに夢の樣なり。七十餘日にており給へるためしもこれやはじめなるらん。もろこしにぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞからの書讀みし人の言ひし心地する。それもかやうの乱やありけん。さて上達部殿上人、それより下、はた殘るなく、この事にふれにし類は重く輕く罪にあたるさまいみじげなり。中院は初より知し召さぬ事なれば東にも咎め申さねど父の院遥に遷らせ給ひぬるにのぞかにて都にてあらん事いと恐れありと思さ

▲御心もて。御自身の御心よりいでてといふ義なり▲宰相。我が國參議の唐名なり▲召次。近く召しつかはれて取次などする者▲手輿。手にてかく輿。腰輿ともいへり▲ふぶき。風まじりに降る雪▲わりなき事。堪へがたきまで苦しき事▲ことわり知らぬ。かゝる道理を知らずして涙はしきり落

れて御心もてその年閏十月十日土佐の國のはたといふ所にわたらせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや。若宮出で來たまへり。承明門院の御兄に通宗の宰相中將とて若くて失せ給ひにし人の女の御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとどめ奉り給ひて近く侍ひける北面の下廊一人召次などばかりぞ御供つかまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。みちすがら雪かきくらし風ふきあれ。ふぶきしてこしかた行くさきも見えず。いとたへがたきに御袖もいたくこほりてわりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそうまれけめ
　　ことわり知らぬ我が涙かな。

せめて近さほどにとあづまより奏したりければ後には阿波の國

つと也▲うたて。氣のすゝまざるをいふ▲父の王を云々。觀無量壽經に、刼初以來有諸惡王貪國位故殺其父一萬八千人云々▲よせ。たのむ所の義▲すぢ異なる。系統の異なる也▲世にへだたる。位を得給はざるをいふ▲むげの民。義時をさす▲將門。以下拾遺を見よ▲天てる御神云々。拾遺を見よ▲時のみかど。後白河天皇▲信頼の云々。平治の乱をいふ▲おほけなく。身の程にすぎたるをいふ▲三皇。後鳥羽、土御門、順德▲今上。仲恭天皇▲あやなき。無文。物の分ちなきをいふ▲此の世一つの云々。現世の上のみならず。過去の宿緣にもよるべけれど▲萬機の政事。いろ〳〵の肝要

に遷らせ給ひにき。尼ノ岡さてもこの度世のありさま、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは父の王を失ふためしだに一萬八千人までありけりとこそ佛も說き給ひためれ。まして世くだりて後、唐土にも日の本にも國を爭ひて戰をなす事かぞへつくすべからず。それもみなひとふし二ふしのよせはありけん。もしは、すゞ異なる大臣、さらでもお天皇ほやけともなるべきさざみの少し弓矢ヲ生ジテのたがひめに世にへだたりてその恨の末などより事起るなりけり。今のやうにむげの民と爭ひて君の亡び給へるためし、この國にはいとあまたも聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友康和の義親いづれも皆猛かりけれど宣旨にはかたさりき。保元に崇德院の世を乱り給ひしだに故院ノ宮の御位にてうち勝ち給ひしかば、天てる御神もみもすそ川の同じ流と申しながら猶時

のみかどを守り給はする事は強きなめりとぞふるき人々も聞えし。又信頼の衞門督おほけなく二條の院をおびやかし奉りしも遂に空しきかばねをぞ道のほとりに捨てられける。かゝればふりにし事を思ふにも猶さりともいかでか三皇今上あまたおはしますす王城の徒に亡ぶる樣やはあらんと頼もしくこそ覺えしにかくいとあやなきわざの出で來ぬるはこの世ひとつの事にもあらさらめども、まよひの愚なる前ノ世ニハには猶いとあやしかりし。四つにて位に即き給ひて十五年おはしましき。おり給ひて後も土佐院十二年、佐渡院十一年なほ天の下は同じ事なりしかば凡て三十八年が程この國のあるじとして萬機の政事を御心ひとつに治め百の官を從へ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて遠きをあはれび、近きをなで給ふ御めぐ

なる政事▲津の國の云々。拾遺を見よ▲藐姑射山。上皇御所をいふ。藐姑射山は仙人の住む所也とぞ。莊子に見ゆ▲ありありて。そのまゝにての義▲苫屋。とまにてふきたるおやしの漁家▲しるべ。教へ知らするをいふ▲雲の波煙の波。はるばると遠き所といふ意▲世をつくす。一生を終へ給ふをいふ▲人離れ。人家を離れゐるをいふ▲ひき入る。奥の方にある也▲かたそへ。片寄せて▲けしきばかり。かたばかりの意▲ことそぎ。簡略にする事▲柴の庵の云々。拾遺を見よ▲二千里の外も云々。拾遺を見よ▲こちたく。甚しくの義▲にひじまもり。新に島守となれるをいふ此の歌により

み雨のわしよりもしげければ津の國の昆陽のひまなき政事をきこし召すにも難波の葦の乱れざらんことを思しき。藐姑射の山の峯の松も、やう〳〵枝をつらねて千世に八千代をかさね、霞の洞の御すまゐいく春を經とも空ゆく月日の限り知らずのどけくおはしましぬべかりける世をあり〳〵て由なき一節に今はかく花の都をさへ立ち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、いその苫屋に軒をならべておのづから事とふ物とては浦に釣するあま小舟鹽たく煙の靡く方をも我がふる里のしるべにかとばかり眺め過させ給ふ。御すまゐども はそれまでと月日を限りたらんだに明日知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいて何時をはてとか廻り逢ふべき限りだになく、雲の浪、煙の波の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御さまども口をしとも愚なり。このおはします所は人離れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて山蔭にかたそへて大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて松の柱に葦ふける廊などけしきばかりことそぎたり。ことに柴の庵のたゞしばしと、かりそめに見ゐたる御やどりなれどさる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘りなき心地するいまさらめきたり。鹽風のいとこちたく吹き來るをきこしめして、

われこそはにひじまもりよおきの海の
あらき涙風こゝろしてふけ。

同じ世にまたすみのゐの月や見ん
今日こそよそにおきの島守。

てこの篇に名づく▲佐渡院。順徳上皇▲御行。佛道を修行し給ふをいふ▲かきつくし。色々とりあつめて▲うらやまし。御袖の涙に乾くひまなきより海士の袖の潮にしほたれたるが春の日に乾きたるを羨み給へる也▲さまかはりて。樣子がちがつての義▲しどろ。うちみだるゝさま▲露けさまさる。悲哀のうちそふこと▲ふるさとを云々。拾遺を見よ▲たとしへなく。たとへん方なく▲消息。たよりの事▲墨染の御衣。僧服▲都の夜寒に云々。都の夜寒きにつけて隱岐の上皇を思ひやり給ふ也▲見奉りてしがな。見たいものであるわい▲死出の山路。逝て歸らぬ道。死をいふ▲たちちね。

年もかへりぬ。所々浦々あはれなる事をのみ思しなげく。佐渡院わけくれ御行をのみし給ひつゝ、猶さりともと思さる。隱岐には浦より遠の遙々とかすみ渡れる空をながめ入りて、過にし方かきつくしおもほしいづるに行方なき御涙のみぞとどまらぬ。

うらやましながき日かげの春にあひて
しほくむあまも袖やはすらん。

夏になりてかやぶきの軒端に五月雨のしづくいと所狹さも御覽じなれぬ御心地にさまかはりて珍らしく思さる。

あやめふくかやが軒端に風すぎて
しどろにおつるむらさめの露。

はつ秋風のたちて世のなかいとど物がなしく露けさまさるに言はん方なく思しみだる。

ふるさとをわかれぢにおふるくずの葉の
あきはくれどもかへる世もなし。

たとしへなく眺めしほれさせ給へる夕暮に沖の方にいとちひさき木の葉の浮べると見えて漕ぎ來るを、あまの釣舟かと御覽ずる程に都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御ふすまなど都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて七條院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心地すればやゝためらひて見給ふに、「御消息聞あさましくもかくて月日經にける事、今日明日とも知らぬ命のうちに今一たびいかで見奉りてしがな。かくながらは死出の山路も越えやるべうも侍らぬなん」などいと多くみだれ書き給へるを御顏におしあてゝ

たちちねの消えやらで待つ露の身を

もと母の枕詞なるを後には直に母に用ゐたり▲われ待ち得ん。命の絶えざる中に我れに逢ふを得たしと待たるゝをいふ▲初雁の云々。前漢蘇武の故事により雁を手紙の使として書けり▲家隆の二位云々。前卷おごろの下に見ゆ▲かの伊勢より云々。拾遺を見よ▲かずかずに。いろいろにといふ意

風よりさきにいかでとはまし。
八百萬神もわはれめたちちねの
われ待ちえんと絶えぬ玉の緒。
初雁の翼につけつゝ、こゝかしこより哀れなる御消息のみ常は奉るを御覽するにつけてもあさましういみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は新古今の撰者にも召しくはへられ、大かた歌の道につけてむつまじく召しつかひし人なれば夜晝戀ひ聞ゆること限りなし。かの伊勢より須磨に參りけんもかくやとおぼゆる。さて、まきかさねて書きつらね參らせたる和歌所のむかしの面影かず〳〵に忘れ難うなど申してつらき命の今日まで侍る事のうらめしきよしなどえもいはず哀多くて、
ねざめしてきかぬをきゝてわびしきは

▲つらき命。死なんと思へど死ぬるあたはざるをいふ▲ねざめ。夢のさめること▲きかぬをきく。こゝは都の事なれば涙の聲は聞えざる筈也。然るに上皇の御事を思ひ奉れば涙の聞ゆるやうなりといふ義▲なみま。涙の音の絶間▲濵びさし。濵べの家。下の久しくをいはんための料也▲吹きしを

あら磯なみの曉の聲。
とあるを法皇もいみじとおぼして御袖いたくしぼらせ給ふ。
なみまなきおきの小島の濵びさし
久しくなりぬ都へだてゝ。
木がらしのおきのそま山吹きしをり
あらくしほれて物おもふころ。
をり〳〵よませ給へる御歌どもを書き集めて修明門院へ奉らせ給ふ。その中に、
水無瀬山我がふる里はあれぬらん
まがきは野らと人もかよはで。
かざしをる人もあらばや言とはん
おきのみ山に杉は見ゆれど。

限ればさてもたへける身のうさよ
民のわらやに軒を並べて。

尼岡かやうのたくひ、すべて多く聞ゆれぞさのみは年のつもりにえなん。今又思ひ出でばついでもとめてとて。

【上欄拾遺】公經一人のみなん云々院の御心の輕きことゝあぶながり給ふまで。公經一人のみなんは一方ならずにかゝる文脈なり。當時諸公卿凡て上皇の御謀に從ひまつりたれどこの公經卿一人はその御孫たる賴經は當時關東の將軍となり、又その北の方たる人は一條中納言能保といふ人の女なるがその北の方の母たる人即ち能保の北の方は賴朝の同胞にして關東方とは緣故もあれば一方ならず關東を重じ給へるより、上皇の謀議にも參せずして却つて後鳥羽院の御輕卒に事をあげ給ふを危がられたりと也▲一とせの御奥ぶり。建保六年九月廿一日山の大衆、日吉の神輿を奉じて朝廷に强訴せしこと百錬抄に見えたり。さて又、陣とは皇居の中にある六衛府官人の詰め居る所をいふ也▲七社。大宮三輪同體、二宮國常立、聖眞子八幡、八王子國狹槌尊、客人菊理姫白山、十禪師天津彦火瓊々杵尊稻荷、三宮豐斟渟尊▲保元のためしにや云々。保元の亂崇德上皇を讃岐にうつし奉りたる例によりて上皇を遠嶋にうつし奉らんと也▲ものにもがなや。源氏物語帚木の卷の引歌に「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」とあるによれる也▲承平の將門。朱雀天皇天慶二年平將門東國に謀叛す。三年誅せらる。本書承平とあるは誤▲純友。天慶の初、藤原純友伊豫の海島によりて賊をなし遂に將門に應ず。三年誅に伏す▲義親。堀河天皇康和四年、對馬守源義親、鎭西にありて貢賦を奪ひなどせるより隱岐國に流さる。然るに配所にありて人民を抄略せるより更に平正盛に勅して之れを追討せらる▲天てる御神。天照大神也。みもすそ川とは伊勢內宮の前を流るゝ川の名。內宮は天照大神を祭れる所なれば、天皇の御系統のことを、みもすそ川の流といへり▲津の國のこやの云々。昆陽野は攝津島上郡にあり。さてこれは、後拾遺和泉式部の「津の國のこやとも人をいふべきに、ひまこそなけれ葦の八重ぶき」とある歌にとれり。この歌は葦にて幾重にも葺ける屋根の也との意▲年のつもりに得なん。年つもりしゆゑに忘れてしまひたりと也▲ついでもとめて。後に思ひ出すこともあらばまた事のついでに語るべしと也。

ひまなきによせてよめる也。本書は下の隙なき政事とつづけんがための料に引き來れる也。下の難波の葦も、乱れといはん料に引き出でたる也▲柴の庵の云々。新古今雜下、西行法師の「いづくにもすまれずばただすまであらん柴のいほりのしばしなる世に」とある歌によれる也▲二千里の外も云々。海をながめやるけしきを彼の白樂天の、三五夜中新月色。二千里外故人心とあるによりてのべたる也。いまさらめきたりとはこの景色をながめやりて、この詩を思ふもまた今更のやうに覺ゆと也▲ふるさとを云々の歌。故郷をわかれて來たその路に生へてゐた葛の葉は秋が來た今日は大方風にうらがへつてゐるであらうが、自分は秋が來ても歸ることは出來ないといふ意。葛の葉のうらがへるに歸るをそへ、來るに繰るをそへたり▲かの伊勢より云々。源氏物語須磨の卷。源氏の君須磨に下り給ひし時六條の御息所より御消息を奉り給ひけるが、そのありさまをしろして、うちおき〳〵書き給へる、白き唐紙四五枚ばかりを書き續けて墨つきなど見どころあり云々と見えたり。この家隆の二位の上皇に奉りたる御消息もかくやありけんと故事に思ひよせて書けるる也。

かずまふ。世間にもてはやされざることと數にもいれぬといふ義▲ふる宮。年積れる皇子▲第三の御子。第二の誤▲宮たちえり。えりは選。皇子を選びて帝位につけんとせることおどろの下の卷にあり▲八重葎。葎の茂りたるをいふ▲さしかたむ。生ひ茂れるをいふ▲建保。順德天皇の御代なり▲

第三　ふぢ衣

その頃いとかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞親王とぞきこえける。高倉院第三の御子なり。隱岐の法皇の御兄なれば思へばやんごとなけれど、昔後白河の法皇、安德院の筑紫へおはしまして後に、見奉らせ給ひける御孫の宮たちえりの時、泣き給ひしによりて位にも卽かせ給はざりしかば世の中ものうらめしきやうにて過し給ふ。さびしく人めまれなれば年を經てあれまさりつゝ草ふかく八重葎のみさしかためたる宮の中に、いと心細くながめおはするに、建保の頃、宮の中の女房の夢に冠したるもの數多まゐりて「劍璽を入れ奉るべきに各々用意して候はれよ」といふと見てければいとあやしうおぼえて宮に語

さほどの事。帝位に即き給ふ事▲このみだれ。承久の乱▲一院。後鳥羽上皇▲小きなど。御幼少なる皇子▲入道親王。親王宣下の後出家したまへるをいふ▲父の宮。即守貞入道親王▲横ざまのさいはひ。僥倖の義▲光仁天皇。天智天皇の御孫稱德天皇の後を受け給ふ▲なまめかしく。艶の義。風

り聞えければいかでかさほどの事あらんと思しもよらで遂に御髪をさへおろし給ひて、この世の御望はたちはてぬる心地して物し給へるに、このみだれ出で來て、一院の御族は皆さまざまにさすらへ給ひぬれば自ら小さなど殘り給へるも世にさし放たれてさりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりのおきてにてかの入道親王の御子（後鳥羽院の御弟）の十になり給ふを承久三年七月九日俄に御位につけ奉る。父の宮をば太上天皇になし奉りて法皇ときこゆ。いとめでたく横ざまの御さいはひおはしける宮なり。孫王にて位に即かせ給へるためし、光仁天皇より後は絶えて久しかりつるにめづらしくめでたし。その十二月一日に御即位。あくる年貞應元年正月三日御元服したまふ。御いみな茂仁と申す。御かたちもなまめかしくあてにぞおはします。御母基家中納言

流▲引きかへす。昔にかへりたるをいふ▲くろみわたる。黒の喪服をつくるをいふ▲御服。天皇の御喪服は細布淺黒染▲尊號などの云々。太上天皇の尊號を奉らざりし也▲奥ふかう。淺はかならぬをいふ▲しめやか。沈着▲はかなき事。かりそめの事▲限りなき音さは琴に上達せちるゝをいふ▲

のむすめ北白川院と申しき。家實の大臣また攝政になりかへらせ給ひて、萬おきて宣ふも、さまざまに引きかへしたる世なりかし。又の年五月の頃、法皇かくれさせ給ひぬれば天下皆くろみわたりぬ。うへも御服たてまつる。きびはなる御程に、いといみじう哀なる御事なめり。前の御門は四にて癈せられ給ひて尊號などの沙汰だになし。御母后東一條院も山里の御住居にていと心ぼそくあはれなる世をつきせず思し歎く。この宮は故攝政殿（良經）の姫君にてものし給へば歌の道にもいとかしこう渡らせたまへば大かた奥ふかう、しめやかにおもき御本性にてはかなき事をもたやすくもらさせ給はず。御琴なども限りなき音を彈きとり給へれど、をさ〳〵搔きたてさせ給ふ世もなく餘りなるまでうもれたる御もてなしを佐渡の院も限りなき御志の中に飽かず

遠き御わかれ。順德天皇佐渡に遷され給へるをいふ▲御衣がへ。毎年四月冬の衣を夏の衣に、十月又冬の衣に改めらる▲みしにはあらず。昔諸共に見し樂しき世にあらずしての義▲愚なる契。たおろそかなる契をいふ▲かゝるすぢの云々。かゝる遠き別れの哀れさは淺くあるべきや。深しと也

なん思ひ聞えさせ給ひける。かの遠き御わかれの後はいみじう物をのみ思しくだけつゝ、いよ〳〵しづみふしておはしますにふるく仕うまつりける女房の、里にこもり居たりけるもとよりあはれなる御消息をきこえて、十月一日の頃、御衣がへの御衣を奉りたりける御返事に、

思ひいづるころもはかなし我れも人も
　　（第三衣ヲイヒカク）
みしにはあらずたぐらるゝ世に。

又御手ならひのついでにからうじてもれけるにや。

きにかぬる命ぞつらき同じ世に
あるもたのみはかけぬちぎりを。

さこそはげに思し乱れけめ。愚なる契だにかゝるすぢのあはれは淺くやは侍る。いかばかりの御心の中にて過し給ふらんといとかたじけなし。果散なく明けくれて貞應もうち過ぎ、元仁、嘉祿などいふとしも程なくかはりて、寛喜元年になりぬ。この程は光明峰寺殿（道家）又關白にておはす。この御女女御にまゐり給ふ。世の中めでたく花やかなり。これより先に三條のおほき大臣（公房）の姫君まゐり給ひて后だちあり。いみじう時めき給ひしをおしのけて、前の殿（家實）の御女いまだ稚くておはする、參り給ひにき。これはいたく御覺もなくて三條の后の宮淨東寺とかやに引きこもりて渡らせ給ふに御消息のみ日に千度といふばかり通ひなどして世の中すさまじく思されながらさすがに后だちはありつるを父の殿攝籙（道家）かはり給ひて今の峯殿（道家東山殿）なりかへり給ひぬれば又この姫君入内ありてもとの中宮はまかで給ひぬ。めづらしきが參り給へばとてなどかかうしもあながちならん。唐

▲かたじけなし。勿體なし▲程なくかはりて。間もなくすぎて▲この御女。鷹子（ヨシコ）と申す御方▲おほきおとど。太政大臣▲時めく。時にあひて榮ゆる事▲前の殿の御女。長子▲御覺もなくて。御寵愛なきをいふ▲淨東寺。一本淨土寺とあり是也。山城愛宕郡淨土寺村にありたりといふ▲

世の中云々。拾遺を見よ▲あながち。無理無體なるをいふ▲唐土には云々。これ白樂天の長恨歌なる後宮佳麗三千人などあるによりてかける也▲しなじなしからぬ。みだりなるさまをいふ▲藤壺。禁中殿舎の名。本名飛香舎▲天下はさながら云々。天下の要路は他人を交へずこの一門のみにて榮

土には三千人なども候ひ給ひけるとこそ傳へ聞くにも、しなじなしからぬ心地すれどいかなるにかあらん。後には各々院號ありて三條殿の后は安嘉門院、中の度參り給ひし殿の女御は鷹司の院とぞきこえける。今の女御もやがて后だちあり。藤壺わたり今めかしくすみなし給へり。御はらからの姫君もかたちよくおはするに、ひきこめ難しとて内侍のかみになし奉り給ふ。同じき三年七月五日關白をば御太郎殿のおとどに讓り聞え給ひて我が御身は大殿とて后宮の御親なれば思ひなしもやんごとなきに御子どもさへ、いみじう榮え給ふさまためしなき程なり。東の將軍、山の座主、三井寺の長吏、山階寺の別當、仁和寺の御室、皆この殿の公達にておはすれば天下はさながらまじる人すくなう見えたり。いとよそほしく重々しげにて内の御宿直所な

ゆゑをいふ▲よそほしく。こゝにては美々しいふ意▲阿波の院。土御門▲例ならずおぼされければ。御病氣にかゝり給ひ終に立たざるべきを知り給ひたる也▲おきの小島。後鳥羽院▲うときましきに。あぢきなく思はるゝ上に▲同じ世。この世をさす▲などさきだたぬと。なぜ先に死なないので

どに常はうちとけ候ひ給へば、關白殿つぎ〳〵の御子どもゝ大臣などにて、立ちかはり御前に絶えずものし給ひて、世の政事など聞え給ふ。北の方は公經のおとどの御女なれば、まして世の重く靡き奉るさまいとやんごとなし。まことやその年十一月十一日阿波の院かくれさせ給ひぬ。いとあはれにはかなき御事かな。例ならずおぼされければ、御髮おろさせ給ひにけり。こてら物をのみ思して、今年は三十七にぞならせ給ひける。今一度都をも御覽せずなりぬる、いみじうかなしさを、おきの小島にも聞し召し歎く。承明門院はさまざまのうき事を見つくして猶ながらふる命のうとましさに、又かく同じ世をだに去り給ひぬる、御歎のいはんかたなさに、なぞさきだたぬと口惜しう思し焦るゝさまことわりにも過ぎたり。かしこにて召しつかひけ

あちうかと▲かしこ。阿波なさす▲たまさかに。稀に▲とりしたゝむ。とりさゝのふること▲きりふたがる。涙にくもるをいふ▲けぢかく。傍にの意▲ありし別。昔阿波に遷らせ給ひし時の御別▲藤衣。喪服。さて此の篇の名はこの歌による▲新勅撰。二十卷▲元久に云々。おどろの下の卷にあり▲世の中もひきかへぬるに。承久の乱出で來にしをいふ▲さざめく。サヽヤクと▲一の御子。四條院▲口さがなし。あしざまに物をいひふらすこと▲生れ給ふさひとしく云々。生れ給ひし時東宮に立ち給へるをいふ▲不用。便り悪さをいふ▲大變しきり。天變頻りに起る事▲さとししげく云

る御調度なにくれはかなき御手箱やうのものを都へ人のまゐらせたりける中に、たまさかに通ひける隱岐よりの御文、女院の御消息などをひとつにとりしたゝめられたる、いみじうあはれにて御目もきりふたがる心地し給ふ。家隆の二位のむすめ小宰相と聞ゆしは自らけぢかく御覽じなれけるにや、人よりことに思ひ沈みて御服なぞくろくそめける。

うしと見しありし別は藤衣
やがてきるべき門出なりけり。

今年もはかなく暮れて貞永元年になりぬ。定家中納言承りて撰集の沙汰ありつるを、この程御門おりさせ給ふべき由聞ゆればにや、いと疾く十月二日奏せられける。一年のうちに奏せられたるいとありがたくこそ。新勅撰ときこゆ。元久に新古今出で來て後、程なく世の中もひきかへぬるに、又新の字うちつゞきたる、心よからぬ事などささめく人も侍りけるとかや。さて同じき四日、おり居させ給ふ。御惱重きによりてなりけり。去年の二月、后の宮の御腹に一の御子出で來たまへりしかば、やがて太子に立たせ給ひしぞかし。例の人の口さがなさは、かの承久の廢帝の生れさせ給ふとひとしく、坊に居給へりしはいと不用なりしをなどいふめり。うへはおりさせ給ひて、その七日やがて尊號あり。御惱なほおこたらず、大方世も靜かならず。この三年ばかりは天變しきり、地震なゐふりなどして、さとししげく御つゝしみ重き樣なればいかがおはしまさんと、御心どもさわぐべし。今上は二歳にぞならせ給ふ。あさましき程の御幼稚いわけなさにていつくしき十善の主に定り給ふ事いとゆゆしきまで前

の世ゆかしき御ありさまなり。むかし近衛院三、六條院二にて位に即き給へりし、いづれもいとこゝろゆかぬためしなり。閑院殿の清涼殿にてまづ御袴奉る。十二月五日御即位は事なくはてぬればめでたくて年かはりぬ。中宮も御物怪に惱ませたまひて常はあしうおはしますを院はいとどはれまなく思し歎く。四月の頃年號あらたまる。天福といふなるべし。その同じ頃、中宮も位さり給ひて、藻壁門院とぞ聞ゆなる。今年もまた例ならず惱ませ給へばめでたき御事の、數そはせ給ふべきにこそと、世の中めでたくきこゆ。祭祓なにくれとおびただしく、まだきよりのしる。ましてその程近くなりては天の下やすきそらなく、山々寺々社々御いのりひびき騷げども御物怪こわくていみじうあさまし。遂に九月十八日にかくれさせ給ひぬ。その程の

々。天變地異は天より君主を戒め諭すものと妄信したる也△十善の主。拾遺を見よ▲前の世云々。前世に如何なるよき因を結びおき給ひたればにやと心ゆかるゝ也▲いづれも云々。拾遺を見よ▲御袴奉る。御着袴の儀ある也▲物怪。死靈生靈など也△例ならず云々。御懐妊をいふ▲こわくて。容易に立ちのかざるをいふ▲殿。道家▲うへ。北の方倫子。公經の女▲院に候ふ。院は後堀河院▲この宮。藻壁門院▲悲しさはの歌。死を悲むは世の習にて世にある咎と思へばかく頭をおろして世をそむき聊慰めたれども、君を戀しく思ひ奉る事はいかにとも慰めん術なしと也▲一つ墨染に云々。

いみじさ、推し量りぬべし。今年二十五にならせ給ふ。若く清らにうつくしげにてさかりなる花の御すがた、時の間の露と消え果て給ひぬるはいはん方なし。殿うへおぼしまどふさま悲しともいへば更なり。院に候ふ民部卿典侍ときこゆるは定家中納言の女なり。この宮の御方にもけぢかうつかうまつる人なりけり。限りなく思ひ沈みて頭おろしぬ。いみじう哀なる事なり。人の問へる返事に、

悲しさはうき世のとがと背けども
ただ戀しさのなぐさめぞなき。

當代の御母后にておはしつれば天下皆一つ墨染にやつれぬ。この御歎にいよ〳〵院は沈みまさらせ給ひてうち絶えて御遊などをだに御覽じいるゝ事なくて月日つもらせ給へば御修法どもい

皆一齊に裏服をきるをいふ▲陰陽師。陰陽寮の官。占筮相地等の事を掌る▲うちつづき。土御門、仲恭うちつづきて崩ぜられしをいふ▲いひしろふ。噂しあふ事▲世のおもし。世のおさへ▲なのめなり。なのめならず。同じ。一通ならざる事▲なごやか。柔和▲らうらうし。勞々の字音。巧者なるをいふ▲たどくしからず。精通せられて不十分ならざるを云ふ▲故宮の御はて。藻壁門院の一周忌▲諒闇。天皇の喪をいふ▲まがまがしく。禍ごとらしき意▲ゆゝし。忌はし▲うちつづき。土御門、藻壁門院、仲恭、後堀河▲あわただし。落ちつかざる事▲大殿。道家▲御門。四條天皇をい

とこちたく、山々寺々殘りなくつとめのゝしる。醫師、陰陽師祭祓と天の下騒ぎみちたり。又年號かはりぬ。文暦元年といふ。承久の廢帝十七になり給へるも五月二十日にうせ給ひぬ。いと若き御程にいといとはしうあたらしき御年なりかし。隱岐にもうちつづき哀なる事どもを聞し召しなげくべし。佐渡にはまして心うくあさましとおぼさる。この御さしつぎの宮、猶おはしますは修明門院養ひ奉らせ給ふめり。かくいひしろふ程に院の御惱日々に重くならせ給ひて、八月六日いとあさましうならせ給ひぬ。世のおもしにておはしますべきことの、かくあへなき御ありさま口惜しなど聞ゆるもなのめなり。大方御本性もなごやかにうらゝしく御かたちもまほにうつくしうとゝのはりて二十に三つばかりや餘らせ給ふらん。若うさかりの御程に御才なども、やまともろこしたどくしからず。何事につけても、いとあたらしうおはしませば世人の惜み聞ゆるさま限りなし。只、くれまどへる心地どもなり。後堀河院とぞ申しける。故宮の御はてだにすぎず。又とりかさねて諒闇の三とせまでにならんことをいとまがくしくゆゝしと皆人思ふべし。御契の程のあはれさも、いとあり難くなん。御禊、大嘗會などもいとどのびぬ。唯こゝもかしこもたかきもくだれるも、都も遠きも、島々も涙にうき沈みてぞ過し給ひける。うち續きかくのみ世の中騒がしく、天變もしきり、いとあわただしきやうなれば又年號かはりて嘉禎元年といふ。まことや三月の末つかたより攝政殿教實重くわづらひ給ふ。故院の御位の程より大殿の御讓にて關白ときこえしが、御門稚くおはしませばこの頃は攝政殿と申すなるべし。

ふ▲峯殿。道家をいふ▲はぐくむ。養育ずること▲三度云々。三たびまで攝政關白になれるをいふ▲北の政所。攝政關白に任ぜし人の妻▲御色ども云々。喪をはりて服をぬぎかふること▲あさましの年の積り。淺ましくも年月の積りたる也▲御歎々さ。御歎の種。こゝにくさいふより下にしげ

御容貌も御心ばへもめでたくおはしましつるにいとあへなくせ給ひぬれば大殿の御歎たとへんかたなし。二十六にぞなり給ひける。いとかなしくしたまふ姫君若君などものし給ふをも、今は峯殿のみ、偏にはぐくみ聞え給ひけり。攝政にも大殿たちかへりなり給ひぬ。かくて三度政事ををさめ給ひぬるにや北の政所の御父は公經のおとどなればかの殿と一つにて世はいよいよ御心のまゝなるべし。今年ぞ御色ども改りぬれば冬になりて御禊、大嘗會行はる。さまざまめでたくもあはれにもいろいろなる都の事どもをほのかに傳へ聞し召して隱岐にはあさましの年のつもりやと御齡にそへても盡きせぬ御歎ぐさのみしげりそふ。慰めには思しなれにしことゝて敷島の道にのみぞ御心をのべける。都へもたよりにつけつゝ題をつかはし歌を召せばあはりそふさ云へり▲つれづれに云々。おひまなあまりにの意▲これをだに。せめてはこの和歌なりさめさ思ふ也▲秀能。この事。おどろの下の卷にあり▲ありし乱。承久の乱▲例のかず〳〵は云々。尼いふ也。歌合の歌をあまたいはん事は例の如く難きことなればの意▲昔ながら。昔のまゝの。な

れに忘れ難く、戀ひ聞ゆる昔の人々、我れも〳〵と奉れるをつれづれに思さるゝ餘に、自ら判じて御覽せられにけり。家隆の二位も今まで生ける思ひいでに、これをだにと哀にかたじけなくて、こと人々の歌をも、こゝよりぞより集めて參らせける。むかしの秀能はありし亂の後、頭おろして深く籠り居たり。如願とぞいひける。それもこの度の御歌合に召せば今更にそのかみの事さこそは思ひ出づらめ。例のかず〳〵はいかでか。ただ片はしをだにとて、左御製。

人ごころうつりはてぬる花のいろに
　　むかしながらの山の名もうし。

右家隆の二位、

なぞもかく思ひそめけん櫻花

がらは長柄の山にいひかけたり。長柄山は近江滋賀郡▲八十島。あまたの島の義▲誰れかみなせの。誰れか見んといふ見を水無瀬の水にいひかけたり▲まだ見ぬ島の云々。隠岐をさしていふ▲はかなしごと。ただとりとめもなき事をいふ▲阿彌陀佛の御勤。御念佛をいふ▲紛はし。淋しさをまぎらし給ふ也▲うとみはつ。疎ましく思ひきる▲面がはりせぬ。むかしのまゝにかはらずと也▲入りぬるいその草よ。水に入りて見ゑずなりたる草の如しと也。ふる里を見る能はずとのたゝへ也▲見らく。見るの延音▲例のさほふ。火葬の事▲人ずくな。御葬送に供奉するもの少きをいふ▲大原の

山としたかくなりはつるまで。

秀能

わたの原八十島かけてしるべせよ
はるかに通ふ隠岐のつり舟。

山家といふ題にてまた左御製。

軒端われて誰れかみなせの宿の月
すみこしまゝの色やさびしき。

右家隆

さびしさやまだ見ぬ島の山ざとを
思ひやるにもすむこゝちして。

法皇御みづから判のことばを書かせ給へるに「まだ見ぬ島を思ひやらんよりは年久しく住みて思ひいでんは今少し志ふかくやとて我が御歌を勝とつけさせ給へるいとあはれにやさしき御事なめり。かやうのはかなしごと、又は阿彌陀佛の御勤などに紛はしてぞおはします。又、御手習の序に、

我れながらうとみはてぬる身のうへに
なみだばかりぞ面がはりせぬ。

ふる里は入りぬるいその草よただ
夕汐みちて見らくすくなき。

このうらにすませ給ひて十九年ばかりにやおりけん。延應元年といふ二月廿二日六十にてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らんの御志深かりしを、遂に空しくてやみ給ひにし事、いと辱く哀に情なき世も今更心うし。近き山にて例のさほうになし奉るもむげに人ずくなに、心細き御ありさまいとあはれになん。御

法華堂。山城國愛宕郡▲御庄。上皇御領の庄園▲三昧料。三昧とは佛經の語。思を專にし想を寂むるをいへり。こゝにてはただ回向料と見ればよし▲水無瀬殿を渡さる。水無瀬の離宮を法華堂にうつしたてられたる也▲今はの際まで云々。尼いふなり▲あらまし。豫め定めおき給へるをいふ。

骨をば能茂といひし北面の、入道して御供に候ひしを頸にかけ奉りて都にのぼりける。さて大原の法華堂とて今も昔の御庄の所々三昧料に寄せられたるにてつとめ絶えず。かの法華堂には修明門院の御沙汰にて故院わきて御心とどめたりし水無瀬殿を渡されけり。今はの際までもたせ給ひける桐の御數珠などもかしこに未だ侍るこそ哀にかたじけなく拜み奉るついでのありしか。はじめは顯德院と定め申されたりけれど、おはしまし〻世の御あらまましなりけるとて仁治の頃ぞ後鳥羽院とは更に聞えなほされけるとなん。

【上欄拾遺】　世の中すさまじく云々。かくも御寵愛深かりける三條の宮をのけて、長子入内ありけるより、天皇には世の中面白かちず思はれたれども、さすがに關白家實の權威にはばかられて、長子を后に立てたまへりと也▲十善の主。佛の教にて殺生、偷盜、邪淫、妄語、惡口、両舌、綺語、慳貪、瞋恚、邪見を十惡といふ。この十惡を身に犯さざるを十善といふ。天皇の德を讃して十善の主といふ。かしこき君といふ義▲いづれもいと心ゆかぬ云々。近衛天皇は御年十七にて崩じ、六條院は御年十三にてかくれられ、且皇子もおはしまさぬことなど、御末いとどめでたからざりしをいふ。

預り奉られし云々。新島守の卷に見えたり▲きやうさく。物事の賢くすぐれたる事。警策の字音也▲暦仁の頃。暦仁元年十二月薨▲かづらふ。關係すること。こゝにてはただ何事もなく徒然に暮しをるをいふ▲人わろく。人の思はんことも耻かしく思はるゝ也▲瞿曇彌。釋迦のをば。母摩耶夫人死せしより瞿曇彌釋迦を養へり▲思し屈し。くんじさしむ。くツしの音便。氣の晴々し給はぬをいふ▲まめだちてのみ。まじめにばかり▲祖父の大殿。道家▲御伯父の殿原。良實、實經など▲父の殿。教實▲雛遊。紙にて小さき人形を作り衣服をきせなどして兒女の遊ぶをいふ也天皇女御の小

第四　三　神山

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮はおとなび給ふまゝに御心ばへもいとときやうさくに御かたちもいとうるはしくけだかくやんごとなき御有樣なればなべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言さへ暦仁の頃うせにしかばいよいよ眞心に仕うまつる人もなく心ぼそげにて、何を待つとしもなくかゝづらひておはしますも人わろくあぢきなう思さるべし。御母は土御門の内大臣通親の御子に宰相の中將通宗とて若くて失せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば宰相のはらからの姫君ぞ御乳母のやうにて瞿曇彌の釋迦佛養ひ奉りけん心地しておはしける。二にて父御門には別れ奉り給ひしかば御面かげだに覺え給はねど、なほこの世の中におはすと思されしまでは自らあひ見奉るやうもやなど人知れず稚き御心にかゝりて思しわたりけるに十二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬと傳へ聞き給ひし後はいよ〳〵世のうさを思し屈じつゝいとまめだちてのみおはしますを承明門院は心苦しうかなしと見奉り給ふ。はかなくあけくれて仁治二年にもなりにけり。御門は今年十一にて正月五日御元服し給ふ。御諱秀仁とぞきこゆ。その年の十二月に洞院故攝政殿の姫君九になり給ふを祖父の大殿御伯父の殿原などゐたちて、いとよそほしくあらまほしきさまにひびきて女御參り給へば父の殿ひとりこそ物し給はねど、大方の儀式萬あかぬことなくめでたし。うへもきびはなる御程に女御もまだかくちいさうおはすれば雛遊のやうにぞ見えさせ給ひける。

くあらせらるるよりいふ▲ゆゝしくなん。ゆゝしば勢の立派なるをいふ▲城興寺の宮。茂仁王の御子▲かたらひ申す。こしらへすゝめし也▲ほのめかす。ソレと明かにいばず氣振りにて知らす▲石清水の社。八幡宮。山城綴喜郡▲椿葉のかげ云々。新撰朗詠の後江相公作、徳是北辰椿葉之影再改。尊猶南面松花之色十廻の句也▲程々につけたる。身分相應の▲七日の節會。白馬の節會。天皇紫宸殿に出御あり、白馬を見給ふ▲御帳。御帳壓さて御座を設け其の四方に帷を垂れたるもの。玉座也▲さうざうしく。淋しきをいふ▲むつれ。親む▲かいひそむ。ひつそりする▲遠き浦々にて云々

天の下はさながら大殿の御心のまゝなればいとゆゝしくなん。土御門殿の宮は二十に餘り給ひぬれど御冠のさたもなし。城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる御弟子にと、かたらひ申し給ひければさやうにもと思して女院にもほのめかし申させ給ひけるをいとあるまじき事とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬の頃宮いたう忍びて石清水の社に詣でさせたまひ、御念誦のどかにし給ひて少しまどろませ給へるに神殿のうちに「椿葉のかげ二たび改まる」と、いとあざやかに、けだかき聲にて、うち誦し給ふと聞きて御覽じあけたればあけがたの空澄み渡れるに星の光もけさやかにていと神さびたり。いかに見えつる御夢ならんとあやしく思さるれど人にも宣はず、とまれかくまれと、いよ〳〵御學問をぞせさせ給ふ。年もかへりぬ。春の始はおしなべて程々につけたる家々の身のいはひなど心ゆきはてらしげなるに正月の五日より内の上例ならぬ御事にて七日の節會にも、御帳にもつかせ給はねば、いとさうざうしく人々思しわへるに九日の曉かくれさせ給ひぬとてのゝしりあへる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれまどひてなか〳〵涙だに出で來ず。女御も未だ童あそびの御さまにて何心なくむつれ聞えさせ給へるに、いとうたていみじければうちしめり屈じて居給へる、いとをさなげにらうたし。大殿の御心のうち思ひやるべし。御兄左大臣の若君も殿上し給へる、只、御門の同じ御程にて騒がしきまでの御遊のみにて明しくらさせ給ひけるに、かいひそみて群り居つゝ鼻うちかみ、うち泣く人より外はなし。かくのみあさましき御事どものうち續きぬるはいかにもかの遠き浦々にて沈み果てさ

せ給ひにし御歎どものつもりにやとぞ世の人もささめきける。御惱のはじめもなべてのすぢにはあらず。あまりいはけたる御遊より、そこなはれ給ひにけるとぞ、未だ御つぎもおはしまさず、又御はらからの宮なども渡らせ給はねば世の中いかになりゆかんずるにかと、たどりわへるさまなり。さてしもやはにて東へぞ告げやりける。將軍は大殿の御子、今は大納言殿ときこゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房と一所にて小弓射させ、酒もりなどして、心とけたるほどなりけるに京よりのはしり馬といへば何事ならんと驚きながら、使召しよせて聞くにいとあさまし。さりとてあるべきならねばその席よりやがて神事始めて若宮の社にて鬮をぞとりける。その程都にはいとうかびたる事ども、心のひき〳〵いひしろふ。佐渡院の宮た

。後鳥羽土御門上皇をいふ。▲なべての云々。通常の事にあらずと也。▲いはけたる御遊。拾遺を見よ。▲なりゆかんずる。なりゆかんとする。▲たごりあへるさまなり。まどひたるをいふ。▲さてしもやは。やはは反語。そのまゝにやむべからずと也。▲はしり馬。早馬。▲若宮。鶴岡八幡宮。▲うかび

ちにやと聞えければ修明門院にも、御心ときめきして、内々その御用意などしたまふ。承明門院も、もしやなど、さまざま御いのりし給ふ。東の使都に入る由聞ゆる日は両女院より白川に人をたて、いづかたへか参ると見せられけるぞ、ことわりに、げに今見ゆべき事なれども物の心もとなきはさおぼゆるわざぞかしと例の口すげてほゝゑむ。日ぐらし待たれて城介義景といふもの三條河原にうちいでて、承明門院のおはしますなる院はいづくぞとかの院より立てられたる青侍のいとあやしげなるにしも問ひければ聞く心地、現とも覺えず。然々と申すまゝに土御門殿へ参りたれど、門は葦強く固め、扉もさびつき、柱根くちてあかざりけるを郎等どもにとかくせさせて内に参りて見廻せば庭には草深く、青き苔のみ蒸して松風より外は答ふるもの

たる事。浮言流説おこる也。▲今見ゆべき。すぐに唯今わかる事であるから、別に使を立てらるる程の事もなけれど▲口すげて云々。記者が尼の形をうつせし也。▲青侍。官位の卑き侍をいふ。▲現とも覺えず。喜のあまりに、夢のやうなる心地する也。▲郎等。家來のこと。▲とかくせさす。色々と工夫

をさす也▲なえばめる。古びてなよ〳〵したる也▲直衣。公卿の平服。この服には烏帽子を著くるが例也▲中門。貴人の屋敷に外門と寢殿との間に設けたる門▲きり戸。扉のかたひらのもの▲四辻殿。修明門院の御所▲ひきいれ。加冠の役。冠をとりて冠者に加ふ。髪を冠の中にひき入るゝより

もなく人の通へるあともなし。故通宗宰相中將の、御弟を子にし給へりし定通のおとどばかりぞ何となく、自らの事もやと思ひてなえばめる烏帽子直衣にて候ひ給ひけるが中門に出でて對面し給ふ。義景はきり戸のわきに畏まりてぞ侍りける。「阿波の院の御子、御位に」と申していでぬ。院の中の人々上下夢の心地して物にぞあたりまどひける、仁治三年正月十九日の事なり。世の人の心地皆驚きあわてゝ、おしかへしこなたに參り集ふ馬車の、響き騷ぐ世のおとなひを四辻殿にはあさましうなか〳〵物思しまさるべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。ひさいれに左大臣實氏參り給ふ。理髪頭辨定嗣仕うまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へうつらせ給ひて、閑院殿より劔璽など渡さる。踐祚の儀式いとめづらし。その後

此の名あり▲理髪。髪をそぎ理むる役▲踐祚。拾遺を見よ▲閑院殿。四條天皇の皇居也▲御わざの事。御葬儀をいふ▲泉涌寺。山城愛宕郡▲菩提。佛道に覺り入る事▲開山の聖。開山は寺をはじめたてたる者。これは俊芿をいひたるなれど俊芿は開山にあらず▲餘執。死してなほ世に殘れる執念

こそ閑院殿には追號のさだめ、御わざの事などありけれ。廿五日に東山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめ奉る。四條の院と申すなるべし。やがてかの寺に御庄などよせて、今に御菩提を祈り奉るも前の世の故ありけるにや。この御門、未だ物などはかばかしく宣はぬ程の御齡なりける時、誰れとかや、前の世はいかなる人にてかおはしましけんと、只何となく聞えたりけるに、かの泉涌寺の開山の聖の名をぞたしかに仰せられたりける。又人の夢にもこの御門かくれさせ給ひて後かの上人、「われ速に成佛すべかりしを、由なき妄念を起して、今一度人界の生をうけて帝王の位に至りてかへりて我が寺を助けんと思ひしにはたしてかくなん」とぞ見えける。實にその餘執の通りけるしるしにや御庄どももよりけんとぞ覺え侍る。さて仁治三年三月十八

日御即位萬あるべき限り、めでたくて過ぎもて行く。嘉禎三年より岡屋の大臣（兼經）攝政にていませしかば、その儘に、今の御代の始も關白と聞えつれど三月廿五日左の大臣（尼實、二條殿ッ御家始めなり）にわたりぬ。この殿も光明峯寺殿の御二郎君なり。神無月になりぬれば御禊とて世の中ひしめきたつも思ひよりし事かはとめでたし。大嘗會の悠絶がたの御屏風、三神山、菅宰相爲長仕うまつられける。

いにしへに名をのみきゝてもとめけん
三神のやまはこれぞそのやま。

主基方風俗の歌、經光の中納言にめされたり。

すゑ遠き千世のかげこそひさしけれ

まだ二葉なるいはさきのまつ。

▲よろづある べき限り。あるべき萬事といふこと。▲光明峯寺殿。道家をいふ。▲思ひよりし事かは。かはは反語。思ひがけざりし事なりといふ意。▲悠紀がた。前の大嘗會の註を見るべし。▲三神山。近江國野洲郡。三神山を題として作りたるなり。▲二葉。若芽をいふ。▲石崎。備中の國下道郡にあり。▲當代。後嵯峨。▲二なく清らをつくされたり。この上もなく、美麗をつくし給へりと也。▲御覺いとかひがひしく。御寵愛淺からざるをいふ也。▲萬うちあひ云々。萬事くひちがふなどの事なく思ふまゝなる世のありさま也といふ義。▲思ひより云々。帝位に即かれんとは思ひよられざりしと也。

當代かくめでたくおはしませば通宗宰相も左大臣從一位を贈られ給ふ。御女も后の位を贈り申されし、いとめでたしや。まことや、この頃右大臣と聞ゆるは實氏の大臣よ。其の御女十八になり給ふを女御に立て奉り給ふ。六月三日入内の儀式ありさま二なく清らをつくされたり。母北の方は四條大納言隆衡のむすめなり。女御君のいとさゝやかにあいぎやうづきて、めでたくものし給へば、御覺いとかひがひしく、萬うちあひ思ふさまなる世のけしき飽かぬ事なし。同じ年八月九日、后に立ち給ふ。その程のめでたさ、いへば更なり。源大納言の家に無品親王とてあやしう心細げなりし程にはたはぶれにも思ひより聞え給はざりけんと、めでたきにつけても、人の口やすからずさはとかく聞ゆべし。

【上欄拾遺】　いはけたる御遊。五代帝王物語に、主上あどけなく渡らせ給ひて近習の人女房などを倒して笑はせ給はんとて、弘御所に滑石の粉を板敷にぬり置かせたりけるに、主上あしくして御顛倒ありけるを御犬の立ち廻り立ち廻り如法に吠えまゐらせたりけるこそ、前表にてありけれ。やがて御悩つかせおはしまして取りあへず御大事に及びけりとあり▲踐祚。天皇の御位をつぎ給ふこと。古は即位と踐祚と別なかりしが中世よりは先帝崩じ給ひて、世嗣の君先づ位を繼ぎ給ふを踐祚とし、後更に正式の大禮を行はせらるゝを即位と云へり。次の本文にまた御即位とあるにて、その區別を知るべし。

今后。姞子と申す▲源氏の中將云々。源氏物語若紫の卷に、源氏の君瘧病のまじなひに北山の某寺に籠りし事見えたり▲わらはやみ。瘧の事▲西園寺。山城葛野郡▲伯三位。摂卿分脈に、神祇伯三位、貞應元年卒とあり▲木ぶかく。木茂りたる也▲わたつ海をたゝへ。海の如く水を湛へたる也▲

第五　内野の雪

今后の御父は先にも聞えつる右大臣實氏のおとど、その父故公經のおほきおとど、そのかみ夢見給へることありて源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし、北山のほとりに、世に知らずゆゝしき御堂を建てゝ、名をば西園寺といふめり。この所は伯三位資仲の領なりしを、尾張の國松えだといふ庄に換へ給ひてけり。もとは田畑など多くて、ひたぶるに田舍めきたりしを更にうちかへしくづして艶なる園に作りなし、山のたゝずまひ木ぶかく池の心ゆたかに、わたつ海をたゝへ、峯よりおつる瀧のひびきも實に涙催しぬべく、心ばせ深き所のさまなり。本堂は西園寺、本尊の如來は誠にたへなる御姿、生身もかくやといつくしう顯

涙催しぬべく。形勝の面白さに感涙を流さるゝ也▲本尊。主としてあがむる佛▲せんみやく院。一本せんしやく院に作る。下の功德藏院と共に寺の堂の號なるべし▲うち奉りて。着け給ひての義▲五大堂。不動、降三世、軍多利大威德、金剛夜叉の五大尊を安置せる堂▲愛染王。拾遺を見よ▲座

されぬ。同じく拾遺を見よ▲供僧も云々。拾遺を見よ▲來迎。拾遺を見よ▲廿五菩薩。拾遺を見よ▲睡殿。正寢也。本殿也▲うそぶく。吟咏すること▲見ぬ世の春。我が見ぬ後世の春▲奥ゆかし。おくぶかくして心ゆかるるをいふ▲思し寄る云々。わが御子の中を御位にと望を屬しぬたまひし

され給へり。又せんみやく院は藥師、功德藏院は地藏菩薩にておはす。池のほとりに妙音堂、瀧の下には不動尊、この不動は津の國より生身の明王、簑笠うち奉りて、さしあゆみておはしたりき。その簑笠は寶藏にこめて三十三年に一度出さるとぞ承る。石橋の上には五大堂、成就心院といふは愛染王の座さまさぬ秘法とり行はせらる。供僧も紅梅の衣、袈裟數珠の糸まで同じ色にて侍るめり。又法水院、化水院、無量光院とかやとて來迎のけしき彌陀如來、廿五の菩薩、虛空に顯じ給へる御姿も侍るめり。北の寢殿にぞおとどは住み給ふ。廻れる山のときは木どもいとふりたるに、なづかしき程の若木の櫻など植ゑ渡すとて大臣うそぶき給ひけり。

やまざくら峰にもをにも植ゑおかん

見ぬ世のはるを人やしのぶと。

かの法成寺をのみこそ、いみじきためしに世繼もいひためれどこれは猶山の景氣さへおもしろく都はなれて眺望そひたれば言はんかたなくめでたし。峰殿の御舅、東の將軍の御おほぢにて萬世の中御心のまゝに飽かぬ事なくゆゝしくなんおはしける。今の右の大臣をさ〳〵劣り給はず。世のおもしにていとやんごとなくおはするに女御さへ御覺めでたくいつしかただならずおはすると聞ゆる。奥ゆかしき御程なるべし。京には樣々めでたき事のみ多かるに、かの佐渡の島には御惱と聞えし。程なく九月十二日かくれさせ給ひぬ。世の中の改りしきさみ、思し寄る事どもありしを空しう隔りのみはてぬる世をいと心細う聞し召しけるに、そこはかとなく御惱など重る樣にて失せ給ひにける

をいふ▲そこはかとなく。これといふことなく▲最勝講。五月の中吉日を選びて五日間清涼殿にて最勝王經を講ぜらるゝ儀▲右は上首云々。拾遺を見よ▲御前。前駈の隨身ども▲八講。法華八卷を八座に講ずるをいふ。朝夕二座四日にして講を成す▲檳榔毛。牛車に蒲葵の葉をさきて葺きたるもの。親王大臣以下公卿乘用の車▲公務。公事に勤務する日▲おほやけ事。最勝講をいふ▲さし合せて。さしおきて▲末の代には云々。拾遺を見よ▲最勝經五卷の日。拾遺を見よ▲法性寺。鴨趾は今鴨河の東九條の南にあり▲淨土。極樂のことなり▲尊き事のみ。最勝講八講法事など▲七佛藥師云

とぞ聞えし。四十六にぞならせ給ひける。いと哀なる世の中なるべし。かくて年變りぬれば寛元元年ときこゆ。五月廿六日より、最勝講始めて行はる。關白を始め、上達部、殿上人殘りなく參り給ふ。左右大將實基の車、陣にたつるとて爭ひのゝしりていみじう恐し。右は上首左は下臈にておはしければ、御前どもかたみにひしめきて、あさましかりけり。されども相對へて立てゝ後ぞしづまりにける、又の日は久我の前内大臣通光鳥羽の御家にて八講し給ふとて、上達部多くかしこに集ひ給ふ。おとどは更にも云はず、堀川大納言具定御子の通忠の大納言、土御門の大納言顯定通成の三位中將、通行の宰相中將など、すべて一門の人々、檳榔毛におはして多く高欄につき給ふ。ほと〳〵内の御八講にも劣らず見えたり。殿上人はまして數知らず、通雅の大臣の書きおき給へるものに、「公務の日なりとも暇を申して、この八講にあふべし」とかや侍るなるに誠にかゝるおほやけ事の折ふしも猶さし合せておはし集ふ。いとやんごとなきわざなめり。猶末の代にはいかがあらんといぶかし。廿八日はうちの最勝講五卷の日にて、又人々數を盡して參りたまふ。廿九日には法性寺の淨光明院にて普賢寺殿の御忌日の法事あり。この御堂の莊嚴のめでたさ限りなし。實の淨土思ひやらるゝさまなり。こゝもかしこも、この程は尊き事のみ多くて耳ぞ多くはしかりける。實や去年より中宮はいつしかただならずおはします。六月になりてその程近ければ十三社の奉幣勅使立てらる。日頃の御祈にうちそへ世の中ゆすり騷ぐ。六日より七佛藥師五壇の御修法など始まる。中壇は櫻井の宮（後鳥羽院の御子）勤めさせ給ふ。今出川

の大臣におはしませば、御家の殿原、絶えず候ひ給ふ。十日のあけぼのより、その御氣色あれば殿の内たち騒ぐ。白き御裝にあらためて母屋に遷らせ給ふ。天下のゝしりたちて馬車走りちがふさまいとこちたし。内よりも御使ひまなし。寮の御馬にて雨の脚よりもしげく走り競ふ。さらでだにいとあつき頃を汗におしひたしたる人々の氣色いとわりなし。后の宮いと苦しげにし給ひて日たけゆくに、いろ〳〵の御物怪ども名のり出でていみじうかしがまし。大臣北の方いかさまにと御心惑ひて思し歎くさま哀れに悲し。かゝるの産ナドノトキニハかやうのさざみは、高きも下れるも、おろかなるやはある。なべて皆かくこそはあれと、げにさしあたりたる世のけしきをとりぐしていみじう思さるべし。内の御乳母大納言二位殿、おとな〳〵しき内侍のすけなどさるべき限り、

き。事になれたるもの▲伊勢のみてぐらづかひ。伊勢の奉幣使▲御誦經の使。御讃經の事を諸寺に仰する使▲宮の御衣。后の宮の御衣也。神に奉りて御安産を祈る▲更衣。女御につぐ後宮▲この御事を云々。中宮の御産を待ち給ふこと。皇子ならばやがて太子とし給はんとていまだ立坊の沙汰な

参りたまへり。今日も猶心もとなくて暮れぬればいとおそろしう思す。伊勢のみてぐらづかひなど立てらる。諸社の神馬、所所の御誦經の使、四位五位數を盡して鞭をあぐるさま、いはずとも推し量るべし。大臣とりわき春日の社へ拜して御馬、宮の御衣など奉らる。更衣腹に若宮二所おはしませどこの御事を待ち聞え給ふとて、坊定り給はぬ程なり。たとひ平かにおはしますとも、若し女御子ならばと、まが〳〵しきあらましはかねて思ふだに胸つぶれて口惜し。かつは我が御身の宿世見ゆべきはぞかしと思して大臣もいみじう念じ給ふに、ひつじのくだり程にことなりぬ。先、何にかと心騒ぐに、宮の御兄公相の大納言「皇子御誕生ぞや」といと高らかに宣ふを聞く人々の心地、夜の明けたらん樣なり。父おとど「まことか」と宣ふまゝに悅の御

き也▲ひつじのくだり。未の下刻。今の午後三時頃▲ことなりぬ。御出産あらせられたり▲ことさいみしあへず。めでたき折にうちなきなどする也▲うへのきぬ。袍をいふ▲結願。修法を終ること▲月次の御神事。拾遺を見よ▲日ついで云々。拾遺を見よ▲祿。賞與也▲御馬。御布施の馬▲御はかし。御佩刀。皇子に奉る也▲三夜の儀式。三夜の御産養の儀式▲本宮。中宮▲御湯殿。拾遺を見よ▲つるうち。拾遺を見よ▲簀子。今いふ椽側▲白き袖口ども云々。女房の居並びたるをいふ▲白ゑ。胡粉などにて書きたるもの▲饌。膳部をいふ▲すゑわたす。ならぶること▲はしかくしの間。拾

涙ぞおちぬる。哀なる御氣色と見奉る人もことといみしあへず、公相公基實雄大納言三人權大夫實藤大宮中納言公持みな御ゆかりの殿原うへのきぬにて侍ひ給ふ。御修法どもやがて結願すべしとて僧ども法師ばらまで、したり顔に汗おしのごひつゝ、急がしげにありくさへぞめでたき。月次の御神事なるうへ、今日日ついで心やましき事とかやにてわざと奏し給はねど御驗者櫻井の宮の僧正（慶仁法親王）を始め奉りて、つぎ〳〵皆祿給ふ。法親王には宮の御衣、大夫とりて奉り給ふ。宇治の前の僧正には公基の大納言房意法印には權大夫公持かづけ給ふ。御馬は各々本坊に送られけり。又の日月次の祭はてゝ、御はかしまゐる。勅使隆郎なりき。十二日三夜の儀式、本宮の御沙汰にていとめでたし。やがて御湯殿の事あれば、つるうち五位十人、六位十人ならび立つ。御書の博士光兼朝臣、右衞門權佐資定、大外記師光など寢殿の南面の庭に立ちて、孝經の天子の章をぞ讀む。上達部簀子にさぶらひ給ふ。朝の御湯はて、皆退出てのち、又夕の御湯殿の儀式、前の儘にて果てぬる後、寢殿の南東の間に白き袖口どもおし出さる。白ゑの五尺の屏風たてわたして、上達部より、すべて饌どもすゑわたす。公卿の座に人々二行につきあまる程なり。右大將實基、大夫公相、公基、實雄以上大納言、中納言に、左衞門督顯親、權大夫實藤、公持、侍從宰相資季、別當公光、左大辨宰相經光、新宰相定嗣、右兵衞督有資、新宰相中將通行などつきたり。その座の末に、紫べりの疊に、殿上人中將實直朝臣を始めて數知らず參れり。御前のものゞも、殿上の四位はこぶ。兒御子の御衣の案二脚、はしかくしの間にかさ

たつ。御かはらけ二めぐりの後、大夫公相、朗詠「嘉辰令月」と宣へば、有資聲くはへらる。又「昭王」とおし重ねて出さる。御聲々しうとくに、あらまほしうめでたし。かやうにて明けぬ。十四日に五夜の儀式前の如し。今宵は御遊びあり。實基の大將殿（實基大將）拍子とり給ふ。笙宗基、笛二位中納言良教、篳篥兼教朝臣、琵琶大夫公相、箏の琴權大夫實藤、和琴有資、末の拍手も同じ人なりしにや。安名尊、鳥破、席田、伊勢海、萬歳樂、三臺急、例の事なり。數々めでたし。十六日七夜の御産養、内よりの御沙汰なれば、今すこし儀式ことにていかめし。關白殿、右のおとど、右大將（具實）大納言定雄、公相、公基、實雄、中納言には例の人々顯親、實藤、公持、資季、公光、經光、定嗣、三位中將（通成）殿上人頭中將（師職）より始めて殘るはすくなし。勅使藏人

遺を見よ▲嘉辰令月。和漢朗詠、慶保胤作、嘉辰令月歡無極。萬歳千秋樂未央とある句▲昭王。新撰朗詠、儀同三司作、隆周昭王穆王曆數永、吾君又曆數永、本朝之延曆延喜胤子多、吾君亦胤子多とある句▲しうとく。宿德。聲のおもくしくきこゆること▲御遊。管絃の遊▲拍子。拍遺を見よ▲箏の琴。和琴。末の拍子。拍遺を見よ▲安名尊云々。拾遺を見よ▲目錄。祿を給ふ目錄▲内膳司。供御を掌る職▲南殿。紫震殿▲とどめつ。語ることを見合せたりと也▲こちの年比云々。多年の間御心配ありたるをいふなり▲いといと云々。一層頻々と御對面あらせらると也▲これも云々。

侍從宗基、目錄もちてまゐれり。大夫對面し給ひて、白き御衣かづけ給ふ。本宮のものどもにも、うちより祿給ふ。内膳司まゐりてうるはしき作法にて、南殿より御膳參るさま、日比のには似ず、けだかうめでたし。その後御あそび始まる。人々の所作、さのみは珍らしげなくてとどめつ。九夜は承明門院よりの御沙汰なればそれもいかめしき事どもありしかど、うるさくてなん。こゝらの年比思し結ぼほれつる女院の御心の中、名殘なく胸あきて、めでたく思さるゝ事限りなし。閑院殿修理せらるる程とて十五日に、御門承明門院へ行幸なれば、いといとしげうさへ見奉らせ給ふに、御心ゆく事多く、げにいみじき老の榮なりかし。覺子内親王とて御傍におはしましつる御孫、これも土御門院の姫宮さへ、この廿六日かとよ、院になし奉らせ給

この姫宮も土御門院の御子にしてその姫宮さへといふ義▲后腹の御子。即後深草天皇などをさす▲わたくしもの。御寵愛の子とし給ふ也▲御けしき。後嵯峨天皇の御氣色▲陪膳。給仕役▲やくそう。御膳部をとりつぎ運ぶ役。役送也▲勸盃。盃をとりて勸むることをいへる也▲建久。後鳥羽天皇の年號▲青糸毛の御車。牛車の車蓋に、よりたる絲を簾の如くたれしめたるもの。皇后東宮親王などの御乘車▲ゆゝしき人々。立派なる身分の人々▲内蔵寮。御服、御膳の事をつかさどる▲屯食。にぎりめし▲折櫃のもの。折櫃はへぎ板にて作りたる櫃。それに入れたる物。菜物などなるべし▲

へり。正親町の院とぎこゆ。うへの同じ御腹におはすれば萬定通の大臣事行ひ給ふ。院號のさだめ侍るまゝに陣より上達部皆ひきつれて、承明門院へまゐる。大臣は御簾のうちにて、女房の事どもなど忍びやかにおきての給ひけり。その夜また兵衛内侍の御腹の若宮宗尊親王の御事なり御五十日の儀式この院にて沙汰あり。后腹の御子程こそおはせねど、これも御門わたくしものに、いとはしうおぼす事なれば、御けしきに從ひて上達部、殿上人いみじう參り集ふ。關白殿まゐり給ひて〳〵め奉り給ふ。陪膳は通成三位中將、やくそうは家定朝臣仕うまつりける。人々の勸盃饗などはなし。建久に土門院の御賀きこし召しける。例とぞ。かくて中宮の若宮はその廿八日に親王の宣旨あり。さて七月廿八日に中宮も今の宮も、内にまゐり給ふ。例の事なればかなたこなたの供奉、上達部、殿上人數を盡してふるきためしもいと稀なる程にぞ聞えける。宮は御輿、御子は青糸毛の御車近衛の大將檢非違使の別當を始めて、ゆゝしき人々つかふまつらる。こよなき見物にてぞ侍りける。後七月二日、内にて皇子の御五十日聞し召す。内蔵寮より事ども調じてまゐる。御膳の物、屯食、折櫃のもの何くれ心ことなり。時なりて、うへこなたに渡らせ給ふ。御供に關白殿、堀川大納言具實大夫左大將忠雅關白の御子の三位中將通具まゐり給ふ。うへ〳〵め奉らせ給ふさま、いと〳〵めでたし。同じ事のやうなれば、細かには書かず。かくて八月十日、すがやかに太子に立ち給ひぬ。後の深草院の御事大臣御心おちゐてすずしくめでたう思す。ことわりなり。大方かのいみじかりし世のひびきに女御子にておはせましかばいかにしほし

すがやか。滑りなく▲かのいみじかりし云々。御産につきて世評の騒がしかりし事をいふ▲さのみしも。そんなにまでも▲御命ながくて。公經時に年七十三▲おしはからるゝもしるく。公經の心の樂しき事は他より推量しても著しく見ゆと也▲作法のゆゝしさ。行列の儀式の盛んなりしをいふ也

ほと口惜しからまし。いとさら〳〵しうてさし出で給へりしうれしさを思ひ出づれば見奉るごとに涙ぐまれてかたじけなう覺え給ふとぞ年たくるまで常はおとど人にも宣ひける。中比はさのみしもおはせざりし御家の近くよりはことの外に世にもおもく、やんごとなう物し給ひつるに、この后の宮まゐり給ひ、春宮生れさせ給ひなどしていよ〳〵榮えまさり給ふ。行末おしはかられていとめでたし。父の入道殿さへ御命ながくて、かゝる御末ども見給ふも、さこそは御心ゆくらめと、おしはからるゝもしるく、その年の十月七日かとよ。都を立ちて熊野に詣で給ふ。作法のゆゝしさ、昔のふるき御代の御幸どもにもやゝたちまさる程にぞ侍りし。御子孫引き具し給ふ。大納言に實雄卿子公相御孫公基、前藤大納言とありしは爲家の事にや。坊門前大納言

▲つゐしよう。追從。へつらふこと▲十一月十一日。十一月は流布本に十月に作れり。誤也▲始めたる度。始めての行幸▲文治建久。ともに後鳥羽天皇の御代▲瀧口。藏人所の下同▲番長。近衛府隨身の長▲いどみつくす。爭ひて美麗をつくすこと▲張綱。もろさしなはをさして左右へ馬の口をもつゐしように京出は扈從せられたり。大宮中納言持左宰相中將實任右兵衛督有資殿上人は三十餘人侍りけり。いといみじかりし事どもなり。かくて同じき十一月十一日は土御門の院の御十三年とて、おほはやけより、御法事行はるゝもいとめでたし。大原にて御八講あるべければ承明門院もかねてより渡らせ給ふ。上達部殿上人參りつどふさまもこよなし。十二月一日は石清水の社に行幸あり。當代には始めたる度なればよろづ清らをつくさる。文治建久の例をまねばる。關白殿御馬にて仕うまつり給ふ。瀧口十二人、馬副に具し給ふ。いろ〳〵の綾錦目もかがやくばかり立ち重ねたり。左右大將忠家實雄の番長、又心も詞も及ばず。いどみつくしたり。左大將のは馬にて前行、右大將のは張綱にて、うつしの馬をひかせけるとぞ、左大將は紅梅の二重織

物の半臂、下襲、蒲黄の織物のうへの袴、右大將はうら山吹の半臂、下襲、左衛門督實藤は梅がさねのうき織物の半臂、下襲、浮紋のうへの袴、殿上人は花山院の中將道雅の君ばかりぞ蒲黄のうへの袴、うら山吹の半臂、下襲着給へりける。その外はこなるも見えず。御社にてのかた舞は例の上達部もたゝれけり。笛二位中納言尼教拍子左衛門のかみなど勤められけり。かず〳〵めでたくて、又の日午の時ばかりにぞ歸らせ給ひける。同じ五日、やがて賀茂の社に行幸し給ふ。關白殿今日も御馬なり。上達部殿上人さきにいたく變らず、別當通成いみじうきらめかれたり。けさうじ給へるをぞ若き人なれども檢非違使の別當白きものつくる事やあるなどふるき人うちざめきけるとかや。春宮太夫公相馬ぞへ八人具し給ひけり。權大納言實雄、土御門大納

引きはりて引くをいふ▲うつし馬。拾遺を見よ▲二重織物。拾遺を見よ▲半臂。袖ゆきの短かき衣▲下襲。うへの袴。うらやま吹。梅がさね。うき織物。浮紋。拾遺を見よ▲かた舞。拾遺を見よ▲けさうじ。化粧する也▲白きもの。白粉をいふ。さて此の句は檢非違使別當といふ威嚴を保つべき職のものが白粉をつくるはよろしからずと批難する也▲華族。攝家につげる家柄▲申の時。午後四時頃▲下の宮。賀茂村紀森。下賀茂神社▲上の社。上賀茂鴨山麓にあり▲たてあかし。松明をいふ▲舞人。東遊の舞をする人▲のどまる。靜になること▲觀音寺。仁和寺本堂▲灌頂。加持せる法水

言顯定、權中納言公親、左衛門督實藤など、いづれも清らにめでたし。殿上人中將には實久の朝臣、爲氏、實治、經定、顯良、基雅、通雅、通定、定平、實直、師繼、雅繼、輔通、雅家、雅忠、少將には隆兼、公直、季實、爲教、忠繼、輔時、顯方、惟繼、公爲、資平朝臣、信通など、我れ劣らじと華族も下臈も心ばかりはいどみつくしたり。申の時にまづ下の宮に行幸、暮れはて〳〵、上の社にまうでさせ給ふ。賞行はれなどして、還御は明方にぞなりにける。霜いと白きに、たてあかしけさやかにて舞人の袖かへる程もいとおもしろくぞ侍りける。この行幸過ぎぬれば天下の騷、少しのどまりぬべきにやと見えつるに、明くる日十二月廿日又仁和寺御室法助法皇觀音寺にて灌頂し給ふとて、世の中のゝしるさま、いとけしからぬまで響きあひたり。この御室を

を頭にそゝぐ式▲淮后をさへ云々。母后の淮后をこの法助に譲りたるをいふ。御女にのにの字恐らくは衍▲佛母院。仁和寺中にあり▲阿闍梨。梵語。軌範と譯す。僧の師となるべきもの▲喜多院。仁和寺中にあり▲受者。灌頂を受くる者▲袈裟。法衣をいふ▲並びたてる。その座に居並べるもの

ば代々親王こそ傳へ給ふめれど、峯殿世を御心に任せたりし頃より渡り給ひて母うへの西園寺入道殿の御女に淮后をさへ譲り給ふとか聞えていとゆゝしき御人柄なれば、受法のぎしきまでぞ世に珍らかなりける。入道殿下先渡り給ひて佛母院におはす關白殿實良は御兄なれば、ましておはします。右大臣殿實忠左大將心ことに參り給ふ。時なりて大阿闍梨二品法親王道與にてわたり給ふ。喜多院の南の門より、上達部殿上人歩み續きて、そこら參り集ふ。吉田中納言爲經、二條の中納言忠高、侍從宰相藤宰相中將實任左大辨光經新宰相定嗣皆列をひき、受者もみぎりにおりたち給へる、いとわかううつくしうて、地藏菩薩に似給へるを、入道殿いとかなしと見奉り給ふ。紫の袈裟に、香爐もちて渡り給へばもとより並び立てる上達部、皆禮をいたす氣色、

▲傳法のさま。佛法を傳授する儀式▲教授。灌頂の儀にあづかる人▲後朝。灌頂翌日の儀式也▲布施。僧に物を贈るをいふ▲被物。その場のかづけもの。褪頭▲鈍色。にぶいろの法衣▲導師。衆生を説いて道を知らしむる僧▲久安、仁安、建暦、寛喜。拾遺を見よ▲惱み給ふ由。御病氣になられ

やんごとなく見ゆ。關白左大將殿などの御隨身どもえもいはずきらめきて、階の下にたてあかし白くして、並み居たるけしき、めでたく面白し。傳法のさまは人見ぬ事なれば知らず。教授は良惠僧正勤められけり。かくて事はてぬれば後朝のぎしきなほいみじ。法親王の御布施、被物五かさね御法服一具、鈍色一具包物は絹十疋錦一つゝみ、關白殿とりて奉り給ふ。次々の衆僧には大中納言ほど〳〵に隨ふべし。導師の布施、久安仁安など、又建暦寛喜などの度は別當とりたりけれども、今日はその人參らねば忠高の中納言とりけり。殿上人は二十餘人まゐる。萬の事、人柄と見えて、いとめでたし。かやうの事どもにて今年もくれぬ。又の年寛元二年、あづまの大納言頼經の君、一とせ二歳にて下り給ひし峯殿の御子ぞかし。惱み給ふ由聞えし

たりとの事にて▲御子の云々。御子とは二男頼嗣▲孫の時頼。これ本書の誤にして、嫡孫經時に譲りし也▲春宮。後深草天皇也▲めでたき御例。後鳥羽、土御門何れも四にて御即位あり▲光明峯寺殿。道家▲福光園院。良實▲しぶ〳〵に。攝政をいや〳〵ながらゆづりたまふをいふ▲力なし。詮

が、御子の六になり給ふに譲りて都へ御かへりときこゆ。若君はその日やがて將軍の宣旨下され少將になり給ふ。頼嗣と名のり給ふ。泰時朝臣もおとどし入道して孫の時頼の朝臣に世をば譲りにしかば、この頃は天の下の御後見はこの相模守時頼の朝臣仕うまつる。いみじうかしこきものなればめでたき聞えのみありてつはものも靡き隨ひ、大かた世も靜に治りすましたり。かくて寛元も四年になりぬ。正月廿八日春宮に御位をゆづり申させ給ふ。この御門もまた四にぞならせ給ふ。めでたき御例どもなれば行末も推し量られ給ふ。光明峯寺殿御三郎君、左大臣實經の大臣、御年二十四にて攝政し給ふ。いとめでたし。御兄の福光園院殿もと關白にておはしつる、恨みてしぶ〳〵におはしけれど力なし。御はらから三人まで攝籙し給へるためし、ふ

▲中關白殿。道隆▲粟田殿。道兼▲法成寺入道。道長▲これふた度なり。兄弟三人執政となりしは道隆等まで第二回なりと也▲法性寺殿。道長▲天下執行。天下の政を執るをいふ▲御流云々。その系統の長くつづけるをいふ。藤の花の靡くを涙にたとへて流といひ、立といへり▲牛

るくは謙德公伊尹忠義公遠兼東三條大入道殿兼家その又御子ども中關白殿、粟田殿、法成寺入道殿これふた度なり。近くは法性寺殿の御子ども六條殿忠實松殿師基月輪殿兼實これぞやがて今の峰殿の御祖父よ。かやうの事いとたま〳〵あれど粟田殿も宣旨かうぶり給へりしばかりにて七日にてうせ給ひにしかば天下執行し給ふに及ばず。松殿の御子師家の大臣夢のやうにてしかも一代にてやみ給ひにき。いづれも御末まではおはせざりしに、この三所の御後のみいまに絶えず。御流久しき藤なみにて立ちさかえ給へるこそ類なきやんごとなさなめれ。末の世にもありがたくや侍らん。今の攝政殿をば後には圓明寺殿とぞきこゆめりし。一條殿の御家の始なり。攝政にて二年ばかりおはしき。女院の御父も、太政大臣になり給ひて牛車ゆり給ふ。さるべき事といひ

ながらいとめでたし。その頃北山の花のさかりに院に奏し給ふ。

その花につけて、

朽ちはつる老木に咲ける花ざくら
身によそへても今日はかざさん。

御かへしを忘れたるこそ口惜しけれ。かくて御即位、御禊もすぎぬ。大嘗會の頃信實の朝臣といひし歌よみの女の少將内侍、大内の女工所に候ふに雪いみじう日ごろふりていかめしう積りたる曉、太政大臣のたまひ遣しける。

九重のおほうち山のいかならん
かぎりも知らずつもる雪かな。

御かへし、少將の内侍、

こゝのへのうちのの雪に跡つけて

車ゆり給ふ。牛車にのりて宮門に入ることを許されたる也▲老木に咲ける云々。老いて太政大臣に上り牛車を許されたるにたとふ▲女工所。大嘗會を行ふ時臨時に設くる司▲大内山。内裏をさしていふ▲内野。禁中をいふ。さてこの歌により て此の篇の名は出でたる也▲跡つけて。人跡をつけての意▲御幸しげう。御幸しげくの音便▲あるじ。饗應の事▲代々の御手本。代々の天皇のかき給へる手本▲ふるきをうつす。古きおもかげを今の世にうつしまなばんと也▲知らざりし云々。この手本によりてまなびなば昔の世にたちかへることもあらんかと也。跡は筆跡に、治績の跡をもかれさ

遥に千代のみちを見るかな。

後嵯峨の院のうへはいつしか所々に御幸しげう、御あそびなどめでたく、今めかしきさまに好ませ給ふ。西園寺に、始めて御幸なりしさまこそ、いとめづらかなる見物にて侍りしか。太政大臣御あるじ申されしさまいかめしかりき。言はずとも思ひやるべし。御贈物に代々の御手本奉らるとて、おとど、

つたへきく聖の代々の跡を見て
ふるきをうつす道ならばなん。

御返し、御製、

知らざりし昔に今やかへりなん
かしこき代々の跡ならひなば。

中宮も位去り給ひて大宮女院とぞきこゆる。安らかに常はひと

せたり▲ひとつ御車。嵯峨院と御同車▲日比おはしませば。幾日か御籠ある也▲一年の事。かつて石清水の社に籠り給ひて、神殿の内にて椿葉云々の句を詠ぜしを思み給ひて遂に帝位に即き給ひし事三神山の巻に見えたり▲木がくれ。水の木の間がくれにあるをいふ。未だ帝位につき給はざりし頃にたとふ▲狩衣。拾遺を見よ▲橘の小島。宇治川にある小島▲水の底も云々。水底まで響きわたること▲あらまし。あらくふくこと▲袖口。女房の衣の袖口也▲錦をあらふ云々。九江とは蜀江をいふ文選蜀都賦に具錦斐成、濯色江波とあるによる▲網代云々。拾遺を見よ▲鳥羽殿。山城紀伊郡

つ御車などにて、ただ人のやうに花やかなる事どものみ際なく萬あらまほしき御ありさまなり。院のうへ、石清水の社にまうでさせ給ひて、日比おはしませば、世の人殘りなく仕うまつれり。さるべき事とはいひながら、猶いみじう御心にも一年の事思し出でられてことにかしこまり聞えさせ給ふべし。御歌あまたあそばして寶殿にてめさせ給ひし中に、

石清水木がくれたりしいにしへを
思ひいづればすむ心かな。

寶治の頃、神無月二十日わまりなりしにや、紅葉御覽じに宇治に御幸し給ふ。上達部殿上人思ひ〳〵いろ〳〵の狩衣菊紅葉の濃きうすき縫物、織物、綾錦すべて世になき清らをつくしさわぐ。いみじき見物なり。殿上人の船に樂器をまうけたり。橘の小島に御船さしとめて、物の音ども吹きたてたる程、水の底も耳たてぬべく、そぞろ寒き程なるに折知り顔に空さへうちしぐれて、まさの山風あらましきに、木の葉どものいろ〳〵散りまがふ氣色いひ知らず面白し。女房の船にいろ〳〵の袖口、わざとなくこぼれいでたる、夕日にかがやきあひて、錦をあらふ九の江かと見えたり。平等院に中一日わたらせ給ひて、さまざまのおもしろき事ども數知らず網代に氷魚の、よるもさながらのしりあかしてかへらせ給ふ。鳥羽殿も近頃はいたうあれて、池も水草がちにうもれたりつるを、いみじう修理し磨かせ給ひてはじめて御幸なりし時、池邊松といふこと講せられしに太政大臣序を書き給へりき。

「夫鳥羽、仙洞三五累聖、離宮一百餘載」とかや。又御身のい

▲講ず。披講する也。歌會にて歌をよみあぐる也▲仙洞三五累聖。仙洞は院の御所。こゝにては白河法皇をさす。三五累聖とは聖代をふること十五代の意▲蓬の髪云々。拾遺を見よ▲いはひおくの歌。拾遺を見よ▲そりはし。中高く上にそりたる橋▲龍頭鷁首。舳先に龍の頭又は鷁といふ鳥の首

みじき事には「蓬の髪霜寒くて、七代に傳へたり」と侍りしこそめでたけれ。

いはひおくはじめとけふを松が枝の
ちとせのかげにすめる池水。

院の御製、

かげうつす松にも千世の色見えて
けふすみそむるやどの池みづ。

大納言典侍と聞えしは爲家の民部卿のむすめなりしにや。

色かへぬときはの松のかげそへて
千代に八千代にすめる池水。

ずんながるめりしかど、例のうるさければなん。御前の御遊はじまる程、そりはしの下に、龍頭鷁首よせて、いと面白く吹きを

龍はよく水を渡り鷁はよく風に耐ふるよりつくるとぞ▲いかにせんと。御遊もしつくしてこの上はいかなる御遊をせんと工夫をこらす也▲門田。門前の田▲鵜飼。鵜を使うて魚を捕ふる人▲おろさす。鵜川をたつるをいふ▲かは舟の。下のさしてをいはん料也▲あるじの大臣。實氏

合せたり。かやうの事、常の御遊いとしげかりき。又太政大臣の津の國吹田の山庄にもいと屢おはしまさせて、さまざまの御遊數を盡し、いかにせんともてはやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月のさかりなどは殊に艶ありて、門田の稲の風に靡くけしき、妻とふ鹿の聲、衣うつ砧の音、峯の秋風、野邊の松虫、とりあつめあはれそひたる所のさまに、鵜飼などおろさせて篝火ぞもともしたる川のおもて、いとめづらしうをかしと御覽ず。日比おはしまして、人々に十首の歌召されしついでに院の御製、

かは舟のさしていづくか我がならぬ
たびとはいはじ宿と定めん。

とかうじ上げたる程、あるじのおとどいみじう興じ給ふ。「こ

の家の面目今日に侍る」とぞ宣はする。げにさる事と聞く人皆ほこらしくなん。おりゐたまへる太上天皇など聞ゆるは、思ひやりこそおとなび沙汰すぎ給へる心ちすれど、未だ三十にだに満たせ給はねば、萬若うあいぎやうづき、めでたくおはするに、時のおとなにて重々しかるべきおほきおとどさへ何わさをせんと、御心にかなふべき御事をのみ思ひまはしつゝ、いかで珍しからんと、もてさわぎ聞え給へばいみじうはえばえしきころなり。御門まして稚くおはしませばはかなき御遊わざより外の御いとなみなし。攝政殿さへ若くものし給へば、夜晝候ひ給ひて女房の中にまじりつゝ、らんご、具おほひ、手まり、へんつきなどやうの事どもを思ひ〳〵にしつゝ日をくらし給へば候ふ人人もうちとけにくゝ心づかひすめり。節會、臨時の祭、何くれ

也▲げにさる事。なる程道理ある事也▲思ひやりこそ云々。太上天皇と申せば御隱居なされし天皇の事故御老年の樣に感ぜらるれど▲いかで珍らしからん。どうすれば珍らしいであらう▲らんご。亂碁也。定かならず▲具おほひ。へんつぎ。拾遺を見よ▲うちとけにくく。勝手にならず究屈なる

の公事どもを女房にまねばせて御覽すれば太政大臣興じ申し給ひて、ことさら小さき笏など造らせてあまた奉り給へばうへもよろこびおぼす。入道太政大臣の御女、大納言三位殿といふを關白になさる、按察の典侍隆衡の女、大納言典侍、中納言典侍、勾當内侍、辨内侍、少將内侍、かやうの人々、皆男のつかさにあてゝ、その役をつとむ。いとからい事とて、わびあへるもをかし。中納言のすけを權大納言實雄の君になさるゝにしたうづはく事いかにもかなうまじとて曹司におるゝに、うへもいみじう笑はせ給ふ。辨内侍、葦の葉にかきてかの局にさしおかせける。

津の國のあしの下ねのいかなれば
　なみにしをれて亂れがはなる。

をいぶ▲節會。朝廷の宴會。元日白馬踏歌など▲臨時の祭。石清水賀茂などの祭▲笏。束帶の時右手に持つもの▲男のつかさ。男の官職▲からい事。つらき事の義▲したうづ。襪也。束帶の時靴の下に用ゐる足袋の如きもの。帛にて作る▲曹司。局に同じ女官の用部屋▲あしの云々。葦に足をい

ひかけ。襪をはきかねて難義したるを涙に萎れといひたり▲うきてふる。ふるは經る也▲かぶとの花。拾遺に出せり▲薬玉。拾遺を見よ▲朝餉。清涼殿の中にあり。主上の供御を聞し食す所▲文字を結ぶ。文字を書きて結びつくる也▲あやめ草の歌。拾遺を見よ▲ありつる使。三條中納言よりの使▲あやめ草云々。あなたは私の深き心を知らないといはれるが、そんな御心ではこのあやめ草の長き根を掘り出づる私の心に較べることはできない▲神はうれし。延久五年十二月廿五日後三條天皇住吉に行幸し給ひし時の御製「住吉の神も嬉しと思ふらん空しき船をさして來つれば」とあり▲

かへし。

津の國のあしの下ねのみだれわび
こゝろもなみにうきてふるかな。

五月五日所々より御かぶとの花、薬玉など、いろ〳〵に多くまゐれり。朝餉にて人々これかれひきまさぐりなどするに三條大納言公親の奉れる根に露おきたる蓬の中に深きといふ文字を結びたる、絲のさまもなよびかに、いと艶ありて見ゆるを、うへも御目とどめて「何とまれいへかし」と宣ふを、人々もおよすげて見奉るを辨内侍、

あやめ草そこしらぬまの長き根に
ふかきといふやよもぎふの露。

とありつる使はやかへりにければ藏人をめして殿上より遣しけり。御返り、公親、

あやめ草そこ知らぬまのながきねを
ふかき心にいかがくらべん。

又、その頃天王寺に院のまうでさせ給ふついでに、住吉へも御幸あり。「神はうれし」と後三條院仰せられけんためし思ひ出でられ侍りき。大宮院も御まゐりなれば出車どもいろ〳〵の袖口ども、春秋の花紅葉を、一度にならべて見る心地して、いとうつくしく、目も耀くばかり、いどみつくされたり。上達部若き殿上人などは、例のかりあを、裾濃の袴などめづらしき姿どもを心々にうちませたり。釣殿の簀子に人々さぶらひてまた聞えしかど、さのみはいかでか。太政大臣

今日やまたさらに千とせを契るらん

出車。拾遺を見よ▲すそど。拾遺にいだせり▲あまたきこえしかど。よめるうた多くありたれどもの意▲鎧櫃につきて云々。後嵯峨院御踐祚の時この内侍鎧櫃をもちてわたられしなり▲おしけたれて。勢に壓倒せらるゝをいふ▲源氏にや云々。源姓を賜ひて臣下の列にいれんと思し召さるゝ也▲

むかしにかへるすみよしの松。

さても院の第一の御子は右中辨平の棟範のぬしの女、四條の院に、兵衞内侍とて候ひしが、劔璽につきて渡り參れりしを、忍び〳〵御覽じける程にその御腹に出でものし給へりしかど、當代生れさせ給ひにし後はおしけたれておはしますに、又建長元年、后腹に二宮さへ、さしつづきひかり出で給へれば、いよいよ今は思ひ絶えぬる御契の程を、私物に、いとあはれと思ひ聞えさせ給ふ。源氏にやなし奉らましなど思すに猶飽かねば、たゞ御子にて、あづまのあるじになし聞えてんと思して、建長四年正月八日、院の御前にて、御冠し給ふ。御門の御元服にもほと〳〵劣らず、内藏寮何くれ清らを盡し給ふ。やがて三品の位給はり給ふ。御年十一なるべし。中務卿宗尊親王と申すめり。同じ二月十九日都を出で給ふ。その日、將軍の宣旨かうぶり給ふ。かゝるためしはいまだ侍らぬにや。上下珍らしく、面白き事にいひさわぐべし。御迎にあづまの武士どもあまた上り、六波羅よりも名あるもの十人、御送に下る。上達部殿上人女房など、あまたまゐるも院中のほうこうにひとしかるべし。「かしこに候ふとも、限りあらんつかさかうぶりなどはさはりあるまじ」とぞ仰せられける。何事も、只、人がらによると見えたり。きはことによそはしげなり。誠におほやけとなり給はずば、これよりまさることと何事かあらん。にぎはゝしく花やかさはならぶ方なし。院のうへも、しのびて粟田口のほとりに御車たて、御覽じおくりけるこそあはれにかたじけなく侍れ。きびはに美しげにて、はるばるとおはしますを、御母の内侍は、あは

二月十九日。三月十九日の誤▲かゝる例。皇子の將軍となり給ふをいふ▲院中のほうこう。後嵯峨院に御奉公するをいふ▲限りあらん云々。身分相應に官位を給ふことはさはりなくなしやちんと也▲きはことに。格別にの意▲粟田口。山城國愛宕郡▲はるばると云々。遙かなる國に至らるゝをい

ぶ▲いとほしげ。いかにも氣の毒さうにの意▲しつらひ。こしらへをいふ▲善見天。忉利天の帝釋の宮殿善見城をいふ。又喜見城ともいふ▲珠妙。殊勝の誤かといふ。喜見城中殊勝殿と云ふがある由翻譯名義集に見ゆ▲御腰などの云々。御腰の病ありたり▲何ならず。何でもなし。取るに足らず

れにかたじけなしと思ひ聞ゆべし。かゝればもとの將軍頼嗣三位中將はその四月に都へ上り給ひぬ。いとはしげにぞ見えたまひける。さて今下り給へるをもて、崇め奉るさま言はんかたなし。宮の中のしつらひ、御まうけの事など限りあれば善見天の珠妙の莊嚴もかくやとぞ覺えける。かやうにて今年はくれぬ。明くる年は建長五年なり。正月十三日、御門御かうぶりし給ふ。御年十一、御諱、久仁と申す。いとあてにおはしませど、あまりさゝやかにて、又御腰などのあやしく渡らせ給ふぞ口惜しかりける。いわけなかりし御程はなはいとあさましうおはしましけるを、閑院の内裏燒けゝるまぎれよりうるはしくたゝせ給ひたりければ内の燒けたるあさましさは何ならず、この御腰のなほりたるよろこびをのみぞ上下おぼしける。院のうへ鳥羽殿に

といふ義▲朝覲。天皇の上皇並びに母后の宮に行幸なるをいふ。多くは正月にあり▲おはしませば。鳥羽殿におはしますも也▲人わろき。人の手前見苦しきをいふ▲ためしなき我が身。例のなき幸の身也と也▲たちかさね。たちに錦綾をたちの意をきかせ。衣にして襲ぬるに、物を重ぬるをいひそ

おはします頃神無月の十日頃朝覲の行幸し給ふ世にある限りの上達部殿上人仕うまつる。いろ〳〵の菊紅葉をこぎまぜて、いみじう面白し。女院もおはしませば、拜し奉り給ふを、太政大臣見奉り給ふによろこびの涙ぞ人わろさほどなる。

ためしなき我が身よいかに年たけて
かゝるみゆきに今日つかへつる。

げに大かたの世につけてだに、めでたくあらまほしき事どもを我が御末と見給ふおとどの心ち、いかばかりなりけん。來し方もためしなきまで、高麗唐土の錦綾をたちかさねたり。太政大臣ばかりぞねび給へれば、裏表白き、あやの下がさねを着給へるしもいとめでたくなまめかし。池にはうるはしく、からのよそひしたる御船二艘こぎよせて、御遊さまざまの事ども、めで

たくのゝしりて歸らせ給ふ。ひびきのゆゝしさを女院も御心ゆきてきこしめす。その頃ほひ、熊野の御幸侍りしにもよき上達部あまた仕うまつらせ給ふ。都いでさせ給ふは、例のさじきなど心ことにいどみかはすべし。車は立てぬ事なりしかど、大宮院ばかりそれも出車はなくて、只一輛にて見奉り給ひしこそ、やんごとなさもおもしろく侍りけれ。辨の内侍、

をりかざすなぎの葉風のかしこさに
ひとりみちある小車の跡。

御幸熊野の本宮につかせ給ひて、それより新宮の川船に奉りてさしわたす程川の面所せきまで續きたるも、御覽じなれぬさまなれば、院のうへ、

熊野川せぎりにわたすすぎ船の
へなみに袖のぬれにけるかな。

その後も又程なく御幸ありしかば、女院もまゐり給ひけり。皆人知し召したらん事なか〳〵にこそ。

【上欄拾遺】愛染王。愛染明王をいふ▲座さまさぬ法。長き間の修法をいふ。僧の座の常に暖れるをいふ▲供僧。修法をつとむ僧▲紅梅の衣。濃き紅の衣をいふ▲來迎のけしき。往生の時には諸佛來り迎ふといふ。そのすがたをうつしたる也▲廿五菩薩。觀音、勢至、藥王、藥上、普賢、法自在、獅子吼、陁羅尼、虛空藏、寶藏、金光藏、金剛藏、光明王、山海惠、華嚴王、衆寶王、月光王、日照王、三昧王、定自在王、大自在王、白象王、大威德王、邊身王をいふ▲右は上首云々。忠家と實基とは何れも同じく正二位大納言にて實基先任故坐席は當然忠家の上にあるべし。されども近衛にては左大將忠家は右大將實基の上にあり。故に互に車をたつべき處を爭へる也▲末の代には云々。唯今はかくまで威勢ありて榮ゆれど末の代にはいかがあるべき甚だおぼつかなしと也▲最勝經

へたり▲れび。齡のたけたる也▲熊野御幸。建長二年十一月十一日▲さじき。見物の時座を構ふる也。棧敷▲車は立てぬ事。物見車を路にたてゝ見物することは禁ぜられたる也▲なぎ。此木は熊野山に多く生ひ出づ。なぎををりかざすといふことにて熊野參詣の意をきかせたり▲せぎり。瀨を遮る意。舟をあまたこぎつづけたるを瀨を遮ると見たてたる也▲へなみ。舟の袖にうちかくる浪▲なか〳〵にこそ。いふもなかなかにこその意。却つて煩はしさいふ也。

五卷の日。中の日をいふ也。五卷目を講ずる日なれば也。前の最勝講の註を見よ▲七佛藥師五壇の御修法。七佛藥師の御修法と五壇の御修法と也。七佛藥師は善稱名吉祥王。寶月智殿光音自在王。金色寶光妙行成就。無憂最勝吉祥。法海雷音。法海勝惠遊戯神通、藥師瑠璃光等の如來也。五壇は東西南北中央の五壇に五大尊(前の五大堂の註を見よ)を安置して祈る也▲月次の御神事。月次祭は古は毎月之れを行ひたる故にこの名あり。大寶以來は六月十二月の二季に之れを行ひ、貞觀以後は二季十一日を祭日と定む▲日ついで心やましき云々。日次あしければとて御産の由を奏せざる也▲御湯殿。御産湯をあびさせ奉ること。朝夕二度ある儀式▲つるうちう。御湯を召させ奉る間、弓の絃を鳴らす也。惡魔を拂ふためとぞ。御湯殿の鳴弦といふ▲はしかくしの間。貞丈雜記に、御殿の階の前に柱を二本たて、上に屋根をふき出したるをはしかくしの間といふ。階の雨にぬれぬ樣、屋根にて階を隱す心也云々とあり▲拍子。笏の如き形したるもの二枚を拍ちて音樂の調子曲節をとる▲箏の琴。今いふ琴。十三絃なり▲和琴。六絃の琴。わごん。やまとごとなどいふ▲末の拍子。樂曲を前後に分ち前を本とし、後を末とす▲安名尊、席田は催馬樂呂歌。伊勢海は律歌也。鳥破は鳥といふ左樂の童舞。破は曲の名也。萬歳樂、三臺急は唐樂の名。三臺急の急は急拍子なる也▲うつし馬。うつし鞍をおきたる馬をいふ。さて又移鞍とは唐鞍を摸して作れる一種の鞍也▲二重織物。織物の上に縫物をしたる物▲下襲。袍の下に重ねて着るもの後を長くして袍の下に出し、引きたるまゝに練り歩むも也。これを裾といふ後世は裾を別に付くるやうになりたれど、もとは下襲につぎたる也▲うへの袴。大口の袴の上に着るよりこの名あり▲うら山吹。表黄裏朽黄をいふ▲梅がさね。表白裏綵芳をいふ▲うき織物。あやをうかせておりたる物▲浮紋。うきおりの綾▲かた舞。かたおろしともいふ。東遊(アヅマアソビ)の曲の名。神樂に肩ぬぎて舞ふことあるよりいふ▲久安。近衛天皇久安三年四月十日覺性法親王。六條天皇仁安三年四月十二日守覺法親王。順德天皇建暦二年十二月六日道助法親王。後堀河天皇寛喜二年十二月九日道順法親王何れも親音院にて御灌頂あり▲狩衣。もとは應狩の時に用ゐし服。後に官服となれり。單の絹にて作る。五位以上織物、六位以下無紋▲綱代。冬の頃河の中に竹木な

どをうち列ね、その末に袋をつけおき、夜篝火をともして氷魚のより來るを待ちて捕ふる也▲氷魚。形白魚に似て小さく、色潔白にして氷の如し▲よるもさながら。よるは寄るに夜をいひかけたり▲蓬の髪云々。これも序の文也。蓬の髪とは亂髪をいふ。霜寒くは白髪になれるをいふ。霜さいへるより寒といふ也。七代とは後鳥羽、土御門、順徳、後堀河、四條、後嵯峨、後深草をいふ。實氏、後鳥羽天皇の建久八年從五位に叙せられ、後深草天皇まで代を經る事七。今年五十六髪白くなりたるをいふ▲いはひおくの歌。今日始めての御幸なれば今日を始めとして祝ひおく松が枝に千歳の色を見せてすめる池水に影をうつして長閑なりとの意。すめるは池水の澄めるに住むをきかせたり▲貝おほひ。貝あはせともいふ三百六十の蛤貝を分ちて一片の殼を地貝と稱し、悉く場に並べ、中央に空所をおき一片の殼を出貝といひて一箇づつ出して空所におき、衆、圍み坐して出貝と地貝と相合ふべきものを認めて之れを合す。多く合せたるものを勝とす▲へんつぎ。詩句などの中の字の偏をかくして旁のみを見せ、何篇と推し中てしむる事▲かぶとの花。紙にて冑をつくり、その上に、種々の花をかたどり、或は紙にて人形をつくりすゑなどして童の翫具にする也▲薬玉。種々の香料を玉にして、種々の造花を結びつけ、五色の絲の八尺ばかりなるを垂れたるもの、簾又は柱などにかけて邪氣を避くるといふ。又續命縷、長命縷などいふ▲あやめ草云々の歌。このあやめ草は底も知れぬ程深き沼にて掘りたる長さ根なりとて深き御心の程を見せ給へるやうなれど、果して御心は深きにや、よもやさは思へどもとの意。さてしらぬまに沼をいひかけ、よもぎふによもやの意をそふ▲出車。儀式の時かざりてならぶる車▲すそごの袴。上をうすき色にし裾に至るに從ひて次第に濃くそめ出せるを裾濃といふ。

第六　おりゐる雲

春すぎ夏たけ、年さり年きたれば康元元年にもなりにけり。太政大臣の第二の御女（東二條院公子）女御に參り給ふ。女院の御はらからなれば過し給へる程なれど、かゝる例はあまた侍るべし。十一月十七日豐明の頃なれば、内わたり花やかなるに、いとどうちそへて、今めかしうめでたく、その日御消息を聞え給ふ。

夕ぐれにまつぞ久しき千歳まで
かはらぬ色のけふのためしを。

關白書かせ給ひけり。紅のにほひの薄一本もなき八重にかさねたるを結びて包まれたり。時なりぬとて人々まうのぼりあつまる。女御の君、裏濃きすはう七、濃き一重、すはうのうはぎ、

太政大臣。實氏▲過し給へる。帝は御年十四女御は廿五にてうちすぎ給へるをいふ▲豐明。新嘗祭の翌日行はるゝ宮中の宴會。十二月とあるは十一月の誤▲夕ぐれ。入内の儀は夜なればかくいへり▲まつぞ。待に松をいひかく▲紅のにほひの云々。拾遺を見よ▲裏こきすはう七。濃き一重。から

赤色のからぎぬ濃き袴奉れり。じゆごうそひてまゐり給ふ。皆くれなゐの八蒲黄のうはぎ赤色のから衣着給ふ。いだし車十輛、皆二人づつ乘るべし。一の車、左に一條殿（大殿の）右に二條殿（公忠卿の大納言の）二の左わせちの君（實たふの女）三の左に民部卿殿、右別當殿その次々、くだ〳〵しければ止めつ。御童、下仕、御はした、御ざうし、御ひすましなどいふものまでかたちよきをえりとゝのへられたる、いみじう見所あるべし。御兄の殿ばら、右大臣（相公）内大臣（丞公）參り給ふ。限りなくよそほしげなり。院の御子にさへし奉らせ給へれど、いよ〳〵（大切）いつかれ給ふさま、いはん方なし。待賢門院の、白河院の御子とて、鳥羽の院に參り給へりしためしにやとぞ心あてには覺え侍りし。御門のひとつ御腹の姫君、この頃皇后宮とて、その御方の内侍ぞ御使にまゐる。

ぎぬ。拾遺を見よ▲じゆごう。淮后也貞子▲みなぐれなゐの八。拾遺を見よ▲下仕。いやしき宮仕女▲ひすまし。厠の掃除をするもの▲見所あるべし。見るかひありと也▲院の御子にさへ云々。この女御を後嵯峨院の御子とし給ふをいふ▲心あて。推量▲御使にまゐる。上に見えたる天皇の御消

息をもたらされたる使▲えうどかれ給はぬ。入内し給はぬをいふ。年のあまりに遠ふを耻かしくおぼされたる也▲御几帳。壷上に柱をたて帷を垂れて座側におくもの▲火取。薫爐のこと也▲紅のうち。うちたる紅のきぬ也。うつさは砧にてうち光を出したるをいふ。八恐らくは衍▲うはざしの組の上に縫ひてかざりとせるものをいへるなり▲細長。衣の名にして、童または女官などのきるもの▲おしなべたらぬ人々。貴き人々をいふ▲もちひの使。三夜の餅さて禮婚の三日目に餅を奉る使▲紅梅のにほひ。上紅梅に薄紅梅を重ぬるをいふ也▲蒲萄染。紫色の淺きものなりといふ。組は組糸

まうのぼり給ふ程も、女御は、いとはづかしく似げなきことに思したればとみにはえうどかれ給はぬを、人々そゝのかし申し給ふ。御太刀一條殿、御几帳按察使殿、御火取中納言もたれたり。上は十四になり給ふに女御は二十五にておはしける、御門きびはなる御程を、なかなかあなづらはしき方に思ひなし聞え給ひぬべかりつるに、いと、ざれて、つゝましげならず、聞えかゝり給ふを、淮后はうつくしと見奉らせ給ふ。御衾は紅のうち八四方なるに、かみにはうはざしの組あり。絲の色などきよらにめでたし。例の事なれば淮后たてまつり給ふ。太政大臣も三日が程は候ひ給ふ。上達部に勸盃あり。廿三日又御消息まゐる。御使、頭中將通世、こたみも殿かゝせ給ふめり。この頃殿と聞ゆるは太政大臣のおとど、岡屋殿の御兄ぞかし。後には稱念院と申しけり。御手勝れてめでたく書かせ給ひしよ。廉司殿の御家の始なるべし。

あさ日影けふよりしるき雲の上の
　そらにぞ千世の色も見えける。

御返し、太政大臣きこえたまふ。

あさ日影あらはれそむる雲の上に
　ゆくすゑ遠き契をぞしる。

女の裝束綱長そへてかづけ給ふ。今日始めて、内のうへ、女御の御方にわたらせたまふ。御供に關白殿、右大臣内大臣四條大納言權大納言家敎、通成、左大將など、おしなべたらぬ人々參り給ふ。もちひの使、頭中將隆顯仕うまつる。太政大臣夜のおとどよりとり入れ給ふ。御心の中のいはひ、いかば

ふ▲こしざし。きぬの巻きたるものにして腰にさす▲國母。天皇の母君を申す。こゝにては大宮院をいふ。其の妹公子中宮に立ち給へるより、たちつづきといへる也▲うつはもの。器量▲さる世の云々。後鳥羽院に仕へ奉れりし程のふるき人なればいふ▲さし並ぶ。兄弟とも左右大將たるをきか

かりかと推し量らる。人々の祿、紅梅のにほひ、蒲黄のうはぎ、蒲萄染のからぎぬ、うちき、ほそなが、こしさしなど、しなじなに隠ひてけぢめあるべし。かくて今年はくれぬ。正月いつしか后に立ち給ふ。ただ人の御女の、かく后、國母にて立ちつづき候ひ給へる、ためしまれにやあらん。おとどの御さかえなめり。御子二人大臣にておはす。公相公基とて大將にも左右にならびておはせしぞかし。これも例いとわまたは聞えぬことなるべし。我が御身太政大臣にて二人の大將を引き具して、最勝講なりしかとよ。参り給へりし御勢のめでたさは、珍らかなる程にぞ侍りし。后、國母の御親、御門の御祖父にて誠にそのうつはものに足りぬと見え給へり。昔、後鳥羽院に候ひし下野の君はさる世のふるき人にておとどに聞えける。

せたり▲三笠山。近衛大將の異名▲こずゑ。梢に子末きかせたり▲思ひやれ。かかるうれしさを思ひやれと也▲春さめ。天皇の御恩澤にたとへたり▲我が身なりけり。我が身に最も多くふりかゝるといふ也。君恩を受くること重きをいふ▲ことわりの御年。御年齢の老いたまへるをいふ▲坊に居

藤なみのかげさしならぶ三笠山
　人にてえたるこずゑとぞ見る。

かへし、おとど、
　思ひやれみかさの山の藤の花
　　さきならべつゝ見つるこゝろを。

かゝる御家のさかえを自らもやんごとなしと思しつづけて、よみ給ひける。

はるさめは四方の草木をわかねども
　　しげきめぐみは我が身なりけり。

正嘉元年の春の頃より、承明門院御惱重らせ給へば、院もいみじう驚かせ給ひて御修法なにかと聞えつれど、遂に七月五日、御年八十七にて、かくれさせ給ひぬ。ことわりの御年の程なれ

給ひぬ。皇太子に立ち給ふをいふ▲高野。紀伊國伊都郡。高野山金剛峯寺也。さて御幸は正嘉二年のこと也▲舍人。牛車の牛飼▲雜色。雜役に供する下人▲かたほ。全くさゝのはぬをいふ▲しろがねこがね云々。金銀をのべたる也▲櫻のからのきのもん。櫻色の唐の綺。綺とは羽二重の如く紋あるもの▲浮線綾。綾の類。浮織にしたるもの▲立田姫。秋を司る神といふ。立田姫のおり成す錦▲紺むらご。むらごとは所々にむら雲の如くに染めたるもの。紺色にてむら濃おいたる也▲それしも。紺色にてはでならねども▲除目。任官の儀▲引きたがへて。事相違して▲うらみに堪へず。大將

ど、昔の御なごりと、哀にいとほしう、いたづき奉らせ給ひつるにあへなくて、御法事など、ねんごろにおきて宣はする、いとめでたき御身なりかし。わくる年八月七日、二の御子の鹿山院坊に居給ひぬ。御年十なり。よろづ定りぬる世の中、めでたく心のどかにおぼさるべし。その又の年、正嘉三年三月二十日なりしにや、高野御幸こそ、又來し方行末もためしあらじと見ゆるまで、世のいとなみ、天の下のさわぎには侍りしか、關白殿、左右大臣、内大臣、左右の大將、檢非違使の別當をはじめて殘るはすくなし。馬鞍、隨身、舍人、雜色、童の髮かたち、たけすがたまで、かたほなるなく、えりとゝのへ、心を盡したるよそほひども、かず〳〵は筆にも及び難し。かゝる色もありけりと、珍らしく驚かるゝ程になん。しろがねこがねをのべ、二重三重の織物縫物、からやまとの綾錦、紅梅の直衣、櫻のからのきのもんすそゑ、浮線綾、いろ〳〵さまざまなりしうへのきぬ、狩衣、思ひ〳〵の衣を出せり。いかなる立田姫の錦も、かゝるたぐひはありがたくこそ見え侍りけれ。かたみに語らふ人はあらさりけめど、おなじ紋も色も侍らざりけるぞふしぎなる。あまりに染めつくしてなにがしの中將とかや紺むらごの指貫をさへぞ着たりける。それしもめづらかにて賤しくも見え侍らざりけるとかや。院の御さまかたち事がらは、いとど光をそへてめでたく見え給ふ。後土御門の内大臣定通の御子の顯定の大納言、大將望み給ひしを院もさりぬべくおほせられければ、除目の夜殿の内のものどもゝ、心づかひして侍るを心もとなく思ひあへるに引きたがへて先に聞えつる公基のおとゞにておはせしやら

に任ぜられざりしを怒りて▲かの室。顯定の庵室▲桂の葉室の山莊。山城國葛野郡▲見えじとなり。對面せずと思ふ也と也▲いとからい心。甚だつらい心なるよと也▲吉田の院。山城愛宕郡▲御鞠に云々。蹴鞠をあそばさるゝ也▲あげまり。まりを蹴あぐる作法。蹴鞠の中にて尤も重き役なりといふ▲わりご。食物を入る器▲嵯峨の龜山のふもと云々。山城國葛野郡にあり▲小倉山。嵯峨二尊院の上方にあり▲戸瀧瀬瀧。大井川の上流にあり▲自ら云々。自然の風情をそへたるをいふ▲橘の太后。嵯峨天皇の皇后橘嘉智子▲長老。もと德高き僧をいふ。こゝにては寺の司の意▲天王寺。

んなり給へりしかばうらみに堪へず頭おろして、この高野にこもり居給へるをいとほしくあへなしと思されければ、今日の御幸のついでに、かの室を尋ねさせ給ひて、御對面あるべく仰せられつかはしたるに昨日までおはしけるが、夜の間にかの庵をかきはらひ、跡もなくしなして、いと清げに、白きすなごばかりを、ことさらにちらしたりと見えて、人もなし。我が身は桂の葉室の山莊へ逃げ上り給ひにけり。その由奏すれば「今さらに見えじとなり。いとからい心かな」とぞ宣はせける。かくのみ所々に御幸しげう、御心ゆく事隙なくて、聊も思しむすぼほる事もなく、めでたき御ありさまなれば仕うまつる人々までも思ふ事なき世なり。吉田の院にても常は御歌合などし給ふ。鳥羽殿にはいと久しくおはしますをりのみあり、春の頃御幸あり

しには御門も御鞠にたゝせ給へり。二條の關白殿あげまりし給ひき。内の女房など召して、池の御船にのせて、物の音ども吹きあはせ、さまざまの風流のわりご引出物など、こちたき事ども もしげかりき。又、嵯峨の龜山のふもと、大井河の北の岸にあたりて、ゆゑしき院をぞ造らせ給へる。小倉の山の木すゑ、戸瀧瀬の瀧も、さながら御墻のうちに見えてわざとつくろはぬ前栽も、自らなさけを加へたる所がら、いみじき繪師といふとも筆及び難し。寢殿のならびに、いぬゐに當りて、西に藥草院、東に如來壽量院などいふもあり。橘の太后のむかし建てられたりし檀林寺といひし、今は廢して礎ばかりになりたればその跡に、淨金剛院といふ御堂を建てさせ給へるに、道覺上人を長老になされて、淨土宗をおかる。天王寺の金堂うつさせ給ひて、

摂津大阪市の東南▲金堂。本堂也▲持佛。常に身をはなたず所持して祈念する佛▲引き離れたる。寢殿持佛堂などに通ふ道をいふ也▲三葉四葉。拾遺を見よ▲一切經供養。一切經とは佛教に關する一切の經をいふ。さてその經を書寫して佛をまつるなり▲えだつ。勞役する意▲樂屋のもの。音樂をするもの▲地下。殿上人に對する稱。五位以下の昇殿を許されざるもの▲御階の間。即階がくしの間也。前に見ゆ▲吹きたて給へる音。笛の音也▲老いしらへたる。ただ老いたるといふに同じ。しらへは意をたすくる詞なり▲思すさまに。思のまゝにの意▲文臺。机。短冊書籍などをのする小

多寶院とかや建てられたる。川に臨みてさしき殿造らる。大多勝院と聞ゆるは寢殿のつづき、御持佛する奉らせ給へり。かやうの引き離れたるみちは廊、渡殿、そり橋などをはるかにしてすべていかめしう、三葉四葉に磨きたてられたるいとめでたし。正元元年三月五日、西園寺の花ざかりに、大宮院一切經供養せさせ給ふ。年比おぼしおきてけるをも、いたく知し召さぬに、女の御願にていとかしこくありがたき御事なれば院も同じ御心にえだち宣ふ。樂屋のものども、地下も殿上も、なべてならぬをえりとゝのへらる。その日になりて行幸あり。春宮も同じく行啓なる。大臣上達部皆うへの衣にて、左右に分れて、御階の間の高欄につき給ふ。法會の儀式、いみじくめでたき事ども、まねび難し。又の日、御前の御あそび始まる。御門後深草院御琵琶、春宮御笛、まだいとちひさき御程に、びんづらゆひて、御かたちまほに美しげにて、吹きたて給へる音の、雲居をひびかしてあまり恐しき程なれば、天つ少女もかくやとおぼえて、太政大臣ていみもえし給はず、目おし拭ひつゝ、ためらひかね給へるを、ことわりに、老いしらへる大臣上達部など、皆御袖ぞもうるほひわたりぬ。女院の御心のうち、ましておき所なく思さるらんかし。前の世にいかばかり功德の御身にて、かくおぼすさまに、めでたき御榮を見給ふらんと、おもひやり聞ゆるもゆゆしきまでぞ侍りし。御遊はて、後、文臺めさる。院の御製、

いろ〳〵に枝を連ねて咲きにけり
花も我が世もいまさかりかも。

わたりをはらひて、きはなくめでたく聞えけるに、あるじのお

きもの▲いろいろに云々。帝も東宮も院の御子なるより、榮えおはしますさまを花にたとへたる也▲きはなく。限りなくの意▲かげあふ。歌の意り通へるをいふ▲末まで。下々の殿上人までの意▲こゝろの色は開けぬる。心の晴れ開くる意▲世の中に云々。後嵯峨院の東宮を御位にすゑんとの御

とど、歌さへぞかけわひて侍りしにや。

いろ〳〵にさかえて匂へさくら花
わがきみぎみの千世のかざしに。

末まで多かりしかど例のさのみはにてとどめつ。いかめしうひびきて歸らせ給ひぬる、またのあした、無量光院の花のもとにて、おとど昨日の名殘おぼし出づるもいみじうて、

この春ぞこゝろの色はひらけぬる
六十あまりの花は見しかど。

その年の八月二十八日、春宮十一にて御元服し給ふ。御諱恒仁と聞ゆ。世の中にやう〳〵ほのめき聞ゆる事あれば御門はあかず心細う思されて、夜居の間の靜なる御物語のついでに內侍所の御拜の數をかぞへられければ五千七十四日なりけるをうけた

思し召しのほのかに洩れ聞ゆる也▲夜居の間。夜おきてゐられる御室▲內侍所。濕明殿。神鏡を安置せる所。天皇毎朝清涼殿の石灰の壇にてこなたに向ひ御拜ある也▲五千七十四日。寛元四年正月廿九日御位を受げさせられてより正元元年十一月廿六日御讓位まで十四年間御在位の日數▲伊勢の

まはりて辨內侍、

千代といへば五つかさねて七十に
あまる日かずを神は忘れじ。

かくて十一月廿六日、おりゐさせ給ふ夜、空の氣色さへあはれに雨うちそゝぎて、物悲しく見えければ伊勢の御が「あひも思はぬもゝしきを」といひけんふる事さへ、今の心ちして心細く覺ゆ。うへもおぼしまうけ給へれど、劔璽の出でさせ給ふ程、常の御幸に、御身を離れざりつる習、十三年の御名殘、ひきわかるゝは、猶いと哀に、忍び難き御氣色をかなしと見奉りて、

辨內侍、

今はとておりゐる雲のしぐるれば
こゝろのうちぞかきくらしける。

御。宇多天皇更衣▲あひもおもはぬ云々。拾遺を見よ。▲おりゐる雲。天皇の御譲位のことをきかせたり。さてこの篇の名はこの歌より出でたる也。

【上欄拾遺】紅のにほひの云々。表紅に裏薄紅を重れたる薄様の紙。薄もなきとは金又は銀の箔を押さざるをいふ▲裏こきすはう七。裏濃き蘇芳の五つ衣を七つ襲ねたる也。さて又五つ衣とは古の重袿にて表は何の色にても、同じ色のものを五つ重ねて着る也。五領を重ぬるより五つ衣といへど、又幾領も重ねきる也▲濃き一重。紅色濃き単也。単は五衣の下に着るもの▲からぎぬ。女官正装の時表衣の上に着るもの。たけは短く袖も狭き衣也▲みなぐれなゐの八。皆紅の八とは裏も表も紅なる五つ衣を八つ襲ねたる也▲三葉四葉。古今集「この殿はうべもさみけりさき草のみつばよつばにさのづくりして」などさありて、屋宇の重りたるをいふ也▲あひもおもはぬもゝしきを、大和物語に、亭子院のみかど、今はおりゐさせ給はんとて、うちより出で給ひなんとする比、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけゝる「わかるれどあひもおもはぬもゝしきを見ざらんことのなにかかなしき」とありければ、みかど御覧じて、そのかたはらに、かきつけさせ給ひける「身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりても何か見ざらん」さなんありけると見えたり。もゝしきはもと宮の枕詞なりしを後直ちに宮をさらはすことゝなれり。こゝのは後の意也。

烟の末々。篇の名の事此の巻末拾遺に見ゆ▲をかのや殿。兼經▲かねてより世のいとなみなり。御幸につきて上下の人々支度する也▲薄色。拾遺を見よ▲からおり物。緞子繻子の如き唐より渡りたるものをいふ▲白菊の狩衣。表白裏蘇芳▲かた織物。二藍の狩衣。ひはだ。むすび狩衣。拾遺を見よ▲花田。藍色のうすき物▲から野。襲の色目の名。表は黄色にて裏の薄青なるもの▲うすあを。おりいろの名。經白緯青▲かれ野。から野に同じ▲別當。檢非違使別當▲野劔。みじかきかたな▲香の織物。香色の織物也。香色とはあかぐろくして黄ばみたる色▲居飼。馬をあつかふもの▲緋紺

第五　烟の末々

寳治元年十一月廿日頃紅葉御覽じがてら、宇治に御幸し給ふ。

（をかのや殿の攝政の御）

上達部殿上人、思ひ〳〵いろ〳〵の狩衣、菊紅葉のこきうすき、縫物、織物、あやにしき、かねてより世のいとなみなり。廿一日の朝ぼらけに出でさせ給ふ。御烏帽子直衣、薄色の浮織物の御指貫、網代びさしの御車に奉る。先殿上人下蔀より前行す。中將爲氏、浮線綾の狩衣、右馬頭房名、基具、菊のから織物、内藏頭隆行、顯方、白菊の狩衣。皇后宮權の亮道世、右中辨時繼、薄青のかた織物、紫のきぬ。前の兵衛の佐邦經、赤色の狩衣。衛門の佐親嗣、二藍の狩衣。成敏、ひはだ。伴氏、左兵衛の佐親朝はむすび狩衣に菊をおきものにして紫裾濃の指貫、菊をぬひたり、上達部は堀川の大納言具實なほし、皇后宮太夫隆親なほし、花山院の大納言定雅、權大納言實雄、花田の織物の狩衣、から野のきぬ。土御門の大納言定左衛門の督蘇實うすあを、衛門の督通成かれ野の織物のかりぎぬ。別當定嗣なほし。雜色に野劔をもたせたり。皇后宮の權太夫師繼萠黄の浮線綾のかりぎぬ、浮織物のさしぬき、紅のきぬ。土御門の宰相の中將雅家香の織物のかりぎぬ、御隨身、居飼、御廐舍人までいかにせんと、いろ〳〵をつくす。院の御車のうしろに權大納言公相緋紺のかりぎぬ、紅のきぬ、白きひとへにて、えもいはぬさまして仕うまつり給ふ。檢非違使北面などまで、思ひ〳〵にいかでめづらしきさまにとこのみたるは、ゆゝしき見物にぞ侍りし。衛府の上達部は狩ぎぬの隨身に弓やなぐひをもたせたり。

人だまひ、二輛一の車にいろ〳〵の紅葉を濃くうすく、いかなる龍田姫か、かゝる色を染め出でけんと、めづらかなり。二の車は菊を出されたるも、なべての色ならんやは。その外院の御乳母大納言二位殿、いとよそほしげにて、諸太夫、侍清げなる召し具してまゐり給ふ。宰相三位殿と聞ゆるはかの若宮の御母、兵衛の内侍殿といひし、この頃は三位し給へり。今一さはめでたくゆゝしげにて北面の下臈三人、諸太夫二人、心ことに引きつくろひたるさまなり。建久に後鳥羽院宇治の御幸の時、修明門院、その頃二條の君とて参り給へりし例をまねばるゝとぞ聞えける。又大納言の典侍とは藤大納言爲家のむすめ、それも別にひきさがりて、いたく用意ことにてまゐらる。宇治川の東の岸に、御舟まうけられたれば御車より奉りうつる程、夕つかた

*表黄青、裏二蓋に染む。織色は經青黒緯黄▲このみたるは。好み好みの色をきたるはの意▲やなぐひ。胡籙。矢を入れて負ふもの製は箙に似て粗也▲人だまひ。副車をいふ。女房などの乗る料の車▲諸大夫。侍。拾遺を見よ▲兵衛の内侍。平棟基の女也▲ひきさがりて。大納言二位殿。宰相三位殿の列よりはひきさがりて御供に参りたりと也▲御船さし。船こぐ人▲しち。榻。床几なり▲篝白くたかす。篝火を明くたかす也▲御臺。臺は臺盤御膳をおくもの也▲錦のうちしき。錦にて作りしもの▲二なり。二基なりといふことなり▲ついがされ。食物をのする器。今の三方の如し▲放

になりぬ。御船さし、いろ〳〵のかりあをにて八人づつさまさまなり。基具の中將、院の御はかせもたる。顯朝御しぢ参らす。平等院の釣殿に御船よせておりさせ給ふ。本堂にて御誦經あり。御導師まかでて後、阿彌陀堂、御經藏、懺法堂までことごとく御覽じわたす。川の左右の岸に篝白くたかせて、鵜飼ども召す。院の御前より始めて御臺どもまゐる。しろがねの（しろがねの下文字なし脱文なるべし）錦のうちしきなど、いと清らにまうけられたり。陪膳權大納言公相、やくそうは殿上人なり。上達部には御臺四本、殿上人には二なり。女房の中にもいろ〳〵さまざまの風流のくだもの、ついがさねなど、よしあるさまに、なまめかしうしなしてもて續きたる、こまかにうつくし。院のうへ、梅壺の放出に入らせ給ふ。攝政殿、左のおとゞ皆御供にさぶらひ給ふ。又の日の暮

出。棟を別につくり出したる間▲耳とむるものや。この下にあらんの語を入れて見るべし▲うばそくの宮の云々。拾遺を見よ▲けはひ。假粧に同じ▲ほうだう。本堂のこと▲一品し給ふ。從一位に叙せらるゝをいふ也▲拜舞。拜禮の舞蹈。物をたまはりたるときなどにすることなり▲遊びのゝしる。のゝしるは騷ぐこと▲殿の家司。關白兼經の家つかさ▲寛治。堀河天皇の年號▲保元。二條天皇の年號▲ふるきためし。寛治保元の御幸▲かいぐ。皆具也。一そろひの事▲ひちづつみ。今の風呂敷のやうなるものにつゝむ事▲長櫃。今の長持▲宰相三位。宗尊親王御生母▲御ろす。宇治御幸

つかた又御舟にて、まきの島、梅の島、橘の小島など御覽せらる。御遊始まる。船のうちに樂器ども設けられたれば、吹きたてたる物の音、世に知らず。所がらはまして面白うきこゆるに水の底にも耳とむるものやと、そぞろ寒き程なり。かのうばそくの宮の「へだてゝ見ゆる」と宣ひけん、をちの白浪も艶なる音をそへたるは萬をりからにや。廿三日還御の日ぞ御贈物ども奉り給ふ。御手本、和琴、御馬二疋參らせらる。院よりも、あるじのおとどに御馬奉り給ふ。院の御隨身ども、けはひことにて、ほうだうの前の庭に引き出でたれば衞門の佐親朝、親嗣、二人うけとる。殿おり給ひて拜し給ふ。（関白保経のおとどの御事なり）その後賞行はる。左の大臣一品し給ふべき由、院のうへ自ら宣はすれば又立ち出でて、直衣を奉りながら拜舞し給ふ。萬御心ゆく限り、遊びのゝしらせ給ひ歸らせ給ふまゝに、左大臣殿（兼平）從一位し給ふ。殿の家司季頼四品ゆるさせ給ふ。いとこよなし。寛治には良經正四位下保元に月輪殿從下の四品をぞし給ひける。今の御ありさまは、かのふるき例にも越えたり、いとめでたくおもしろし。還御の當日に、女房の裝束かいぐ、いろ〳〵にいと清らなる十具、各々ひらづつみに長櫃にて大納言二位の曹司におくらる。又宰相三位の許へも、別に遣されけり。建久には夏なりしかば、ひとへがさね廿具のりけるを思し出でけるにや。さまざまゆゝしき事どもにて過ぎぬ。この御るすの程に二條油小路に火出で來て、閑院殿のついがきのうちなれば内膳屋燒けて神代よりつたはれる御釜も、燒けそこなはれけるをぞいとあさましき事には申し侍りし。かの釜むかしは三つありけるを一をば平野、一

の御不在の間▲圓融院の御代。永觀元年也▲神祇官。古、太政官の上にある官。神祇の祭禮巫覡龜卜等をつかさどる▲みづのとの祭。毎月癸の日をえらびて陰陽寮にてする祭▲六月十二月の云々。月次祭也。前に註せり▲いもし。鑄物師▲古きを云々。古き釜の損はれたるところばかりを鑄直す

をば忌火、一をば庭火と申しけるを圓融院の御代永觀の頃、二はうせにけり。いま一殘りたるに、かかる事の出で來ぬるはいとよろしからぬわざなりとて、神祇官にたづねられ、ふるき事ども考へらる、平野といひけるを陰陽寮にするてみづのとの祭といふ事に用ゐけれど、中頃よりかの祭は絶えぬ。忌火といふにては六月十二月の御神事の御膳をば調じけり。庭火にて常の御膳をば仕うまつる。かゝればいと怠々しき事にて始めは、いもしに仰せらるべきかとも申す。古きを損はれたる所ばかりをなほさるべきかとも、いろ〳〵に定めかねられたり。入道太政大臣などもふるきを直さるべしと聞えける。その頃宰相の三位の若宮（宗尊親王の御事なり）御書始とて、人々まゐりつどひ給ふ。七にならせ給ふべし。關白殿を始め、大臣上達部のこりなし。十二月の廿

と▲保延のためし。崇德天皇の保延三年十二月後白河天皇の御書始をいふ▲思ひなしさへ。我が思ひやるさへの義▲拜禮。歳首の禮を公卿殿上人等の上皇女院攝政などに申し上ぐる儀▲冷泉萬里小路殿。後嵯峨上皇の御在所▲両貫主。貫主は藏人頭をいふ。両とは左中將源基具同藤原公藤をい

五日なり。文章の博士序奉らる。管絃の具召されて、人々例のごと吹き合せ給ふ。その後文臺召して詩の披講ありき。勸盃の儀式、何事も保延のためしとぞ承はりし。かくて年明けぬれば寶治も三年になりぬ。春たちかへるあしたの空の光は思ひなしさへいみじきを、院うちの氣色、誠にめでたし。攝政殿にも拜禮行はる。院の御前は更にも言はず、大宮院にもあり、まづ冷泉萬里小路殿といふは驚の尾の大納言隆親の家ぞかし。この頃院のおはしませば拜禮に人々まゐり給ふ。攝政殿（左大臣）右大臣（忠家）内大臣（實基）大納言には公相、實雄、顯定、道良、中納言に爲常、良教、資季、冬忠、實藤、公光、道成、定嗣、宰相に通行、師繼、顯朝、殿上人は兩貫首を始め數知らず、常の年々に越えて、この春は參りこみ給へり。人々たちなみ給へる時、

ぶ▲たちなみ。立ち並び也▲屏風に似たり。出入して席次みだれたるをたとへたる也▲さたがましく。沙汰めかしていふ▲貞應元年云々。拾遺を見よ▲内の小朝拜。清涼殿の東庭にて殿上人朝拜の禮を行ふ▲こうじ。困じの字音をなだらかによみたるなり▲疲勞すること▲あく世なう。見あきりせ

左の大臣は攝政の御子なれば引き退きて立ち給へり。それにつぎて、大納言も同じつらなり。良教、公光、師繼、顯朝、また退きて立ちたれば出入して屏風に似たり。この事見にくしと後までさまざま院の御前におほせられて、攝政殿に尋ね申され、さたがましく侍りけるを、貞應元年のためしなど出で來て、故野宮左大臣、今の内の大臣の御親の、右大臣にて退きたるつらに立たれたりけるを、その時の記錄など見給はざりけるにやとて内の大臣の御ふるまひ、心得ずとぞ沙汰ありける。院の拜禮はて、、内の小朝拜、節會などに皆人々こうじ給へるに又、大宮院の拜禮めでたくぞ侍りける。四日は承明門院へ御幸はじめ、院の御さまの、つきせずめでたく見えさせ給ふを、わく世なういみじと見奉らせ給ふ。浮織物の薄色の御指貫、紅の御衣奉れ

ざる義▲萬乘のあるじ。天子の御位の意▲御母代。御母となりてうしろみをし奉るもの▲この御門幼く云々。この御門とは後深草天皇を申す▲去年の八月。寶治二年八月八日皇后宮となり給へり▲仙華門院。建長三年三月廿七日院號を奉らる▲院の若宮。後嵯峨院の若宮。宮圓助法親王のこと▲圓滿

り。上達部、殿上人、直衣、うへの衣、思ひ〳〵なり。攝政殿もまゐり給ふ。夜に入り歸らせ給ひぬれば、やがて〳〵又大宮院内へ御幸はじめ、これも上達部、殿上人、ありつる限り殘りなし。網代びさしに奉る。皇后宮の御方の東むきへ御車よせて、宮對面いとめでたし。うへはまだいといわけなき御程にて、かくいつくしき萬乘のあるじに備り給へる御ありさまを、女院もいとやんごとなく、辱しと見奉り給ふ。皇后宮と聞ゆるは、これも院の御兄にて位におはしまし、時も、御母しろなど聞えさせ給ひしを、この御門幼く渡らせ給へば、今はいとどまして、内にのみおはしまして、去年の八月より、皇后宮ときこゆる。後には仙華門院と聞えし御事なるべし。院の若宮十三にならせ給ふは公宗の中將といひし人の女の御腹なり。圓滿院の

法親王の御弟子にならせ給ふべしとて、正月廿八日に、その御用意あり。承明門院よりわたり給ふ。院の網代びさしの御車にて、上達部は車、具覆の大納言を上首にて六人、殿上人十六人、馬にていろ〳〵にいとよそほしう、めでたくておはしまし。その夜、やがて御髪おろして、御法名圓助と聞ゆ。いとうつくしげさ、佛などの心地して、あはれに見え給ふ。院の宮たちの御中には、御兄にてものし給へど、御げさ〳〵の弱さは今も昔もかゝるこそ、いといとほしきわざなりけれ。御匣殿の御腹の若宮も、三にならせ給へる、承明門院にて御魚味きこし召しなどすべし。これも法親王がねにてこそはものし給はめ。あまたの御中にこの御子は御かたちすぐれ給へれば院もいとらうたく思ひ聞えさせ給ひけり。かくいふ程に、二月一日の夜、常より

院。三井門跡▲法親王。仁助▲佛などの心地して。佛を見る樣感ぜらるゝをいふ▲御げさくの弱きは。げさくは外戚。弱きは其の威權のはかばかしからぬをいふ▲御匣殿。貞觀殿の一名。後宮也。時の御匣殿は太政大臣公房の女▲魚味。眞柴始さて、小兒生れて廿ヶ月又は廿五六ヶ月に當りてこの儀あり。主人魚を三箸小兒に含め食はしむ▲法親王がね。豫て法親王に定れるをいふ▲子の時。今の夜十二時▲對。對の屋。寢殿に斜に對ひて別に設けたる家廊にて通ふ。女房の住む長局▲なのめなる。ただ一とほりの事也と也▲現し心なし。正氣を失ひたる也▲かたはばかり。方憚也。方角

も、九重の宮の内、人ずくなにて大方夜も靜なるに、子の時ばかりに、閑院殿の二條おもての對より火いで來て、棟もえおつる程にぞ、始めて見つけたる。あさましともなのめなる。何のたどりもなく、只あわてさわぎ、我れも人も現し心なければ、公直の中將の御宿直に候ひけるが車の陣なるを召して、皇后宮の御方へよす。内のうへをば、御匣殿抱き奉らせ給ひて宮も奉る。劔璽ばかりとり具して、門を急ぎ出でさせ給ふ。とばかりありて、權中納言實雄の參り給へりける車にめしうつりて、春日富小路に公相の大納言のおはする家に行幸なる。その程にぞ攝政殿を始め、前の太政大臣、左大臣、内大臣より下殘りなく人々まゐり集ひ給ふ。院も御車引き出でて見奉らせ給ふ。かゝる程に閑院殿より春日は、かたはばかりありとて院のおはしま

の忌ある也▲しばし内裏になりぬ。暫時皇居と定められたりと也▲世あがりての事は云々。上代の事は措きて問はずとの義▲承元。土御門天皇承元二年十一月廿七日閑院内裏焼亡▲例なき事。天皇は鳳輦腰輿ならでは乗りたまはぬ事なればかくいふ▲かたぶき申す。批難するをいふ▲御旅の雲居

す萬里小路殿へひきかへして行幸あり。夜明けはてゝのち、又前の太政大臣の冷泉富小路へ行幸なりて、しばし内裏になりぬ。内のやくることはこれを始にもあらず、世あがりての事はさしおきぬ。天徳四年、村上のさばかりめでたかりし御代よりこのかた、既に廿餘度になりぬるにや。聖の御代にしもかゝる事は侍りしかど、承元に焼けにし後は久しくこの四十四年はなかりつるに去年の冬、御釜焼け損じて、又かくうち續きぬるを、いとわさましう思す。何よりも御門の御車に奉りて出でさせ給へるを、いたく例なき事とかやとて、人々かたぶき申す。院も驚き思されて、ふるき事ども、廣く尋ねられなどすべし。院も内もはひわたる程の近さなれば御宿直の人々など日比よりも參りつどひて、御旅の雲居なればなか〳〵いと顯證なり。北の對

。假の皇居といふこと▲顯證。はればれしたることをいふなり▲薄様。さりのこの紙のうすくすきたるもの▲かされてにほへ。梅の花は幾重にも咲きかさねよといふ也。かされてと九重とをかけ合せてよめり▲今出川。實氏の第▲老はかく云々。物語する尼の詞。物をよく忘るゝより老はつち

のつまなる紅梅の、いとおもしろく咲きたるが、院の御前より御覽じやらるゝ程なれば、雅家の宰相の中將していと艶になよびたる薄様にかゝせ給ひて、院の上、

色も香もかさねてにはへ梅の花

とゝのへになる宿のしるしに。

とて、かの梅に結びつけさせらる。御返し、辨の内侍承りて申すべしとさゝ侍りしをなのめなりといふ事にて、おとゞ今出川より申されけるとかや。それも忘れ侍りぬるこそ口惜しけれ。老はかくうきものにぞ侍るや。世の中とかく騒がしとて年號かはる。三月十八日、建長になりぬれど、猶、火災靜らで、廿三日また〳〵姉小路室町、唐橋の大納言雅親の家のそばより、火出できて百餘町やけたり。おびただしともいふかたなし。寛元

きものぞさいふ也▲寛元四年云々。寛元四年六月六日火事あり▲あざみ。おどろきあきろゝをいふ▲蓮華王院。拾芥抄に在鴨河東七條南と見ゆ▲御幸なる。後嵯峨上皇蓮華王院に御幸ある也▲一時のほのほに云々。ただ一時の火焔に歸したるをいふ▲今熊野。三十三間堂東南三町許と山城名勝志

四年の六月にも、おそろしき火侍りしかど、この度は猶それよりもこえたり。かの雅親の大納言の家ばかり、四方は皆燒けたるに、殘れる、いと〳〵不思議なりとぞ見る人毎にあざみける。

曉より出で來たる火夜に入るまで消えず。未の時ばかりに、蓮華王院の御堂にもえつきければ、俄に院も御幸なる。御道すがらも、さながら烟をわけさせ給ふ。いと珍らかにあさまし。攝政殿も御車に參り給へり。三十三間の御堂の千體の千手、一時のほのほにたぐひ給へば不動堂北斗堂も殘らず。寶藏鎭守ばかりぞ辛うじてうちけちにける。後白河院のさばかり御志深うおもほし立ちて長寛二年供養ありし後はやんごとなき御寺なりつるに、あさましなどいふも愚なり。又今熊野の鐘樓僧坊など多くやけぬ。つじ風さへ吹きまじり〳〵、ほのほの飛ぶ事、

に見ゆ▲鐘樓。かねつき樓▲つじ風。旋風。はやて▲雙林寺。拾芥抄に祇園東、藥師、大夫尾張定鑑建立とあり▲なにがしの姫君。鳥羽院の皇女、高松院姫宮とも又は雙林寺宮とも申す▲岡崎。名勝志在吉田村元號寶幢寺▲二むら三むら。二所三所の意▲重き御つゝしみ。かく變災のつづくにつ

鳥のごとし。またの朝まで燃えけり。その書つ方、前の火燃えつきて後、雙林寺といふわたりに、火出で來て、なにがしの姫君の御もと、ふるき昔の跡、皆煙になりぬ。その火消えて後、又夕つかた、岡崎わたりに火出で來て、攝政殿の御もと、せうせう燒けけり。又承明門院の近き程にも、火出で來て、人々參り集ふ。中御門より二條まで、又火出で來て、十八町やけぬ。すべて廿三日よりつゞもりに及ぶまで二日を經、時をへてあるは一日に二三度、二むら三むらにわけて燃えあがる。かゝる程に都は既に三分の二やけぬ。いと〳〵めづらかなりし事なり。ただ事にあらずとて、院の御前に、陰陽師七人召して、御占行はる。重き御つゝしみと申せば、御修法どもはじめ、山々にも御いのり仕うまつるべきよし、殊更に仰せらる。院のうへの御

いてはいたく御謹慎あるべしと也▲なでふ事かあらん。何のわざはひかあるべきと也▲五部大乘經。華厳、大集、大品般若、法華の五部の經也▲平野。葛野郡平野云々と延喜式に見ゆ▲北野。山城葛野郡北野▲法輪。拾芥抄に大井河西と見ゆ▲うづまさ。山城葛野郡太秦村▲寺司。寺をあづかれ

ありさまの、よろづにめでたくおはしますを思ふには、何の御つゝしみも、なでふ事かあらんとぞ覺え侍る。位おりさせ給ひにし後は年を經て、春の中に必ず石清水に七日御こもり、その中に五部の大乘經供養せさせ給ふ。御下向の後はやがて賀茂に御幸、平野、北野などもさだまれる御事なり。寺には嵯峨の清涼寺、法輪、うづまさなどに御幸ありて寺司に賞おこなはれ、法師原に物かづけ、すべて神を敬ひ佛を尊びさせ給ふ事、來し方も行末もためしわらじとぞ世の人申しあひける。

【上欄拾遺】烟の末々。この篇記す所、寳治二年内膳屋の火事より、三年閑院内裏の炎上、その三月二十三日より晦まで都のうち延焼三分の二に及べる事などあろより、篇の名とせる也▲薄色。經を紫色に、緯を白色に織るをいふ也▲かた織物。糸をうかさずして固く織りたるもの。浮織物に對する名也▲二藍の狩衣。下を藍にそめ、上に薄く紅花を附けたるもの▲ひはだ。檜皮の狩衣をいふ。檜皮はそめ色の名也▲むすび狩衣。種々の模樣を糸にて結びつけたるをいふ▲諸大夫。攝家などの家司に補せらるゝ輕き家にて、四位五位を極位とする輩をいふ▲侍。執柄大臣の家人。其の中にて才器あるものを貫人とし諸司諸國の判官主典にも申しなし、五位にもなるがあり。さて又諸太夫との區別は、諸太夫はもとよりの公人なれど侍は始は家人後に公人となりたるにあり▲うばそくの宮云々。源氏物語椎本の卷に宇治にてうばそくの宮より宰相中將の君につかはされたる歌に「山風にかすみ吹きとく聲あれどへだてゝ見ゆるをちの白浪」とある歌をいふ。をちの白浪は遠くよりよせ來る浪をいふ。さて又、うばそくは優婆塞とかきて、在家の男の出家して五戒をたもつをいふ。本文、よろづをりからにやとは、萬事のかくめでたきは二月のよき時候なる上、かくめでたき御幸にあへる故ならんと也▲貞應元年云々。後堀河天皇の貞應元年、左大臣家通、攝政家實の列より退きたてることあり。

文永。亀山天皇年號▲蓮華王院。寶治三年燒亡せしこと烟の末々の卷にあり。其の後造營成りて供養せられたる也▲うへの御ぞ。即ち袍▲平淮后。棟子▲藤のうはぎ。表薄紫裏青なるを云ふ也▲五衣。女官の裝束、單と表衣との間にかさねてきるもの前にもいへり▲午時。今の十二時▲花橘。表朽葉裏青▲松重。表青、裏紫なるをいふ▲念なし。ところなき意。俗にいふ氣がきかぬこと▲將曹。近衛府の主典の如きもの▲妻戸。両方に開く戸也▲院司。上皇御所に奉仕する官人▲亂聲。盛に笛鼓などを合奏するをいふ▲ありし法勝寺にかはらず。昔行はせられし法勝寺供養の時の儀式の如

第八　北野の雪

文永も三年になりぬ。卯月に蓮華王院の供養に御幸あり。一院（後嵯峨）はあか色のうへの御ぞ、新院（後深草）は青色の御袍奉れり。女院（大宮）の御車に平淮后も參り給ふ。人だまひ三輛は、綿入れる五衣なり。御車のしりに仕うまつられたる上蒲だつ人のにや、あはせの五衣、藤のうはぎ、袖口出さる。御幸には、上達部は皇后宮太夫師繼を上首にて十人、殿上人十二人、御隨身ども、藤山吹をつけたり。居飼、御廐舍人まで、世になくきらめきたり。常の見物にすぎたるべし。行幸は當日の午の時ばかりなるに、諸司百官殘るなし。左右大臣、薄色蘇芳なぞなり。右大將通雅、花橘の下襲。權中納言公藤、同じ色左大將家經、蘇芳の下襲、蒲黄の上の袴。侍從中納言爲氏、權中納言通基、左衛門督通頼、衣笠宰相中將經平、これらは皆蘇芳の下襲、蒲黄の上の袴なり。別當高定、宰相中將通持、三位中將實兼、右衛門督師親、殿上人には頭中將具氏、忠秀、この人々は、松重の下襲。藤のうへの袴、同じ色なる念なしとぞ沙汰ありける。具氏は花橘の下襲を着給へりしと申す人も侍りしは、何れかまことなりけん。近衛の將曹二十四人、とりどりいろ〳〵に織り盡したるめでたかりけり。關白殿御車にて參り給ふ。まづ女院の御車、東の廂の北の妻戸へ、左右大臣よせらる。院司の大納言通成、事の由を奏せられて樂屋の乱聲なぞ、常の如し。御寺の儀式、ありし法勝寺にかはらず。御導師は聖基僧正。御方々の引出物ども、いとゆゝしう法師原のたけと等しき程に積み重ねたり。

萬歳樂、地久など賞仰せらる。人々の祿、關白殿には織物の袿一重、藏人頭とりて奉る。大臣には綾の袿、納言は平絹なり。御門新院御對面の儀式など、定めて男の記錄に侍らんかし。御願文の清書は經朝の三位、料紙は紫の色紙、額はかの建て始められし長寛に敎長書きたりけるが、燒けざりければ、この度もそれをぞ用ゐられける。かくて少し人々の心のどかに、うち靜まりて思さるゝに、東に何事にか煩しき事いで來にたりとて、將軍（宗尊親王）七月八日俄なるやうにて御上ありけり。かねては始めて御のりぼあらん時の儀式など、二なくめでたかるべき由をのみ聞きしに、思ひかけぬほどに、いと怪しき御わりさまにて御上あり。御下の折、六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋におちつかせおはしましぬ。この頃東に世の中おさてはからふぬし

しと也。法勝寺供養は白河天皇承暦元年也▲地久。樂の名なり▲袿。衣の上裝束の下に着る服。ひろそでにて大也▲平絹。文なき絹の稱▲男の記錄。漢字の日記をいふ▲願文。漢文にて供養の趣旨を書けるもの▲東に何事にか云々。拾遺を見よ▲二なく。ならびなくの意▲御下の折。內野の雪の卷に見ゆ▲南六波羅。南は兩の誤。さて六波羅は鴨川の東五條六條の間にあり。承久の後北條氏府を六波羅南北の兩所に設け京都の庶政を掌らしむ▲苦しからぬ事。さしかまへなしといふ意▲御母淮后。棟子のこと▲世のつねの御有樣。平常に復したまへるをいふ也▲建長。後深草天皇の年號也

は相模守時宗と左京權大夫政村朝臣なり。時宗といふは時頼朝臣の嫡子。政村とはありし義時の四郎なり。京の南六波羅は陸奥守時茂、式部太輔時輔とぞ聞ゆる。中務の御子の御上のかはりに、かの御子の三つになり給ふ若君達、近衛殿の姫君の御腹ぞかし。七月廿七日に將軍の宣旨かうぶらせ給ひてやがて四品し給ふ。經任の中納言を御使にて、東へ下されなどして、苦しからぬ御事になりぬとて、十月ばかりに、故承明門院の御跡、土御門萬里小路殿へ御移ろひわりて後ぞ、院のうへ、御母淮后なども參り、はじめて御對面あり。さるべき人々も參り仕うまつりなどして、世のつねの御有樣にはなりにけれど、建長四年、御年十一にて御下ありし後、今まで十五年が程、にぎはゝしくいみじうもて崇められさせ給ひて、ゆゝしかりつる御住居にひ

▲虎とのみ。征夷將軍となりてその威勢虎の如くなりしをいふ▲鼠のあなう世の中。鼠の穴に住む如くわびしきすまゐにありと也。穴に歎息の意なるあなをいひかく▲北野の雪。北野は北野社菅公を祀れるより、菅公無實の罪にて筑紫に配流せられたるを思ひよせてなほたのむといひたり▲枯野の眞葛云々。日かげさす枯野の眞葛霜とけて過ぎにし秋にかへる露かな。この歌續古今集に見えたり▲涅槃の儀式を云々。二月十五日は釋迦入滅の日なれば此の日其のさまをうつし行はるる也▲結緣。佛緣を結ぶこと。灌頂は前にあり▲余五將軍。兼忠の子伯父貞盛に養はる。其の第十

さかへて物淋しく心細うなど思さるゝをり〳〵もありけるにや。

虎とのみもてなされしはむかしにて
いまは鼠のあなう世の中。

又雪のいみじうふりたるあした。右近の馬場の方御覽じにおはしまして、よませ給ひける。

なほたのむ北野の雪の朝ぼらけ
荒廢ノ期ナシ　跡なきことにうづもるゝ身は。

などきこえき。大方、この御子の歌の聖にておはします事、皆人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜とけて」なども、人毎にめでのゝしる御歌なるべし。されば世を亂らんなど思ひよりけるものゝふの、此のみこの御歌すぐれてよませ給ふを、よるひるいとむつまじく仕うまつりける程に、自ら同じ心なるものなど多くなりて、宮のみけしきあるやうにいひなしけるとかや。又の年二月には龜山殿の淨金剛院にて、十五日涅槃の儀式をうつし行はせ給ふ。それより五日の御八講に、人々才賢き限をえらびめしけり。大殿にも西八條にて故東山殿の御ために八講行はせ給ふ。關白殿も光明峯寺にて、結緣灌頂とりおこなはる。鷹司殿には、昔の御北の方の十三年の法事とて、大宮殿にていかめしき事どもいとなませ給ふ。中に繪像の阿彌陀、余五將軍の臨終佛なりけるを、惠心の僧都つたへられたりけるをもたせ給ひて供養し給ふ。常の佛の御さまには變り給ひて、化佛の御光など、めでたくおはしましけり。こゝもかしこも、尊き事のみ耳にみちて、功濁とはいひ難し。安嘉門院も、御法事行はる。男も法師もいとまなく、あかれ〳〵まゐり仕うまつらる。佛法

五男に當れるよりかくいへり▲化佛。拾遺を見よ▲功濁。拾遺を見よ▲男も法師も。男は俗人▲あかれあかれ。別々也。各自思々にの意▲東二條院。後深草院皇后。寳氏の二女▲如法經。法華經をうつすを如法經といふ▲十種供養の御經二部。淨土の三部經。齋會。拾遺を見よ▲玉の幡云々。う

のさかりとぞ見えたる。その頃、殿の大將内大臣になり給ひぬ。節會はつるまゝに大饗行はる。尊者には、新大納言爲氏參られけり。御遊など例の事ども面白くなん。今出川中納言實兼も琵琶彈き給ふ。春のあけぼのゝ艶なるに物の音もてはやさるべし。その頃、又東二條院熊野へ御まゐり、めでたかりし事どもゝ、あまりになればさのみはにて漏しつ。かくて四月廿三日より院のうへは、又龜山殿にて御如法經あそばす。女院もかゝせおはしましけり。五月廿三日、十種供養の御經二部、淨土の三部經もかゝせ給へり。齋會の御ありさまはいつよりもなほいみじ。時なりて寢殿の御しつらひ、淨土の莊嚴もかばかりにこそと見えて、玉の幡、瑠璃の天蓋、天に光をかがやかし、金銀のかざり地を照せるさま、筆も及び難し。上達部左右につき給ふ。左

つくしきさまをいふ也▲盤渉調。音樂の調子の名▲天童。天人のよそほひしたる兒童▲傳供。供物を手より手に傳へ供ふる也▲鳥向樂。一名青海波。唐土傳來の樂▲中島。池の中島▲宗明樂。秋風樂。ともに樂の名。宗明樂は舞なし▲めしうど。寵愛ある妾をいふなり

大納言二位殿のことなり▲大臣基平、内大臣家經、大納言は良敎、資季、通成、師繼、通雅、中納言は公藤、長雅、通敎、經俊、宰相は時繼、資平、宗雅、雅言、具氏など候はる。盤渉調の調子を吹きて、天童一人、玉の幡をさゝげて傳供ども、次第に奉る程、鳥向樂を吹き出したり。中島に樂屋はかざられたれば、橋の上を樂人列ねて參る程、院の上も出でさせ給ひて、傳供に立ち加はらせおはしますの御さま、いとかたじけなくめでたし。關白殿、太政大臣、左大臣、内大臣皆傳供に從はせ給ふ、宗明樂、秋風樂を奏して、繰り返したる程、面白き事、身の毛だつばかりなり。御前の御遊には笙は公藤、通賴、房名、宗雅、笛は長雅、師親、相保、篳篥は實成朝臣、光顯。御琵琶は新院、今出川中納言實兼、富小路三位公成、箏大納言二位殿、院のうへこの頃又なき御めしう

故入道相國。公經。相國は太政大臣をいふ▲彌勒菩薩。彌勒は菩薩の名。彌勒菩薩も云々とは法會の壇に安置せる尊像の一についていへる也▲横川。比叡山延暦寺の三塔の一又楞嚴院と號す▲かく同じ御心に。大宮女院後嵯峨上皇と御心を同じくして佛法に勤めらるゝをいふ▲光明皇后。拾遺を見よ▲齋宮。拾遺を見よ▲祭主。伊勢祭官の長▲御くだり。京都より伊勢に下向あること▲ふるき例にまかせて。拾遺を見よ▲殿上。齋宮御所の殿上▲裳。袴の上に着るもの女官の裝束▲舞踏。喜の禮をのぶる儀▲けどほき。近づき難きさまをいふ▲日野山庄。山城國宇治郡也▲螺鈿の御臺。拾

ど、故入道相國の御女とぞ聞えし。又刑部卿中宮の御母少納言、新兵衛、男には良敎の大納言などぞひかれける。勝れたる上手どもの、手を盡し給ひけんは、彌勒菩薩もいかばかりゑみを含み給ひけん。御經一部は北野の社へ御奉納あり。今一部と三部經は八幡へ御幸ありて籠め奉らせ給ふ。女院の書かせおはしましたるは横川にぞこめられける。かく同じ御心に、佛法の御いとなみも、やんごとなくのみおはしますこそ、聖武天皇光明皇后の御ためしにやとありがたく承りしか。今年五月雨常よりも晴間なくて、伊勢の宮河も岸をひたして齋宮の御まゐりも御船なり。祭主も別の船にて御供つかうまつる。道すがら歌うたひ、絲竹のしらべなどして、おもしろく遊びくらす。御くだりの後、四とせになりぬ。ふるき例にまかせて淮后の宣旨まゐる。御使に中院の少將爲定朝臣下りて、事の由申す。殿上に召して、裝、唐衣、祿たまふ。舞踏してのち、都の物語など然るべきをとなだつ人々に、少し聞えかはす。艶なる心地して、ただの宮腹ならば、はかなし事なども聞えぬべけれど、かうがうしくけどほき御ありさまなればすくよかにてまかでぬ。その年九月の頃、左の大臣殿近衛の日野山庄へ、一院、新院、大宮院御幸あり。世になささよらをつくさる。銀金の御皿ども、螺鈿の御臺、うち敷、見なれぬ程の事どもなり。院の御分、御小直衣、皆具、夜の御衾、白御太刀、御馬二疋、唐綾、魚綾などにて、二階つくられて、御双子箱、御硯は、世々を經て重き寶の石なり、管絃の御厨子、樂器、いろ〳〵の綾錦などにて造りておかる。女院の御かた、新院の御分なども同じ樣なり。大納言二位殿にも

遺を見よ▲小直衣。同じく拾遺に就いて見るべし▲白御太刀。銀の御太刀▲唐綾。唐より渡れる綾▲魚綾。綾の一種▲二階つくる。御厨子棚をおくこと▲双子箱。拾遺に出せり▲世々を經て云々。御代代傳へ來れる重寶の硯▲御厨子。拾遺を見よ▲馬牛ひかる。引出物とすること▲童舞。白拍子。田樂。拾遺を見よ▲安養壽院。山城愛宕郡▲觀法。坐禪して眞理を觀念すること也▲鳴子。ひだともいふ。鳥を追ふ爲に田畠などにたてあるもの。こゝは侍女を召さるゝ時の具にせられし也▲ひとつ御方。二條富小路殿に御一所にあらせらる也▲下りながる。盃のめぐるをいふ▲けしうは云

裝束、まもりの筥まで、いとなまめかしう清らなるものどもぞありける。上達部殿上人にも馬牛ひかる。銀のかたみを五つくませて、松茸入れらる。山へ皆入らせおはしまして、御らんの後、御かはらけ、幾返となく聞し召せば、人々も醉ひ乱れ、さまざまにて過ぎぬ。その同じ頃、安嘉門院、丹後の天の橋立御覽じにとておはします。それより但馬の城崎の温泉めしに下らせ給ふ。爲家の大納言、光成の三位など、御供仕うまつらる。この女院の御ありさまぞ、又いとみじう、來し方行くすゑのためしにもなりぬべく、萬の事御心のまゝに、このもしく物し給ひける。童舞、白拍子、田樂などいふ事好ませ給ひて、古の郁芳門院にもやゝまさりてぞおはします。候ふ人々も、常にうちとけず、衣の色あざやかに、はなばなと、今めかしき院の内なり。又安養壽院といひて、山の峯なる御堂には常にたてこもらせ給ひて、御觀法などあるには人の參る事もたやすくなし。鳴子をかけてひかせ給ひてぞ自ら人をも召しける。又その頃にや、秋の雨日頃ふりて、いと所せかりしに、たま〳〵雲間見えて、空の氣色物すごき程に、一院、新院、大宮院、東二條院など皆ひとつ御方におはします。御前に太政大臣公相、常盤井入道殿實氏も候ひたまふ。前の左の大臣實雄、久我大納言雅忠など（御外戚ノ人々）どうとからぬ人々ばかりにて、大御酒まゐる。あまた下りながれて、上下すこしうち乱れ給へるに、太政大臣、本院の御盃をたまはり給ひて、もちながら、とばかりやすらひて「公相官位共に極め侍りぬ。中宮（今出川院）さておはしませば、もし皇子降誕もあらば、家門の榮花衰ふべからず。實兼も、けしうは侍らぬを

のこなり。後めたくも思ひ侍らぬに、一のうれへ、心の底になん侍る」と申し給へば、人々「何事にか」と覺束なく思す。左の大臣實雄は中宮の御事かく宣ふをいでやと耳にとまりて、うち思さるらんかし。一院「何事にか」と宣ふに、しばしありて「入道相國（父淸氏）にいかにも先立ちぬべき心地なんし侍る。恨の至りてうらめしきは、さかりにて親に先立つうらみ、悲の至りてかなしきは老いて子に後るゝには過ぎずとこそ、澄明におくれたる願文にも書きて侍りしか」など申し給ひて、うちしほたれ給へば皆いとあはれに聞きおぼす。入道殿はまして墨染の御袖ぬらし給ひける。ことわりなりかし。又その頃、大風ふきて、人人の家々、そこなはれ失する事數知らぬ中に、明堂殿もまろびぬ。この内には、木にて人形を作りて宮殿を金にて作りて入れ

寶物の明堂圖といふを納めおく所▲陰陽寮の守護神。陰陽寮に祀れる神▲文珠樓。延曆寺東塔にあり▲稻荷の中の宮。山城紀伊郡。即ち伏見稻荷神社▲重き人。帝王大臣をさす▲なやましくす。病にかかれるをいふ▲御服にて出で給ひぬ。御忌服にて禁中を下られたるをいふ▲中宮をも。中宮の

たる寶あり。眼をあてゝは見ぬものなり。自らもあやまりて見つる人は目のつぶれけるぞおそろしき。陰陽寮の守護神の社もまろびぬ。山の文珠樓、稻荷の中の宮なども、吹き損ひて、すべて來しかた行くすゑもためしありがたき風なり。西國の方には、人の家をさながら吹きわぐれば内なる人は、ちりのやうにおちて、死に失せなどしけるぞ、めづらかなる。あまりにかくおびただしき風なれば、御占行はれけるにも、重き人の御つゝしみ、輕からぬなど奏しけり。果してその頃、西園寺の太政大臣（公相）なやましくし給ふとて、山々寺々、修法讀經、祭祓など、かしがましくひびきのゝしりつれど、それもかひなくて、十月十二日失せ給ひぬ。入道殿を始め、思し歎く人々數知らず。中宮も御服にて出で給ひぬ。北の方は德大寺の太政大臣（實基）の御女